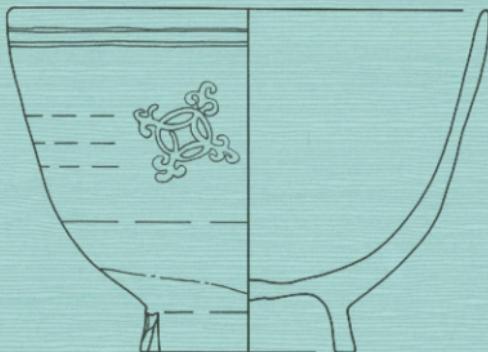


尾 戸 窯 跡

—共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2007. 3

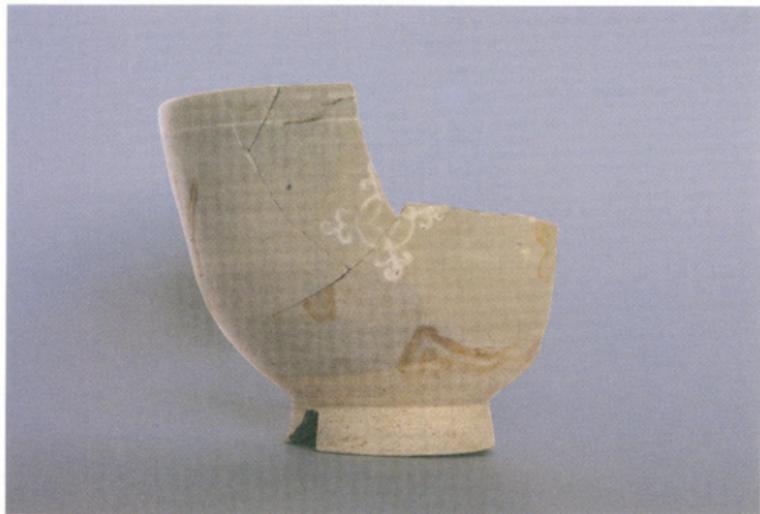
高知市教育委員会

尾 戸 窯 跡

—共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007. 3

高知市教育委員会



陶器碗 (239)



陶器碗 (192)



陶器碗、皿、蓋



陶器碗



窯道具，器種不明

序

承応2（1653）年、二代藩主山内忠義の時代、執政野中兼山により大阪から招請された久野正伯が、高知城北西の丘に窯を設け、焼成にあたったのが尾戸焼の始まりです。その技は正伯から森田久右衛門らに受け継がれ、さらに鳳雅な名品が次々と生み出されていきます。そして、贈答用の茶器などは各地へともたらされ、高い評価を得ることとなりました。

この度、窯跡の近傍に立地する場所で共同住宅の建設が計画されたことから、高知市教育委員会では、平成15（2003）年に試掘確認調査を行いました。その結果、近世の窯跡の遺構は失われていたものの、かつて尾戸窯で焼かれた夥しい陶器片等を採取することができました。それらは小片とはいえ、かつての尾戸焼の最盛期を彷彿とさせる遺品を多く含んでいました。そして、これまで不明であった江戸時代の尾戸焼の姿が解き明かされることになり、多くの成果を得ることができました。

この報告書が高知市の歴史の一端に光を当て、「幻の名器」とされてきた尾戸焼の理解への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成19年3月

高知市教育委員会

例　言

1. 本書は、高知市教育委員会が平成15年度に実施した民間の共同住宅建築工事に伴う尾戸窓跡試掘確認調査の報告書である。
2. 調査対象地は、高知市丸の内2丁目97に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成16年度から18年度にかけて行なった。

平成15年8月18日～22日、調査面積88m²

4. 調査体制は以下の通りである。

調査主体 高知市教育委員会

調査事務 同 生涯学習課主査 門田麻香

調査担当 同 生涯学習課指導主事 田上浩、梶原端司

5. 調査にあたっては株式会社未来ハウスの協力を得ることができた。

6. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

〔発掘作業〕大賀幸子

〔整理作業〕井澤久美 大賀幸子 大野佳代子 岩崎佐枝

7. 本書の執筆と編集は浜田恵子（生涯学習課指導主事）が行った。現場写真は田上浩、遺物写真は梶原が撮影した。

8. 本報告書を作成するにあたっては、土器、陶磁器の資料調査について、古泉弘（東京都教育庁生涯学習部文化課）、堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）、大成可乃（同）、千葉豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）、金沢陽（出光美術館）、竹村脩（日本陶磁協会高知県支部）及び文字資料の解説について、篠田充男（高知市民図書館）はじめ諸氏のご教示、ご協力を賜った。（敬称略）

9. 掲載している平面図の方位は真北である。なお、巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。

10. 出上遺物は高知市教育委員会が保管している。注記の略号は「OD-03」である。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の方法	7
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 基本層序	8
第2節 遺構と遺物	10
第3節 尾戸窯跡関連の遺物	22
1. 陶器	
(1) 瓶、小杯、碗蓋	22
(2) 盆	46
(3) 鉢	51
(4) 箸口、高杯、捏鉢	53
(5) 鍋、土瓶、釜類	56
(6) 蓋、蓋物、段重	56
(7) 水指、香炉、火入れ	58
(8) 鳥の水入れ、餌猪II	58
(9) 髪水入れ、水滴、筆筒、風鉢	60
(10) 瓶類	60
(11) 壺、甕	61
(12) 灯明受皿、燭台、火鉢、焜炉	62
(13) 器種不明	62
2. 土師質土器	
(1) 小皿	64
(2) 杯	68
(3) 手捏土器、器種不明	68
3. 窯道具、その他	
(1) 匣鉢	68
(2) トチン	76
(3) ハマ	82
(4) 焼き台、匣蓋、その他	85
(5) 円錐ピン、団子トチ、その他	88
(6) 窯道具又は窯体の部材、型	88
第Ⅴ章 考察	
第1節 近世尾戸窯の操業と製品製作	124
第2節 尾戸窯跡出土資料の検討	134
第3節 消費地遺跡出土の尾戸焼とその製品流通	144

挿図目次

Fig. 1 尾戸窓跡調査区位置図	1
Fig. 2 旧江の口川推定位置図	4
Fig. 3 寛文九年高知城下図	5
Fig. 4 享和元年高知御家中等施図	5
Fig. 5 尾戸窓跡及び周辺の遺跡	6
Fig. 6 トレンチ位置図	7
Fig. 7 TPI～5セクション図	9
Fig. 8 TP1出土の遺物(1)	11
Fig. 9 TP1出土の遺物(2)	12
Fig.10 TP2出土の遺物	14
Fig.11 TP3出土の遺物	15
Fig.12 TP4出土の遺物(1)	16
Fig.13 TP4出土の遺物(2)	17
Fig.14 TP4出土の遺物(3)	18
Fig.15 TP5出土の遺物	20
Fig.16 TP6・7出土の遺物	21
Fig.17 出土遺物実測図 碗(1)	23
Fig.18 出土遺物実測図 碗(2)	24
Fig.19 出土遺物実測図 碗(3)	25
Fig.20 出土遺物実測図 碗(4)	26
Fig.21 出土遺物実測図 碗(5)	27
Fig.22 出土遺物実測図 碗(6)	28
Fig.23 出土遺物実測図 碗(7)	29
Fig.24 出土遺物実測図 碗(8)	31
Fig.25 出土遺物実測図 碗(9)	32
Fig.26 出土遺物実測図 碗(10)	34
Fig.27 出土遺物実測図 碗(11)	35
Fig.28 出土遺物実測図 碗(12)	36
Fig.29 出土遺物実測図 碗(13)	38
Fig.30 出土遺物実測図 碗(14)	39
Fig.31 出土遺物実測図 碗(15)	41
Fig.32 出土遺物実測図 碗(16)	42
Fig.33 出土遺物実測図 小碗、小杯	44
Fig.34 出土遺物実測図 碗蓋	45
Fig.35 出土遺物実測図 皿(1)	47
Fig.36 出土遺物実測図 皿(2)	48
Fig.37 出土遺物実測図 皿(3)	50
Fig.38 出土遺物実測図 鉢(4)	52
Fig.39 出土遺物実測図 鉢(1)	53
Fig.40 出土遺物実測図 鉢(2)	54

Fig.41	出土遺物実測図 猪口, 高杯, 鉢, 捏鉢, 土鏡, 土瓶, 釜類	55
Fig.42	出土遺物実測図 蒸, 蓋物, 段重, 水指, 香炉, 火入れ, 器種不明	57
Fig.43	出土遺物実測図 烏の水入れ, 飼猪口, 鬢水入れ, 水滴, 筆筒, 風鈴	59
Fig.44	出土遺物実測図 瓶類, 花生, 茶入, 瓶蓋	60
Fig.45	出土遺物実測図 壺, 壺	61
Fig.46	出土遺物実測図 灯明受皿, 燭台, 火鉢, 暖炉	63
Fig.47	出土遺物実測図 器種不明	64
Fig.48	出土遺物実測図 土師質土器小皿	65
Fig.49	出土遺物実測図 土師質土器小皿, 杯, 器種不明	67
Fig.50	出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(1)	69
Fig.51	出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(2)	70
Fig.52	出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(3)	71
Fig.53	出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(4)	72
Fig.54	出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(5)	73
Fig.55	出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(6)	74
Fig.56	出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(7)	75
Fig.57	出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(8)	76
Fig.58	出土遺物実測図 窯道具一トチン(1)	78
Fig.59	出土遺物実測図 窯道具一トチン(2)	79
Fig.60	出土遺物実測図 窯道具一トチン(3)	80
Fig.61	出土遺物実測図 窯道具一トチン(4)	81
Fig.62	出土遺物実測図 窯道具一トチン(5)	82
Fig.63	出土遺物実測図 窯道具一ハマ(1)	83
Fig.64	出土遺物実測図 窯道具一ハマ(2)	84
Fig.65	出土遺物実測図 窯道具一ハマ, 坪蓋	86
Fig.66	出土遺物実測図 窯道具一焼き台, チャツ, 用途不明	87
Fig.67	出土遺物実測図 窯道具一円錐ビン, その他	88
Fig.68	出土遺物実測図 窯道具, 窯体の部材, 型, 用途不明	89
Fig.69	消費地遺跡出土の尾戸焼(1)	152
Fig.70	消費地遺跡出土の尾戸焼(2)	153
Fig.71	消費地遺跡出土の尾戸焼(3)	154
Fig.72	消費地遺跡出土の尾戸焼(4)	155
Fig.73	消費地遺跡出土の尾戸焼(5)	156
Fig.74	消費地遺跡出土の尾戸焼(6)	157
Fig.75	消費地遺跡出土の尾戸焼(7)	158
Fig.76	消費地遺跡出土の尾戸焼(8)	159

写真図版目次

PL 1 尾戸窯跡碑と遺跡風景(南より), 尾戸窯跡遠景(北西より)	163
PL 2 調査区風景(北より), TP1石列検出状況(南より)	164
PL 3 TP1南壁セクション, TP2東壁セクション	165
PL 4 TP3北壁セクション, TP4北壁セクション	166
PL 5 TP2遺物出土状況, TP1石列検出状況	167
PL 6 陶器碗	168
PL 7 陶器碗, 蓋, 盆, 高杯, 壺, 灯明受皿	169
PL 8 陶器碗	170
PL 9 陶器碗	171
PL10 陶器碗	172
PL11 陶器碗	173
PL12 陶器碗	174
PL13 陶器碗	175
PL14 陶器蓋, 盆	176
PL15 陶器皿	177
PL16 陶器皿	178
PL17 陶器皿, 鉢	179
PL18 陶器鉢, 猪口, 捏鉢	180
PL19 陶器蓋, 鋼, 釜類	181
PL20 陶器蓋, 蓋物, 段重, 火入れ, 香炉	182
PL21 陶器鳥の水入れ, 器種不明, 養水入れ, 筆筒, 水滴, 花生, 風鈴, 瓶類	183
PL22 陶器茶入, 蓋, 壺, 壺, 灯明受皿, 火鉢, 捏炉, 煙台, 器種不明	184
PL23 土師質土器小皿, 杯, 器種不明, 手捏土器	185
PL24 窯道具トートン, 匂鉢	186
PL25 窯道具一匣鉢	187
PL26 窯道具一匣鉢, トチン	188
PL27 窯道具トートン, ハマ	189
PL28 窯道具一ハマ, チャツ	190
PL29 窯道具その他一焼き台, 色見孔塞ぎ蓋, 用途不明, 瓢	191

表目次

Tab.1~33 遺物観察表	91~123
Tab.34 尾戸焼製作記録	132
Tab.35 陶器の器種別出土点数と組成比	136

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

尾戸窯跡は承応2年(1653)に開かれた土佐藩の藩窯跡である。窯場は城の北側にあたる尾戸に置かれ、文政5年(1822)に藩窯が能茶山に移転するまでの約170年間にわたって、尾戸の窯場での陶器製作が営まれた。遺跡は大正末から昭和初年にかけて行なわれた江の口川改修工事によって北側の大部分が破壊されているが、現在の江の口川の北岸と南岸に広がる宅地の地下にはその一部が残存しているとみられ、南岸沿いでは過去の工事の際等に地下から尾戸焼の陶片や窯道具が出土している。中でも昭和30年代に行なわれた江の口川南岸でのビル建設工事に際しては、当時の研究者らによって工事対象地内での確認調査が行われており、その際、多量の陶器片や窯道具の出土が確認されている。

2003年5月、遺跡の推定区域内において民間による共同住宅建築が計画され、それに伴う埋蔵文化財発掘の届け出が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対し提出された。これを受けて高知市教育委員会では8月18日から22日にかけて試掘確認調査を実施し、その結果、設定した7箇所の試掘坑において尾戸窯関連の遺物を含む近世遺物を確認した。

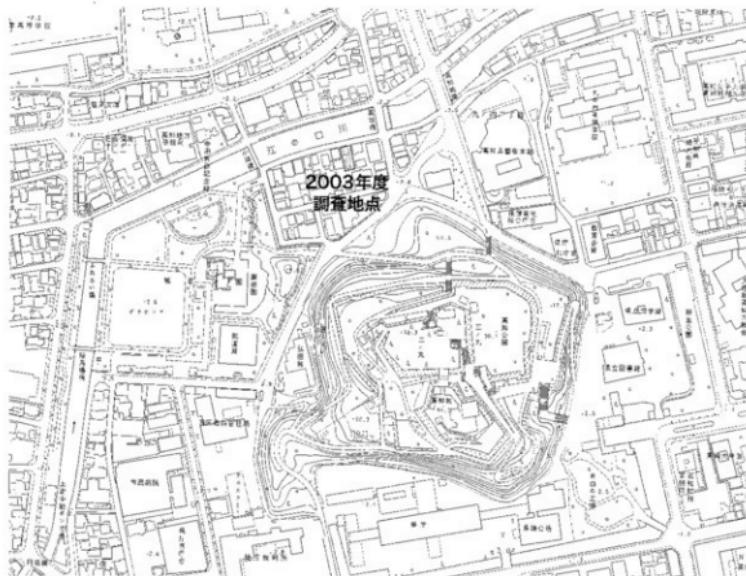


Fig.1 尾戸窯跡調査区位置図 S=1/5,000

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

尾戸窯跡が立地する高知市の中心市街地は、北方を標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帶状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在する。河川では、鏡川が市の西北部から湾曲しながら東流して浦戸湾に注ぎ、南国市北部及び香美市西部域からは国分川が西流し、江の口川、舟入川を合わせて浦戸湾に注いでいる。この平野部は北部山地と南部山地との間の古浦戸湾が、その後鏡川などの堆積によって成立した低地である。

現在の市街地は、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であり、近世以降、干拓による埋め立などによってほぼ現在の状態となった。平野部には鏡川、久万川、国分川、舟入川、江の口川、下田川が注ぐ浦戸湾が内陸深く入り込み自然の良港となっていたが、尾戸窯はこのうちの江の口川北岸に接し、近世には交通至便の立地環境にあったといえる。

なお、高知市の南西部にある能茶山は高さ約23m面積57,000m²の小丘であり、近世には尾戸窯の粘土採取地として利用された。地質は、砂岩・珪岩より構成される古生層と、石英・長石類の砂及び砂質粘土からなる更新世形成層からなり、山の東西両端には古生層が露出している。^(註1)

2. 歴史的環境

周辺の遺跡

高知市中心部付近での旧石器時代の遺跡はまだ発見されていないが、縄文時代になると、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、長浜チドノ遺跡から縄文前期の羽島下層式土器、正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の舟元I式土器や砾石鏟、縄文後期～晩期の条痕文土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する。また、柳田遺跡では弥生前期の大槻式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地するからーと山遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛2本が池地区の長崎より、県下唯一の有柄式石剣と片刃石斧が北秦泉寺より出土している。また、尾戸遺跡からも弥生前期の大型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代に入ると北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳、2号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群や、塚ノ原古墳群が存在する。また、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡など、より低地での遺跡が確認され始める。

古代では、白鳳～奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廐寺がある。この他にも、高知学園裏遺跡や東久万池田遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡等が知られている。記録の上では、高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて、南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺城跡など、多くの山城が丘陵部に立地するようになる。大高坂城跡は南北朝期に大高坂山にあった大高坂氏の居城であるが、永禄年間頃に長宗我部氏に敗れ、長宗我部氏の支配下となる。近年の高知城跡発掘調査では、長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。

近世城下町の成立と尾戸窯

関ヶ原合戦後、土佐には山内氏が入国し、慶長8年(1603)には山内一豊が新城に入城した。城下町は城の麓に内堀を巡らし、南の鏡川と北の江の口川を外堀とし、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江の口川より南に金子橋、築屋敷に至る線を外堀とし、それに囲まれる区域を上級・中級武士の屋敷地である郭中とした。また、その東西には下級武士屋敷と町屋が配置された。高知城の北側を東西に走る江の口川は、左岸に「大川筋」(かつては大川ぶち)の地名を残していることから、当時はかなりの大川であったことが推察されるが、近世以降は高知城の外堀の役割を果たす他、浦戸湾と城下を結ぶ運河として利用され経済的な役割を果たしていた。

「尾戸」はこの江の口川の北岸にあたる地名で、『南路志』^(注2)には「尾戸、古名小津」とあり、「越后又兵衛はへとも云いて昔は海也、当國大津は今の大津村也、中津は今之愛宕山の西也、小津は今之尾戸也」と記されていることから、尾戸はかつての浦戸湾に沿う港であったことが分かる。また「小津村」の名称については、文明6年(1474)8月1日付の江の口村熊野權現鰐口銘に「大高坂郷小津村」の名がみえている。近世に至って、尾戸は山内家臣の居宅が並ぶ武家地となり、ここに藩窯である尾戸窯が置かれた。

尾戸窯は承応2年(1653)、2代藩主忠義の命により開窯された。開窯にあたっては、撰州高津、高原焼の陶工であった久野正伯が土佐に招かれ、築窯と初期尾戸窯での製作にあたった。森田久右衛門と山崎平内は正伯の元でその技法を学び、正伯帰郷の後は両人が尾戸焼の製作を行なった。以降、尾戸窯では森田家と山崎家が藩窯での製作に代々従事している。尾戸窯では、藩の御用品や贈答品が製作されるとともに、販売品の製作も行なわれた。また、尾戸焼の原料として、城下の南西にある能茶山から粘土が採取され、釉薬には薊野山の丸山石が利用された。

『森田家古記録』によれば、この後、享保12年(1727)の大火によって尾戸窯場は焼失し、元文4年(1739)に新たな窯場が再建されたとある。また、文政3年(1820)には藩の磁器窯と陶器窯が能茶山に開かれており、藩窯経営の主力が磁器生産に移るとともに、尾戸の窯場も文政5年(1822)に能茶山に移転することとなる。

開窯初期からの窯場は、城の北側にあたる尾戸にあった。寛文9年(1669)の『寛文九年高知城下図』(Fig.3)によれば、初期の窯場は南に屈曲して迂回する江の口川の北側にあり、「焼物師」の文字とともに作業場とみられる建物と登り窓の絵が描かれている。また、承応3年(1654)『忠義公書状』の書面には「焼物いたし候釜、江之口お戸之小山にうたせ...」ともあることから、当時の尾戸窯場は江の口川に面した丘陵上に立地していたことが分かる。しかし、享和元年(1801)の『享和元年高知御家中等龜図』(Fig.4)では、窯場は初期の位置から南東側に移動し、江の口川北岸に描かれている。この尾戸窯場の移転時期については、大火があった元禄11年(1689)と享保12年(1727)の諸説があるが^(注3)、元禄11年での尾戸窯焼失の記録は見つかっておらず、『森田家古記録』享保12

年（1727）2月1日の記事に「越前町より出火、御城内御家中新町迄焼失の事、尾戸焼物所悉焼失の事…」の内容を確認できるのみである。

なお、江の口川は大正末から昭和初年にかけて3年計画で改修工事が実施され、高坂橋北岸の屈曲部を削って直流とされた。この時の工事によって尾戸窯跡はその大部分が破壊され、遺跡は新たな川筋によって北岸と南岸に分断されている。ただし、遺跡の南部部分は川の南岸に残ったとみられ、これまでにも江の口川南岸から関連遺物の出土が確認されている（Fig.2-B地点）。（註4）今回の2003年度調査地点（Fig.2-A地点）は、旧江の口川の推定位置図（Fig.2）からみると、『享和元年高知御家中等龜図』にみえる再建後の第2次窯場により近い位置にある。したがって、今次調査地点では特に、17世紀末～18世紀前葉頃から、窯場が能茶山に移転する文政5年（1832年）までの間に操業した第2次尾戸窯に関わる製品が多く含まれていることが予想されよう。

【註】

- 1) この能茶山の粘土鉱床は、山の最上部が淡褐色粘土層、その下に灰色粘土層、最下部に暗灰色粘土層があるが、現在は良質の粘土は殆ど採掘され、現在使用している粘土は礫が多いものである。「高知県の粘土資源について」『高知県工業試験場研究報告第2号』1968年高知県工業試験場
- 2) 『南路志』は文化12年（1815）編纂。『土佐国史料集成－南路志』高知県立図書館1991年
- 3) 丸山和雄氏は『皆山集』に収められた元禄11年（1698）頃の絵図ではすでに窯場の位置が初期の場所から南東方向へ移っていることを指摘され、元禄11年の大火によって窯場の移転が行われた可能性を挙げておられる。丸山和雄『土佐の陶磁』雄山閣出版1973年
- 4) 昭和30年代にビル建設工事が計画された際、当時の研究者らによって調査が行われ、製品や窯道具等多くの出土遺物が得られている。

【参考文献】

『高知県の地名』平凡社1983年

『高知市史上巻』高知市1958年



Fig.2 旧江ノ口川推定位置図

（図は『史跡・高知城跡整備計画』高知県教育委員会2004年掲載の「高知城建物配置図」より引用し、一部加筆。）



Fig.3 宽文九年高知城下図
(高知市民図書館所蔵のものを活字化。『高知城下町読本』より引用。)

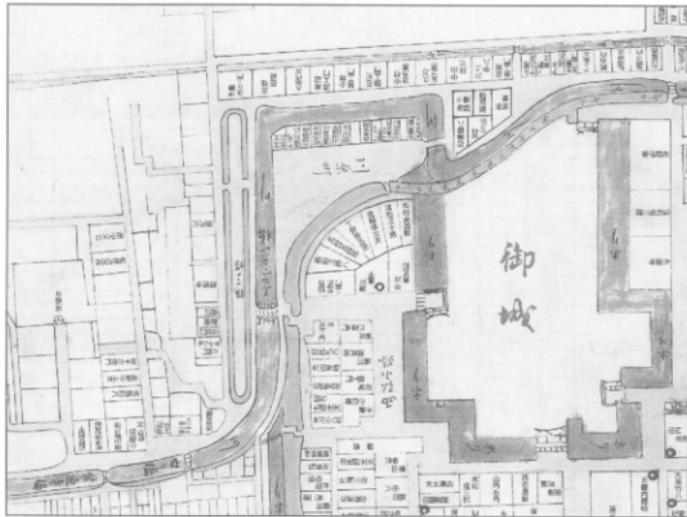


Fig.4 享和元年高知御家中等龜図
(安芸市歴史民俗資料館所蔵のものを活字化。『高知城下町読本』より引用。)



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
8	鷺田遺跡	繩文～古墳	43	高知御園系遺跡	弥生～古代	73	西条泉寺遺跡	古墳
16	舟岡山遺跡	弥生	44	稚井西城跡	中世	74	秦皇寺別城跡	中世
17	舟岡山古墳	古墳	45	稚井中城跡	中世	75	秦皇寺塚跡	古代
18	舟岡山古墳	中世	46	稚井元尼城跡	中世	76	十石の前古墳	古墳
19	ケジカ塚遺跡	弥生	47	樋内遺跡	弥生	77	前里城跡	中世
20	高座古墳	古墳	48	からーじ城跡	弥生	78	宇津野2号墳	古墳
21	雙尾城跡	中世	49	稚井朝城跡	中世	79	宇津野1号墳	古墳
22	鷺泊横行古墳群	弥生～中世	50	稚井古墳	古墳	80	宇津野遺跡	繩文
23	シルクニ遺跡	弥生・古代	52	中の谷遺跡	弥生	81	秦皇寺新屋敷古墳	古墳
24	高神遺跡	古墳・古代	53	萬保保子城跡	中世	82	片原遺跡	古代
25	海田遺跡	弥生～中世	55	船井遺跡	繩文～中世	83	伝兼谷遺跡	古代～中世
26	海田ムク人遺跡	弥生～中世	56	初月遺跡	弥生	84	駒野遺跡	古氏
27	鶴部城跡	中世	57	万々城跡	中世	85	日の岡古墳	古墳
28	加治原城跡	古代～中世	58	北森城跡	中世	86	北秦皇寺遺跡	弥生
29	鶴部遺跡	弥生	60	南御室城跡	近世	87	勝谷古墳	古墳
30	神田旧城跡	中世	61	中島町遺跡	古墳	88	秦皇寺城跡	中世
31	能美山窯跡	古世	62	国岡城跡	中世	89	秦皇寺仁舟田神社裏古墳	古墳
32	石立城跡	中世	63	大高坂山城跡	中世	90	前野城跡	中世
33	久寿峰ノ丸遺跡	弥生～中世	64	弘人屋敷跡	近世	106	竹林寺	古代
34	小石木町遺跡	弥生	65	常陸町遺跡	古墳	133	一宮城跡	中世
35	小石木山古墳	古墳	66	尾戸山城跡	弥生	135	一官別城跡	中世
36	漁江城跡	中世	67	尾戸空跡	近世	137	一宮2号墳	古墳
38	上本宮町遺跡	弥生	68	安樂寺山城跡	中世	139	土佐神社西遺跡	古代～中世
39	約田城跡	古墳	69	東久万圓山遺跡	古代～中世	146	高知城下居跡	古墳～後世
40	井口1城跡	中世	70	愛宕不動堂前古墳	古墳	147	柏原山城跡	中世
41	塚の原1号墳	古墳	71	愛小学校廢古墳	古墳			
42	塚の原2号墳	古墳	72	愛宕神社裏古墳	古墳			

Fig.5 尾戸窯跡及び周辺の遺跡（地図:S=1/50,000）

第Ⅲ章 調査の方法

試掘調査は平成15年8月18日から22日まで実施した。調査にあたっては対象地内に7箇所の試掘トレンチを設定し、表土下1.0~1.6mの深度まで堆積状況の確認を行った。トレンチの設定位置については、まず対象地の3箇所にTP1~TP3を設定し堆積状況の確認を行ったところ、対象地の東側部分から遺物が多く出土したため、さらに対象地東側部分へTP4~TP7を設定し遺物の採集につとめた。

掘削は表土、擾乱層、無遺物層は機械力(ユンボ)を用い、遺物包含層の掘削と検出作業は人力によった。試掘トレンチの位置は平板で測量し、層序についてはセクション図を作成した。

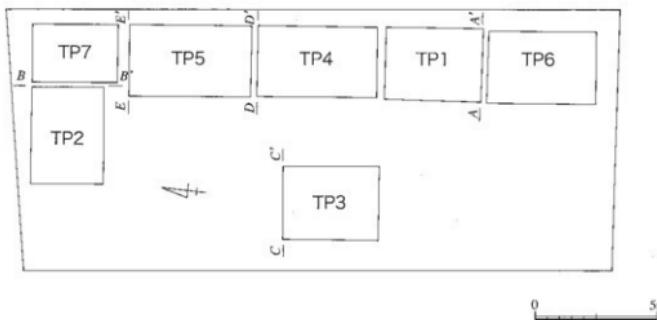


Fig.6 トレンチ位置図

第IV章 調査の成果

第1節 基本層序

試掘坑TP1の南壁、TP2の東壁、TP3・4・5の北壁において堆積状況を観察した。基本層準は次の通りである。

1層(1-1～5層):灰褐色シルト、灰褐色シルト質砂、灰褐色砂質シルト、灰褐色砂礫、他

2-1層:灰色砂質シルト(2～3cm大の礫を含む。)

2-2層:灰色シルト(2～3cm大以下の礫を少量含む。)

2-3層:灰色粘質シルト(2～3cm大以下の礫を少量含む。)

2-4層:暗灰色シルト

2-5層:褐灰色シルト

2-6層:青灰色シルト

3層:灰色砂礫

1層(1-1～5層)は近・現代以降の整地層及び攪乱層であるが、堆積層中には近・現代の遺物とともに、窯道具、尾戸焼などの尾戸窯関連の廃棄遺物を多く含んでいる。下位に堆積する2層(2-1～6層)は灰色砂質シルト、灰色シルト、灰色粘質シルト等からなる堆積層で、炭化物と近世の遺物を含む。3層は円礫と粗砂を多く含む灰色砂礫層であり、ほぼ無遺物である。

現在、調査区の北側を流れる江の口川は、大正末年から昭和初年の改修工事によって東西直進方向へ流路を変更されたものであり、近代以前には調査区のすぐ南側を江の口川が蛇行して流れていった。そのため、近・現代整地層直下の層位では、河川堆積に伴うとみられる灰色砂質シルト層、灰色シルト層、灰色粘質シルト層(2層)、灰色砂礫層(3層)が確認されている。2層は出土遺物の内容からみて、近世の堆積層と考えられ、この2層から1層(攪乱層)にかけて尾戸窯関連の遺物が多く出土している。

ただし各試掘坑のうち尾戸窯関連遺物の出土量が特に多かったのは調査区東部に設定されたTP1・2・4～7であり、西側に設けられたTP3では遺物の出土が東側のみに偏り出土量も激減する状況であった。過去には本調査区東側でのビル建設工事の際にも尾戸窯関連遺物が多く出土しており、こうした状況を考えあわせると、尾戸窯に関わる廃棄遺物の分布の中心は本調査区中央より東側に向かって広がっていた可能性が高い。

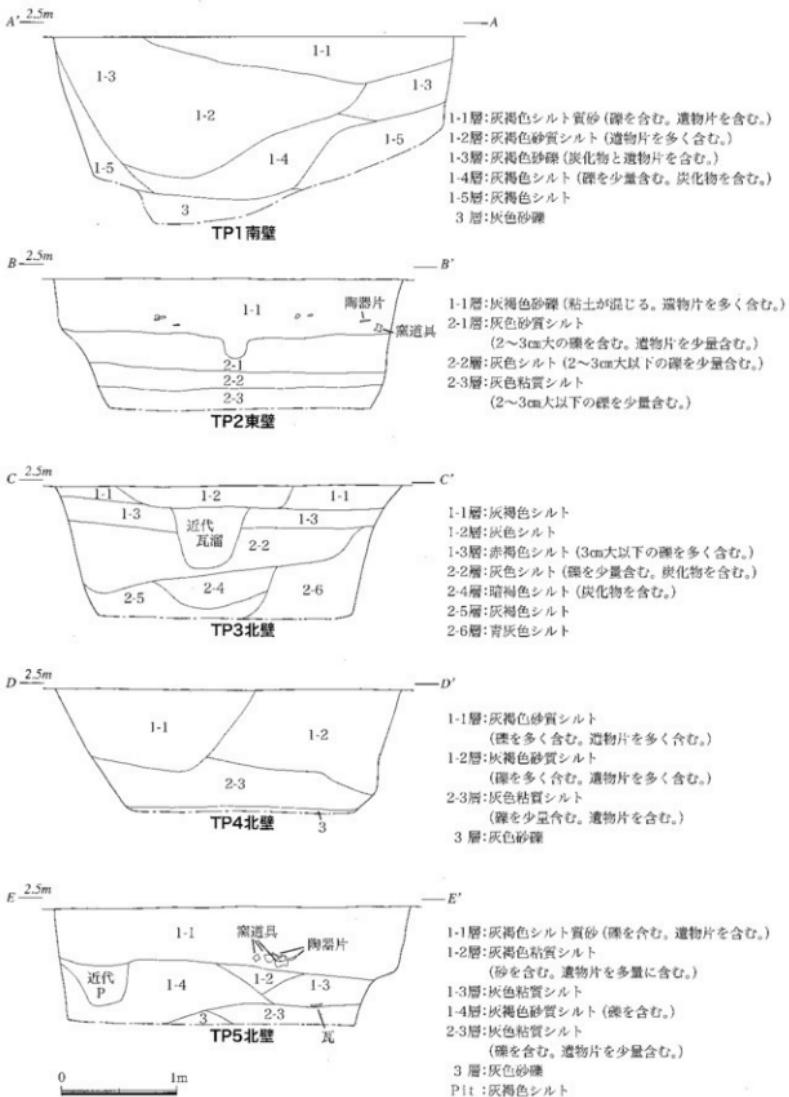


Fig.7 TP1~5セクション図

第2節 遺構と遺物

基本層序にて触れたように、今回の調査区では調査対象区の東側部分より近世の遺物が得られている。ここからは、焼け歪み、焼成不良、溶着資料などの特徴をもつ尾戸焼の焼成失敗品、素焼きなどの未成品、窯道具等が出土しており、近世尾戸窯に関わる廃棄遺物が多く含まれていると考えられる。

しかし近世には、調査区周辺に武家地が展開していたため、堆積層内には肥前産陶磁器を始めとする他生産地の近世陶磁器が多く混入している。そこで、尾戸窯跡関連遺物の詳細については後節にて触れることとし、ここでは、各トレンチでの出土状況と、併存する他生産地の製品と産地不明の出土遺物について概略を述べることとする。

TP1 (Fig.8・9)

調査区南東部に設定した規模3×4mの試掘坑である。試掘坑の東端部では、整地層の直下で南北方向の石列を検出している。出土遺物は、尾戸焼、窯道具、尾戸窯以外の近世陶磁器、瓦片、近・現代の陶磁器である。これらの遺物は上層から下層にかけて出土しているが、何れも攢乱層である1層からのものである。

尾戸窯以外の製品で図示したものは、磁器染付の小碗(1)、小杯(2・4)、鉢(5)、猪口(6)、皿(7)、碗蓋(8)、瓶(9)、陶器の小杯(3)、鉢(10)、皿又は鉢(11)、壺鉢(12・13)、爛徳利(15)、甕(14・16)、漫瓶(17・18)、蓋(19)、土師質土器の五徳(23)、焰烙(20)、器種不明(21)、瓦質土器(22)、軒丸瓦(24)、軒平瓦(25・26)である。

1は肥前系の染付丸形小碗である。外面、草花文と螺。透明釉は明オリーブ灰色を帯び粗い貢入が入る。5は肥前産の染付折湾形小碗で、外面に梅と松文を描く。2は肥前系の丸形小杯。外面に草花文を描き、胎土は灰白色を呈する。4は肥前系の丸形笛文小杯である。6は肥前産の桶形猪口である。外面に梅文。高台には灰白色の砂が付着する。7は皿又は鉢の底部で肥前産18世紀。見込みにコンニャク印判による五弁花文、高台内に渦福を描く。8は碗蓋で肥前産18世紀。外面に草花文、内面中央にコンニャク印判の五弁花文を配する。9は肥前系の草花文小瓶で、胎土は灰白色を呈し、高台に白色砂が付着する。

3は丸形の灰釉小杯で、外面に鉄錆で笛文を描く。10は陶器鉢である。外面には白化粧土象嵌による文字文の一部「思ひそ□□」が見える。灰釉は不透明で灰オリーブ色に発色する。胎土は黄灰色を呈する。11は陶器皿又は鉢の底部である。内面中央には回転方向のヘラ彫り、外面下位から高台外側にかけて放射状の粗い鉋痕が残る。胎土は灰白色を呈し、明オリーブ灰色を帯びる半透明の灰釉を高台外側まで施釉する。12・13は壺・明石系の壺鉢である。15は徳利か。胎土は灰色で、外面に灰オリーブ色を帯びる半透明の灰釉を施釉する。外面に釘彫りを認める。14は鉄釉甕で、外面に暗赤褐色の鉄釉を施釉し上位に灰釉を流し掛けする。口縁端部から体部内面にかけては暗オリーブ褐色の灰釉を施している。胎土は黄灰色を呈する。16は丹波産の鉄釉甕である。16は肩部に円形の双耳を貼付し、体部外面に多段の凹線を巡らす。胎土は褐灰色で、内外面に暗赤褐色の鉄釉が掛かる。17・18は漫瓶で同一個体と思われる。胎土は黄灰色を呈し、内外面にオリーブ色の褐釉を施釉する。把手には2条の沈線を施す。19は土瓶蓋または壺の蓋か。外面全面に鉄釉が薄く掛かる。胎

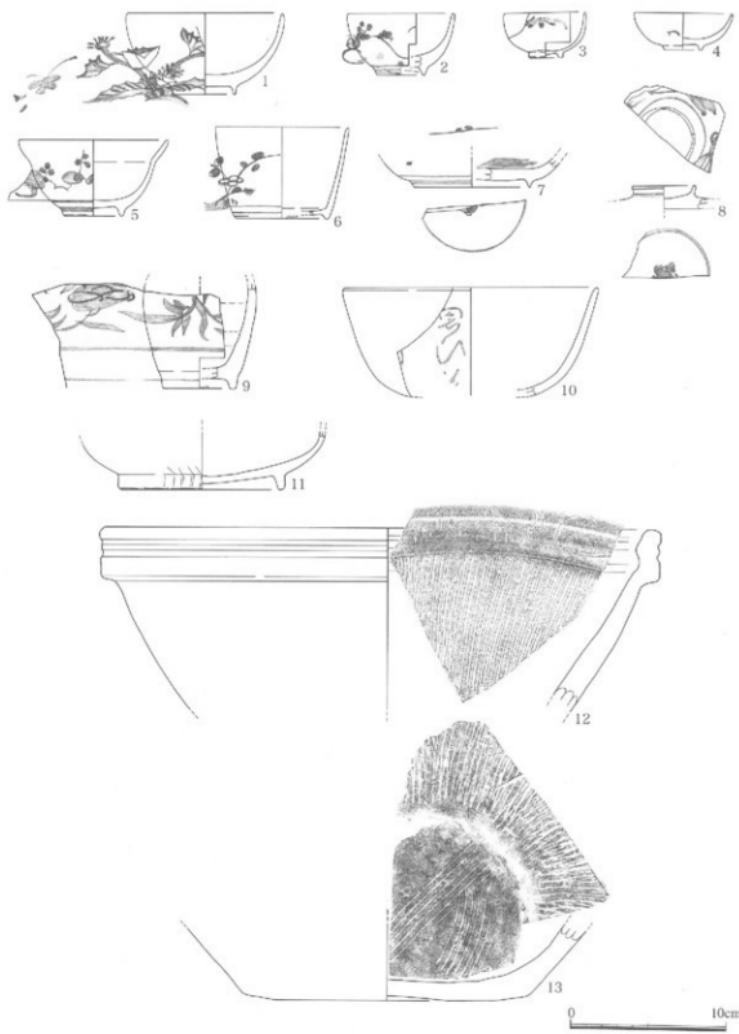


Fig.8 TP1出土の遺物 (1)

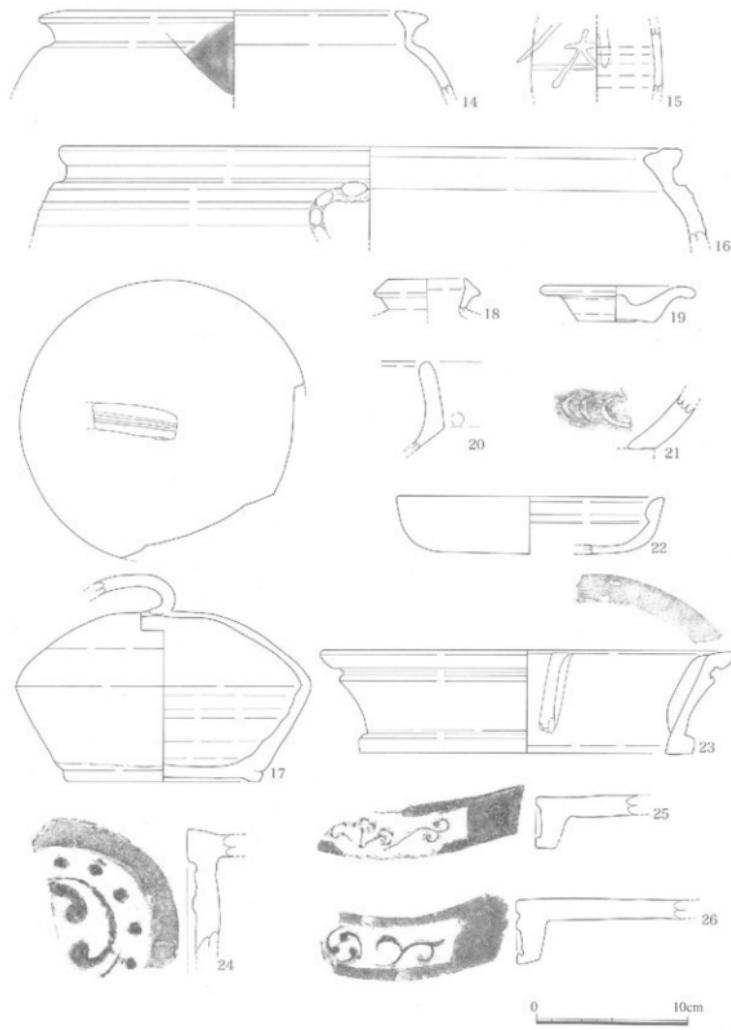


Fig.9 TP1出土の遺物 (2)

土は淡黄色で非常に粗く粗砂を多量に含む。

20は関西産の焰烙で、口縁部内外面回転ナデ、底部外面には型作りによる凹凸が残る。胎土はにぶい橙色で、石英、長石の粗砂、金雲母、赤色風化礫、灰黒色の鉱物粒を含む。21は土師質土器片で焜炉の体部片の可能性をもつ。22は瓦質上器で、焰烙などの用途に使用されたものか。外面回転ナデ、ミガキ。外底にも丁寧なナデが施される。外面は暗灰色に発色し、胎土中には石英、長石の角粒粗砂を含む。外底には煤が付着する。23は関西産の土師質土器で、五徳か。口縁部内面にはアーチ形の受けを貼付する。粘土紐積み上げ成形で、中位断面に粘土接合痕が観察される。外面回転ナデ、底部には静止糸切り痕が残る。胎土はにぶい褐色で、長石の角礫、石英、長石の粗砂、金雲母、半透明橙色の鉱物粒を含む。内面に煤が付着する。24は連珠三ツ巴文の軒丸瓦で、推定珠文数は11個。巴文の尾は断面ドーム状を呈する。25・26は軒平瓦である。25は「あ□」銘を伴う。中心飾りに三花文、両側に上下2反転の唐草文を配する。

TP2 (Fig.10)

調査区南東部に設定した規模3×4mの試掘坑である。上層・下層ともに遺物の出土をみているが、特に上層の擾乱層からの出土が多い。出土遺物は、尾戸焼、窯道具、尾戸窯以外の近世陶磁器、瓦片、近・現代の陶磁器である。

尾戸窯以外の製品で図示したものは、染付の小鉢(27)、碗蓋(29)、青花中皿(28)、皿(30)、青磁中皿(31)、焼綺陶器杯(32・33)、陶器水注(34)である。このうち27・29・30・32～33が上層、28・31が下層からの出土である。

27は染付小鉢で肥前産18世紀。口縁部は輪花形で、内面は窓内に竹文と宝文、外面は唐草文、見込みにコンニャク印判の五弁花纹、高台内に一重角柱内溝福。28は漳州窯系の青花中皿で16世紀末から17世紀初頭。胎土は灰色で、白化粧土施釉後、透明釉が掛かる。29は瀬戸・美濃系又は関西系の染付碗蓋で近代以降の混入品である。外面には酸化コバルトで松、鶴、雲を描き、雲の一部に白化粧土を施す。摘み側面には印判による青海波文を施す。摘み内に銘あり。30は内面に草花文を描く。31は肥前産の青磁中皿である。口縁部は鉗縁形。内面には片彫りによる芭蕉葉を描く。青磁釉は淡緑色に発色する。32・33は杯である。焼き締め陶器又は土師質土器の焼成失敗品の可能性をもつ。外面回転ナデ、外底回転糸切り。胎土は灰白色で焼成堅致。外面は自然釉が掛かりにぶい黄色に発色する。34は張平焼の水注で19世紀中葉。高台の一箇所にはアーチ状の抉りが入る。胎土は灰白色で、明るい黄色の釉を施釉する。体部内面及び高台施釉。

TP3 (Fig.11)

調査区北端部に設定した規模3×4mの試掘坑である。上層にはTP1と同様の擾乱層が存在しており、このうち試掘坑東端部側から遺物が出土した。一方、試掘坑中央部から西部にかけての出土は散見される程度であった。出土遺物は、尾戸焼、窯道具、尾戸窯以外の近世陶磁器、瓦片、近・現代の陶磁器である。

尾戸窯以外の製品で図示したものは、染付の中碗(35・36・39・40)、碗蓋(37・38)、小杯(41)、青花皿(42)、白磁小皿(43)、色絵蓋物(44)、陶器蓋物(45)、土瓶蓋(46)、擂鉢(47)、軒丸瓦(49)、棟飾瓦(50)、瓦(48)である。このうち45～47・49が上層、35～44・48・50が中層からの出上である

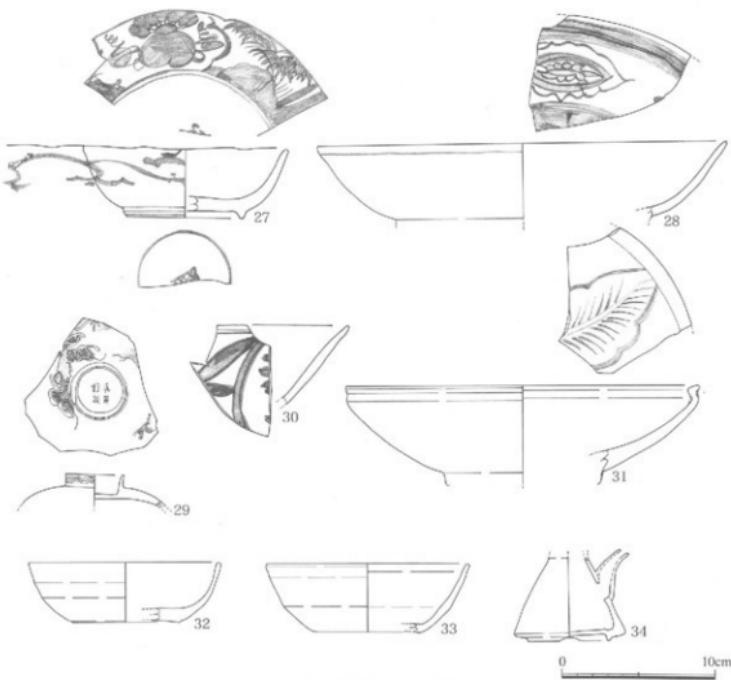


Fig.10 TP2出土の遺物

る。

35は肥前系の端反形中碗で19世紀前葉～中葉。外面は区画内に花文と瓔珞文、底部脇に雷文、口縁部内面には雷文帯を描く。透明釉は粗い貫入が入る。36・37は肥前産の染付広東系碗と碗蓋で、18世紀末～19世紀前半。外面に唇手文、見込みに梵字文、摘み内に格子文を描く。38は肥前系の広東形碗の蓋で19世紀前葉～中葉。天井部内面中央に岩波文を描く。胎土は白色で剥離面が荒く、透明釉は粗い貫入が入る。39は肥前系の広東形碗の底部で、呉須は青灰色に発色する。40は肥前産の小碗で、蛇の目高台をもつ。41は肥前系の笛文小杯、43は型打ち成形による白磁の菊花形小皿である。44は色絵磁器の蓋物身である。赤、緑の上絵付で草花文を描く。内面上位から口縁部にかけて無釉である。42は景德鎮窯系の芙蓉手青花皿で16世紀末～17世紀初頭。呉須は青色に発色し、口縁端部の透明釉は部分的に剥がれる。

45は陶器の蓋物で、外面に鉄錆で草花文を描く。口縁部無釉。胎土は灰白色で、灰釉は粗い貫入が入る。46は灰釉の上瓶蓋である。胎土は灰黄褐色を呈し、灰釉は透明で粗い貫入が入る。47は擂鉢の底部である。削り出しによる高台を有し、疊付外側に面取りを施す。外面上半まで黒褐色の鉄釉を施す。内面は内底まで櫛目が入る。胎土はにぶい赤褐色を呈する。48は飾り瓦の一部か。49は

軒丸瓦で、連珠三巴文。推定珠数は11個。巴の尾は断面三角形を呈する。50は連珠三巴文の棟飾瓦とみられるが、酸化焼成気味で、外面はにぶい橙色に発色する。

TP4 (Fig.12~14)

調査区東部に位置し、TP1の北側に隣接する3×5mの試掘坑である。上層・下層ともに遺物の出土をみているが、特に上層の搅乱層からの出土が多い。出土遺物は、尾戸焼、窯道具、尾戸窯以外の近世陶磁器、瓦片、近・現代の陶磁器である。

尾戸窯以外の製品で図示したものは、染付中碗(52・55)、小碗(51・56)、小杯(57)、蓋物(58)、中碗蓋(59)、水滴(60)、色絵碗(64)、白磁碗(53)、青磁皿(54)、陶器小碗(61・62)、小皿(63)、擂鉢(65～68)、壺(69・70)、土師質土器焙焼(71)、煙管吸口(73)、軒丸瓦(72)である。このうち52～54・56・57・59～62・65～68・70～73が上層、58・63・64・69が中層、51・55が下層からの出土である。

52は肥前波佐見産の染付丸碗で18世紀。外面に草花文を描く。55は肥前産17世紀末～18世紀前半の青磁染付中碗である。高台内には「大明年製」、見込みには手描きによる五弁花文を描く。56は

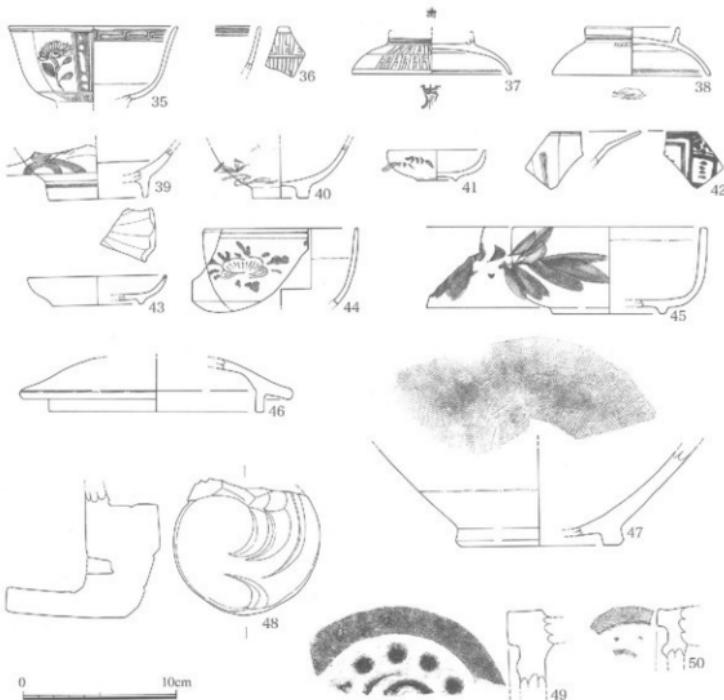


Fig.11 TP3出土の遺物

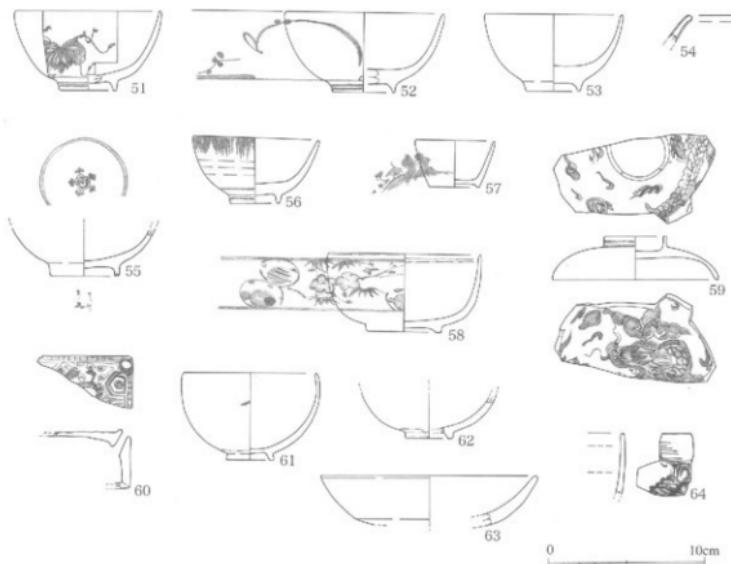


Fig.12 TP4出土の遺物 (1)

肥前産18世紀前半の丸形小碗で外面、雨降り文。51は肥前産18世紀の丸形小碗で、外面にコンニャク印判による桐文を配する。57は肥前産の染付桶形小杯で外面山水文。呉須は青色で強く滲んでいる。59は肥前産の中碗蓋で内外面に雲竜文を描く。58は肥前産の蓋物身で、外面に梅、松と雪輪を描く。60は肥前産の水滴である。型押し成形で、上面に亀甲文他の陽刻文様が施される。53は肥前系の白磁丸碗である。胎土は灰白色で、釉は白濁する。64は京都系の色絵碗で、緑色の上絵付けによる文様を筆書きする。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で、貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。

61・62は京・信楽系の灰釉半球形小碗。61は外面に鉄絵が描かれるが文様は不明である。63は産不明の灰釉小皿で、胎土は灰白色を呈し、灰釉は明オリーブ灰色を帯びる透明の釉で外面に3~5mm大の粗い貫入が入る。65~67は堺・明石系の擂鉢である。擂鉢68は平底で、外面に黒褐色の鉄釉を施釉する。内面櫛目、内底の周縁部にも不定方向の櫛目が施される。胎土は褐灰色で、胎土中に石英、長石の角粒粗砂を含む。時期・産とも不明であるが在地産の可能性をもつ。70は丹波産18世紀の鉄釉壺である。体部外面は暗赤褐色の鉄釉を施釉し、肩部から灰釉を流し掛けする。体部内面は灰オリーブ色の灰釉が掛かる。胎土は灰黄色を呈する。69は焼締の陶器壺で、外面上位に回転方向の櫛目を施す。胎土は灰赤色で、胎土中に石英、長石の粗砂、橙色の風化跡を含んでいる。

71は関西産の焙烙。口縁部外面と内面回転ナデ。外底には凹凸が残る。胎土はにぶい褐色で、石

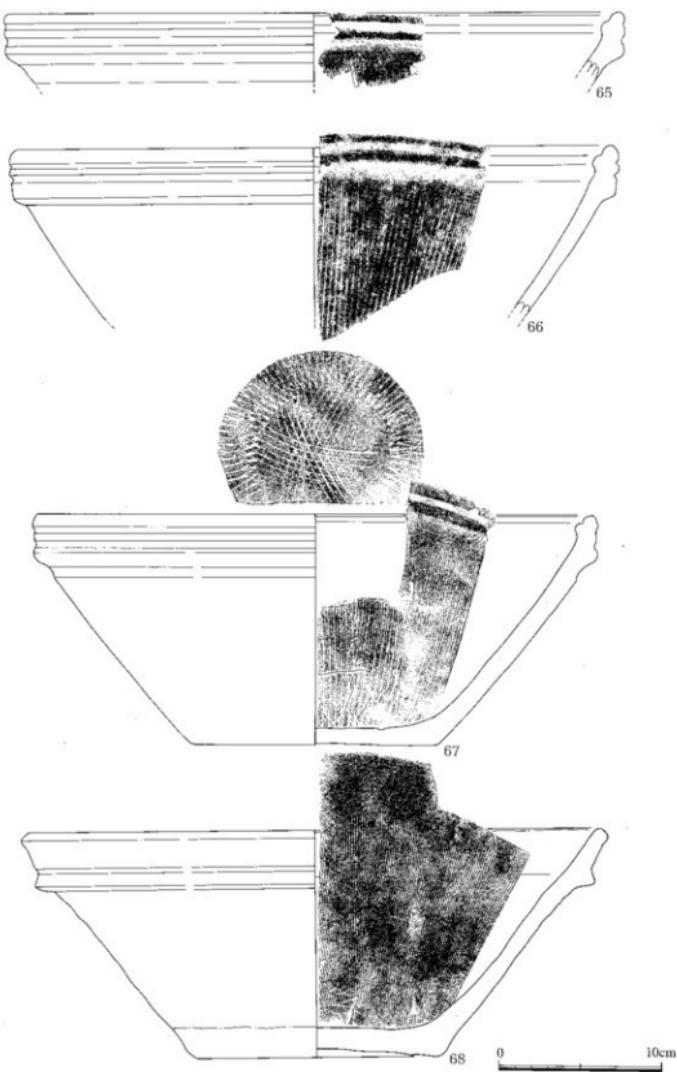
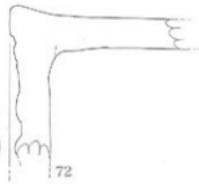
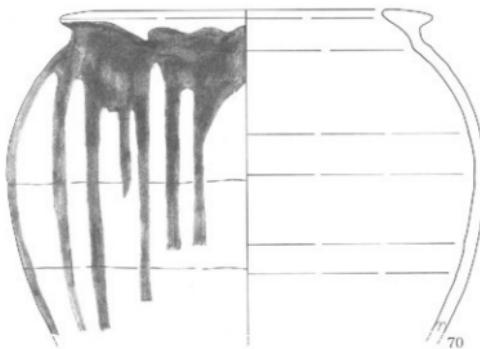
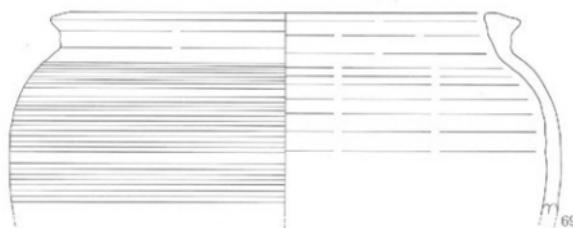


Fig.13 TP4出土の遺物 (2)



0 10cm

Fig.14 TP4出土の遺物 (3)

英、長石の粗砂、金雲母、赤色風化礫、半透明橙色の鉱物粒を含む。内底に焦げ痕、外底から口縁部外面にかけて煤が付着する。73は煙管吸口である。外面に文様の一部を認めるが腐蝕が著しい。72は連珠三巴文の軒丸瓦である。推定珠文数は11個。巴の尾は断面がドーム状を呈する。

TP5 (Fig.15)

調査区東部に位置し、TP4の北側に隣接する3×5mの試掘坑である。上層・下層とともに遺物の出土をみている。出土遺物は、尾戸焼、窯道具、尾戸窯以外の近世陶磁器、瓦片、近・現代の陶磁器である。

図示したものは染付中碗(75・76)、小杯(77・78)、中皿(79)、鉢(83)、青磁碗(74)、陶器碗(80)、小皿(81)、蓋物(82)、土師質土器焰烙(84)、焜炉(85・86)、土人形(87)、軒丸瓦(88)である。何れも上層からの出土である。

75・76は肥前産の中碗で18世紀。75は外面にコンニャク印判による丸文と桐文を施す。高台内溝福。呉須は青灰色に発色する。76は外面草花文か。見込みには手描きの五弁花文、高台内には二重角棒内に溝福を描く。79は肥前産17世紀末～18世紀前半の染付中皿で、高台内にハリ支え痕が残る。内面に岩と植物、外面に連続花唐草文を描く。83は肥前産の大鉢で、口縁部輪花形。内面に岩と松、外面に唐草文か。77・78は笛文小杯で、肥前系19世紀。74は青磁半筒形碗で、口縁部外面に印刻による雷文を巡らす。青磁釉は明オリーブ灰色を呈し、2mm前後の粗い貫入が入る。胎土は灰白色で、長石粗砂を多く含んでいる。

80は灰釉半筒形碗で、外面に呉須で笛文を描く。呉須は暗緑灰色に発色し、灰釉は灰白色を帯びる。81は灰釉小皿で、内底に砂目を伴う。内面には部分的に綠釉を掛け分ける。外面下半無釉。82は蓋物の身で、口縁部外面に印刻による雷文帯を巡らせ、黒色の釉を象嵌する。内外面と高台施釉。口縁部内面と口縁端部、疊付の釉は拭き取る。灰釉は半透明である。

84は関西系の焰烙である。底部型作りで外底にチヂ目と凹凸が残る。口縁部内外面と内底は回転ナデである。焜炉86は前面に窓を設ける。体部内外面回転ナデで、内面はロクロ目顕著。外底に回転ケズリを施し、三足をケズリ出しによって作り出している。胎土は明褐色で、胎土中に石英、長石、灰色系鉱物の粗砂を多量に含む。焜炉85は体部上位に円孔4穴を確認する。外面ナデ、内面はロクロ目が顕著に残る。87は土人形か。胎土は灰白色で、外面ユビオサエとナデ。上面に縞をへら描きする。88は連珠三巴文軒丸瓦で、推定珠文数は12。巴頭が大きく、尾は断面三角形を呈する。

TP6 (Fig.16)

調査区南東端に位置し、TP1の南側に隣接する3×5mの試掘坑で、上層・下層ともに遺物の出土をみている。出土遺物は、尾戸焼、窯道具、尾戸窯以外の近世陶磁器、瓦片、近・現代の陶磁器である。

図示したものは染付小碗(92・93・94)、小杯(96・98)、猪口(90)、仏飯器(95)、火入れ(91)、白磁小杯(97)、陶器小皿(99)、擂鉢(100)、土師質土器杯(104・105)、かわらけ(102・103)である。このうち100が上層、90～99・102～105が下層からの出土である。

93は肥前産18世紀前半の丸形小碗で、雨降り文を描く。92は肥前産17世紀後葉～18世紀前半の染付小碗の底部で外面に松文を描く。高台内には欽銘の一部(「明」か)が見える。96は、肥前産、高台無釉の端反形小杯で、外面に笛文を描く。94は肥前系の丸形小碗、98は肥前系の染付笛文小杯

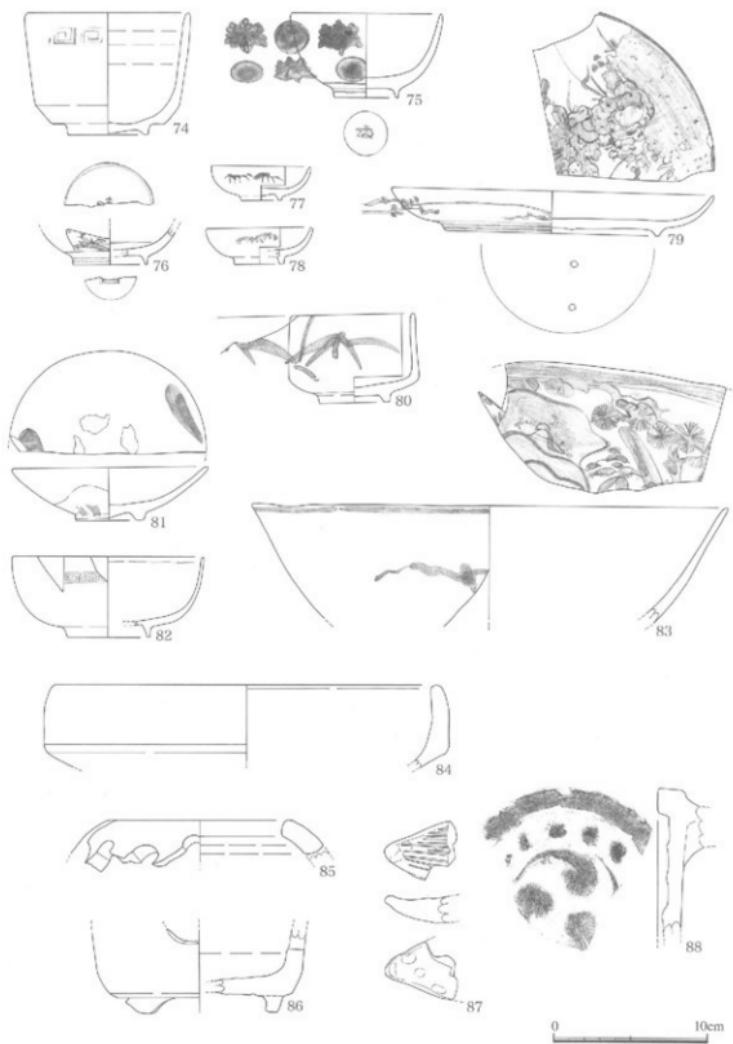


Fig.15 TP5出土の遺物

である。97は白磁端反形小杯で高台施釉。90は肥前産の猪口で口縁部端反形、外面に梅文を描く。95は肥前系の仏飯器で、呉須は緑灰色に発色する。91は肥前系の火入れで、口縁部外面に帶線を巡らせ、外面文様は不明である。

100は堺・明石系の擂鉢である。99は灰釉小皿で、内底に砂目。胎土は灰白色で、淡い灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉する。104・105は土師質土器杯である。ともに内外面回転ナデ、外底ヘラ切り。104は胎土がにぶい黄橙色を呈し、胎土中に石英、長石、灰色系鉱物の粗砂と黒色粒を含む。102・103はかわらけである。ともに内外面回転ナデ、外底回転糸切り。103はにぶい橙色を呈し、胎土中に石英、長石の細砂と赤色風化粒を含む。使用痕は認められない。

TP7 (Fig.16)

調査区北東端に位置し、TP5の北側に隣接する $2.5 \times 3.5m$ の試掘坑である。上層・下層ともに遺物の出土をみている。出土遺物は、尾戸焼、窯道具、尾戸窯以外の近世陶磁器、瓦片、近・現代の陶磁器である。

図示したものは白磁の平形中碗(89)、堺・明石系の擂鉢(101)である。

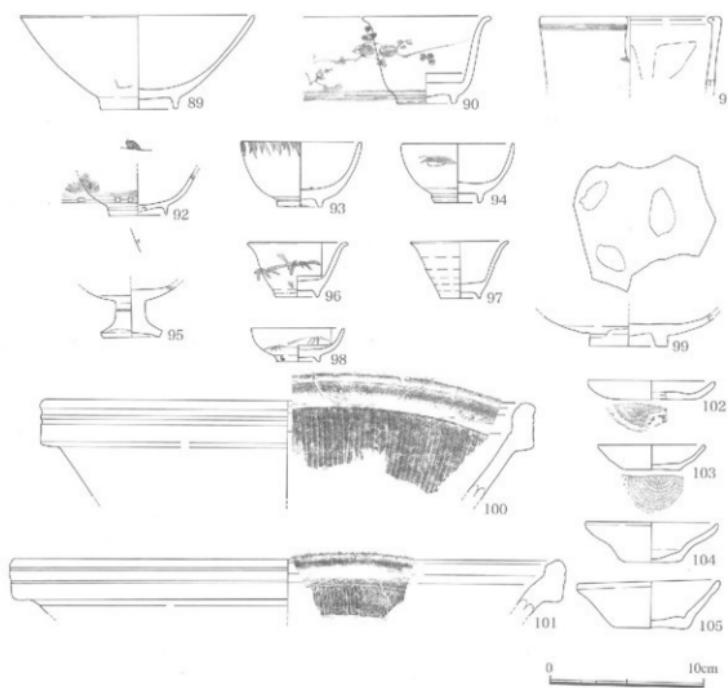


Fig.16 TP6・7出土の遺物

第3節 尾戸窯跡関連の遺物

ここでは、尾戸窯跡関連の廃棄遺物と考えられるものを取り上げた。前節にて触れた様に、出土遺物の多くは近・現代擾乱層からのものであり、また近世の遺物についても尾戸窯以外の武家地からの廃棄遺物が混在している可能性が高い。そのため、尾戸窯製品の抽出にあたっては、溶着資料や焼成不良品などの焼成時失敗品、素焼きなどの未製品、同一タイプの製品が多数出土する場合等を優先的に取り上げ、またそれらに共通した器形、釉調、胎土、文様が認められるものを加えた。

また、前述の出土状況からみて、今回出土の遺物については出土層位から廃棄遺物の前後関係を求めるることは困難であった。そこで、今次出土遺物については各地点出土の遺物を一括して報告することとした。なお、各遺物の出土地点については遺物観察表中に表記しているため、参照されたい。以下、出土遺物を陶器、土師質土器、窯道具類に分け、その特徴を見ていくこととする。

1.陶器

陶器では碗、小杯、皿、鉢、高杯、猪口、蓋、蓋物、段重、香炉、香合、手指、鬢水入れ、捏鉢、鏡、壺、甕、瓶、土瓶、灯明受皿、餌猪口、鳥の水入れ、風鈴、線香立て、水滴等の器種が出土している。

(1) 碗、小杯、碗蓋

①中碗

中碗は法量別に、口径12cm～13cmの大振りのものと、口径10～11cm台のやや小振りのものに分かれる。一部に5足を認める(197)以外は、多くが内底に3足から4足の目痕を伴っており、内底に円錐ピンが溶着する資料も散見される。また、口径12cm以上の大振りタイプと11cm以下の小振りタイプが重ね焼きされた状態での溶着資料も出土しており(141)、これらの大小碗がセットで焼成されたことが分かる。

形態別には、器高7.5～8cm前後の器高の高いものと、器高5～6cmの器高の低いものに大きく分かれ、器高の高い丸形、腰張形、筒形、端反形、器高の低い丸形、腰張形、端反形、広東形風、杉形などがみられた。また、施釉方法では高台無釉のものと高台施釉のものの二者があり、器高の高い碗の殆どが高台無釉である。一方、高台施釉は器高の低い丸形碗、平形碗、杉形碗など、器高の低いものに多く認められている。

なお、出土資料中には近世陶磁器の一般的な形態名称にあてはめることが出来ない独自の形態のものが含まれているため、ここでは便宜的に碗をA～Mに分類し、形態別に出土資料の特徴を述べていくこととする。

碗A-a (Fig.17-18)

106～114・116～125は器高の高い丸形碗で、断面逆台形の低い高台を有するものである。何れも縁付外側にナデを施し、125を除くと、外底が残存するものは高台内に渦状の鉋痕を残している。高台無釉で、110・112以外の製品は全て灰白色の胎土をもつ。

106は口縁部外面に白化粧土象嵌による2条圓線と山形文を施す。口縁部付近はごく緩やかに外反し、体部内外面には緩やかなロクロ目が残る。高台内は兜巾状を呈する。灰釉は焼成不良で灰白

色に濁り、象嵌文は一部が透けて見える程である。107は口縁部外面に白化粧土象嵌による2条圓線を認めるが、その他の文様の有無は不明である。体部外面に緩やかなロクロ目。高台は疊付外側にナデを施し、高台内には深い渦状の鉢痕が残る。灰軸は半透明で灰白色を帯び、細かい貫入がある。器面にはにぶい橙色の御本が入る。108は体部外面下位に丸彫りによる凹線を1条巡らせる。灰軸は透明で灰白色を帯び、貫入が入る。109は無文の灰軸碗である。丁寧な作りで体部のケズリ痕等はナデ消す。灰軸は灰白色を帯びる半透明の軸で細かい貫入が入る。器面には御本が入る。110は褐軸の筒丸形碗である。半透明の褐色の軸を施釉し、軸の厚く掛かる部分は灰白色に発色する。酸化焼成で胎上は褐灰色に発色している。内面には別個体の褐軸碗が溶着している。111は褐色の鉄軸を施釉した後、口縁部から黒褐色～オリーブ色の軸を重ね掛けする。高台は低く、高台内には渦状の鉢痕が残る。口縁部内面には別個体の口縁部片が溶着している。112は黒褐色の鉄軸を施釉した後、黒色～褐色の半透明の軸を口縁部から斜め方向に重ね掛けし、軸の重なる箇所は部分的に青白色に発色する。胎上は灰黄色を呈する。口縁部内面には別個体の口縁部片が溶着している。113は暗赤褐色の鉄軸を施釉した後、口縁部から褐色の軸を重ね掛けしており、重ね掛けが厚

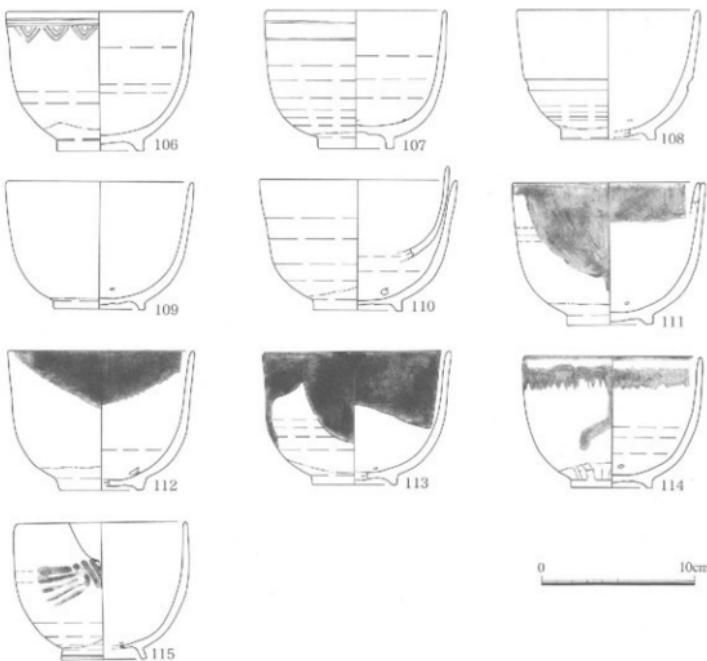


Fig.17 出土遺物実測図 碗(1)

く溜まる部分は白色に発色する。114も同様に褐釉掛け分けを施したものであるが、111～113に比較して口径が幾分小さく器高が高い。体部には暗赤褐色の鉄釉を施釉した後、口縁部から黒褐色～鉛色の半透明の釉を重ね掛けし、厚く溜まった部分は青白色に発色する。体部内面ロクロ目、外面上位には放射状の鉢痕が残る。

116～125は口径10cm、器高7cm前後の小振りの丸碗である。高台形態、調整、釉調、胎土等は先の大振りタイプに共通する。外底が残存するもので125以外のものは何れも、高台内に渦状の鉢痕を認める。釉は透明又は半透明で灰白色又は灰オリーブ色を帯び貫入が入る。121・122は焼成不良で釉は白濁する。125はやや細い高台をもつもので、高台内は曲線的に削り出し、外底は平坦である。釉は半透明で灰白色を帯び細かな貫入が入る。

碗A-b (Fig.17)

115は器高の高い筒丸形碗で、外方に張り出す細い高台を有するものである。外面には鉄絵（稻束か）を描き、高台外側には鉢痕が残る。灰釉は灰オリーブ色を帯び透明で光沢が強く、胎土は灰白色を呈する。

碗B-a (Fig.19～23・25)

126～184・203～205・208は器高がやや高い丸形碗で、低い断面逆台形の高台を有するものである。何れも豊付外側にナデを施し、外底が残存するものは高台内に渦状の鉢痕を残している。高台無釉で、130・133・135・136・142・143・156・184以外の製品は灰白色の胎土をもつ。

126～129は鉄釉と灰釉の掛け分けのもの。126は暗赤褐色の鉄釉を施釉した後、口縁部から鉛色の半透明の釉を重ね掛けする。灰釉は部分的に黄白色に発色している。高台内脇には小さく抉り

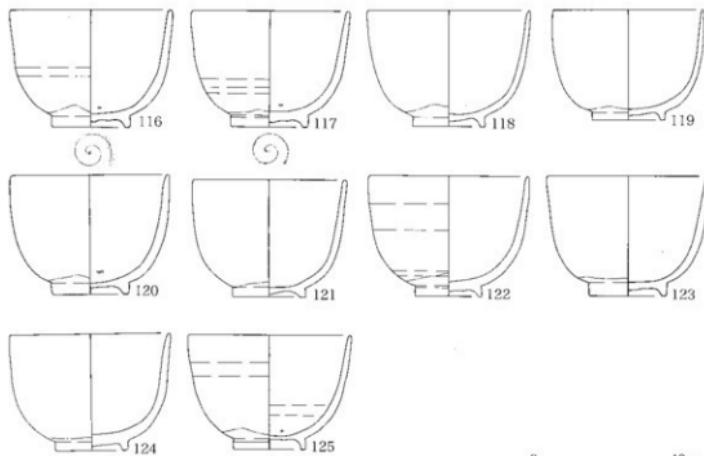


Fig.18 出土遺物実測図 碗(2)

が入る。127は暗赤褐色の鉄釉を施釉した後、口縁部から黒褐色釉を重ね掛けする。128は焼成不良気味で体部の釉は赤褐色、灰釉はオリーブ黄色に発色する。胎土は灰色を呈する。129も同様のものであるが、126～128に比較して器高が幾分低い。

130は外面上位にロクロ成形による凹線を3段巡らすもの。体部下位には荒い鉋痕が残る。灰釉は灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉で貫入が入る。

131～141は無文の灰釉碗である。高台形態は共通するが体部の立ち上がりに若干の個体差がある。131は灰白色を帯びる透明の釉で貫入が入る。内底の一部には円錐ビンが溶着する。132は明オリーブ灰色を帯びる透明の釉で貫入が入る。133は体部外面上位に多段のロクロ目。灰釉は焼成不良気味で白濁する。酸化焼成気味で、胎土は浅黄色を呈する。134は灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。135は体部外面にごく緩やかなロクロ目。灰釉は灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で1～2mm前後の粗い貫入が入る。胎土は灰黄色を呈する。136は体部外面にごく緩やかなロクロ目。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1～2mm前後の粗い貫入が入る。内底の3箇所に円錐ビンとハマの一部が溶着する。胎土は黄灰色を呈する。137も無文の丸碗である。灰釉はオリーブ灰色を帯びる透明の釉で貫入が入る。器壁は気泡が吹き盛り上がる。138は灰釉が焼成不良気味で

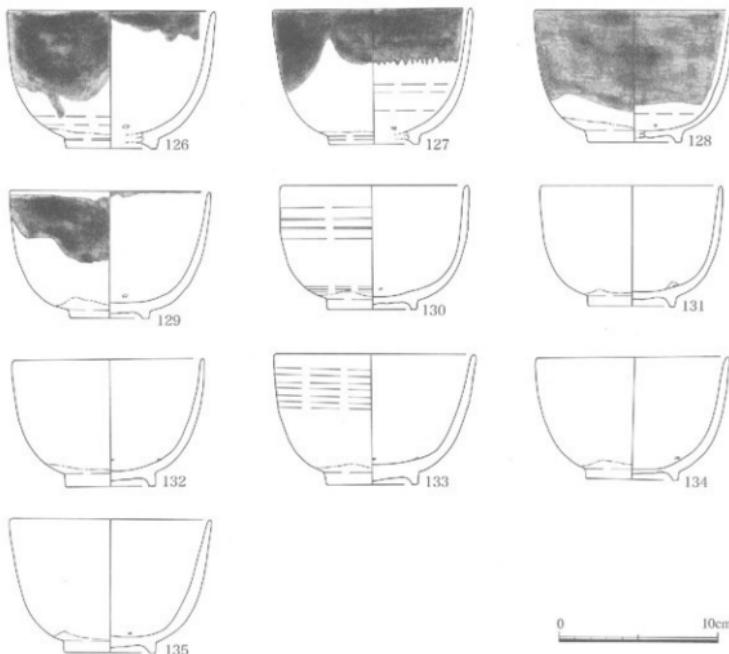


Fig.19 出土遺物実測図 碗(3)

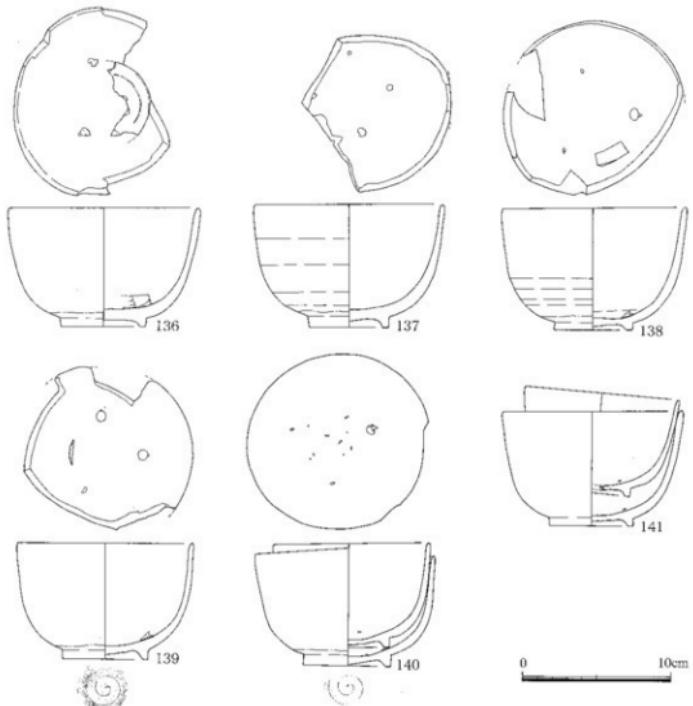


Fig.20 出土遺物実測図 碗(4)

白濁する。内底の1箇所に円錐ピンが残存し、別個体の高台片が溶着する。139は薄手で丁寧な作りで、部体下位の鉢痕はナデ消す。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。内底の一部に円錐ピンが溶着する。140は灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入り、釉が厚く掛かる部分は白濁する。内底の1箇所に円錐ピンが残存し、内側に小振りの丸碗が重ね焼きの状態で溶着する。141は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。内側に小振りの丸碗が重ね焼きの状態で溶着する。

142～153は外面に鉄絵を描くものである。142は鉄鋸で注連縄文を描く。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。胎土は黄灰色を呈する。143も注連縄文か。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。胎土は灰色を呈する。144は外面の両側面に鉄鋸で蕨文を描く。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で貫入が入る。145は鉄鋸で文字文を描く。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1～2mm前後の粗い貫入が入る。146は鉄鋸による笹文を描く。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。149も笹文を描く。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で細か

い貫入が入る。目痕は3足で、内底に円錐ビンが溶着する。口縁部内面には別個体の口縁部片が溶着している。147は口縁部が僅かに外反する。外面の片側に鉄鏽で笠文を描く。体部外面下位のナデ調整は省略され、鉋痕が残る。灰釉は半透明で灰白色を帯び、貫入が入る。器面には御本が入る。148も外面の片側に笠文を描く。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。胎土は灰白色を呈し、露胎部分は淡黄色に発色する。器表には部分的に御本が入る。150は外面の片側に鉄鏽で宝文(宝珠と小槌)を描く。器面調整はやや荒く、体部外面下半に乱れた荒い鉋痕が残る。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1~2mm前後の粗い貫入が入る。目痕は3足で、内底に円錐ビ

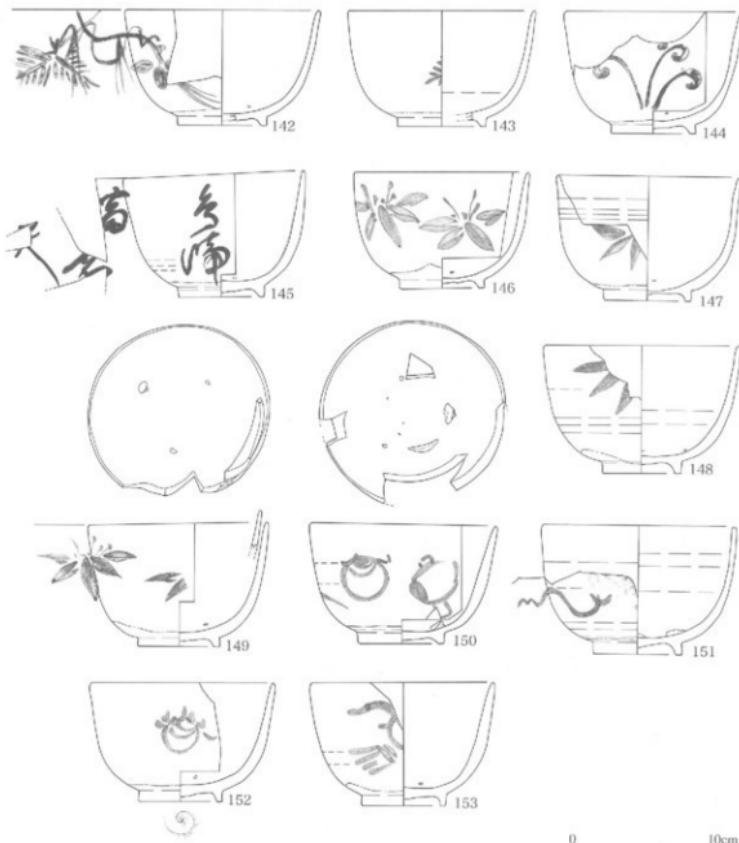


Fig.21 出土遺物実測図 碗(5)

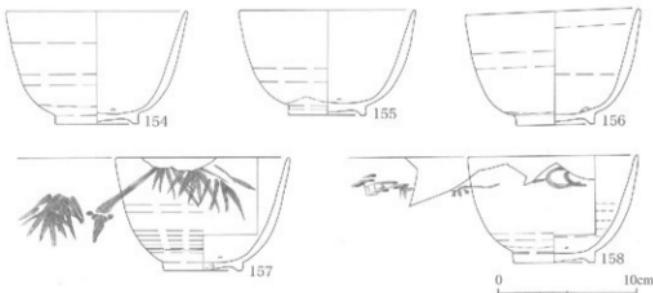


Fig.22 出土遺物実測図 碗 (6)

ンと別個体の高台片が溶着する。151も外面の片側に鉄絵（宝文か）を描く。灰軸は灰白色を帯びる半透明の軸で細かい貫入が入る。内底には焼成時に破裂したとみられる別個体の陶器細片と円錐ビンの破片が多量に溶着している。152も外面の片側に鉄絵による宝珠文を描く。灰軸は灰オリーブ色を帯びる透明の軸で1~2mm前後の粗い貫入が入る。153も外面に鉄絵（稻束か）を描く。器面調整はやや荒く、体部外面下半に荒い鉋痕が残る。灰軸は灰オリーブ色を帯びる透明の軸で1~2mm前後の粗い貫入が入る。

159~182・184は口径10cm、器高7cm前後の中振りの丸碗である。高台形態、調整、軸調、胎土等は先の大振りタイプに共通する。外底が残存するものは何れも、渦状の鉋痕を認める。軸は透明又は半透明で灰白色又は灰オリーブ色を帯び貫入が入る。159は外面に白化粧土と鉄絵による花文を描くもので、花弁を白化粧土、その他を鉄絵で描き分ける。薄手の作りで、体部内外面には緩やかなロクロ目が残る。160は体部外面ロクロ目顕著。外面下位のナデ調整は省略され多段の鉋痕が残り、高台内は乱れた渦条の鉋痕が残る。169は薄手の作りで、ロクロ目や鉋痕はナデ消す。高台はやや細く、高台内に渦状の鉋痕が残る。184は外面上位に3段の凹線を巡らす。体部は薄手の作りで、鉋痕はナデ消す。胎土は灰色を呈する。179~182は体部の内外面に別個体碗の口縁部片が溶着している。

154~158・183はやや底部の張りが弱く体部が外上方へ立ち上がる。高台無軸で、156以外は何れも灰白色の胎土をもつ。154は高台外側にナデ、高台内に浅い渦状の鉋痕が残る。灰軸は灰オリーブ色を帯びる透明の軸で、細かい貫入が入る。155は高台外側ナデ、高台内に渦状の鉋痕が残る。灰軸は灰オリーブ色を帯びる透明の軸で、1~2mm前後の粗い貫入が入る。156は高台外側にナデ、高台内に渦状の鉋痕が残る。灰軸は灰オリーブ色を帯びる半透明の軸で、貫入が入る。胎土は灰色を呈する。内底の1箇所に円錐ビンが残存する。157は、外面に鉄絵による竹文を描く。体部外面にロクロ目。高台は断面逆台形で低く、高台外側はナデ、高台内に渦状の鉋痕が残る。灰軸は灰オリーブ色を帯びる透明の軸で細かい貫入が入る。内面は気泡を含み器表が盛り上がる。158は器高がやや低く、体部は口縁部に向かい丸みをもって立ち上がる。外面の片側に略化された鉄絵を描く。高台は断面逆台形で低く、疊付外側にナデを施し丸みをもたせる。高台内渦状。灰軸はオリーブ灰

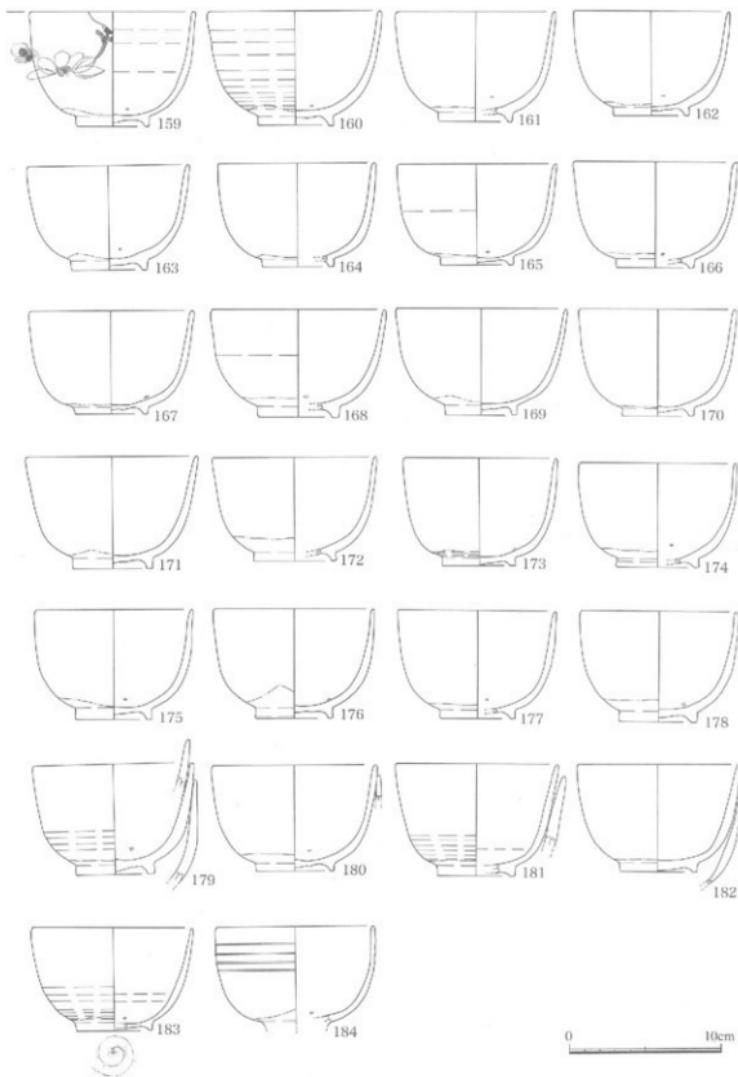


Fig.23 出土遺物実測図 碗(7)

色を帯び光沢が強く、1~2mm前後の粗い貫入が入る。183は口径10cm、器高7cm前後的小振りの丸碗である。高台形態、調整、釉調、胎土等は先の大振りタイプに共通する。外底には渦状の鉋痕を認める。

203は褐釉を施釉するもので、口縁部が僅かに外反している。高台外側はナデ、高台内に浅い渦状の鉋痕が残る。褐釉は外面がオリーブ黒色~黒色、内面は褐色を呈する。外面の釉は流れ、底部付近で厚く盛り上がっている。204は外面下位に凹状の削り出しによる稜を3段巡らす。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1~2mm前後の粗い貫入が入る。内底のI箇所に円錐ピンが溶着している。205も無文の碗で、高台は断面逆台形で側面に鉋痕が残る。高台内渦状。釉は焼成不良気味で暗褐色に発色する。208は高台外側ナデ、高台内は兜巾状を呈する。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。

碗B-b (Fig.25)

206・207・209・210は器高がやや高い丸形碗で、断面が長方形の細い高台を有するものである。先の碗B-aに比較して高台径は小さい。何れも疊付外側にナデを施し、外底が残存するものは高台内に渦状の鉋痕を残す。高台無釉。

206は高台外側にナデを施し、高台脇には抉りが入る。高台内に荒い渦状の鉋痕が残る。207は薄手の作りで、体部外面にロクロ目が残る。高台は細く、高台内は渦状の鉋痕が残る。灰釉は焼成不良で白濁し、胎土は灰色を呈する。内底は気泡を吹き器面が盛り上がる。209は口径11cm台でやや小振りの丸碗である。文様の有無は不明。薄手の作りで、高台は断面長方形で細い。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉である。酸化焼成気味で胎土は灰白色~淡黄色を呈する。210は口径10cm、器高7cm前後的小振りの丸碗である。高台形態、調整、釉調、胎土等は先の大振りタイプに共通する。

碗B-c (Fig.24)

185~190は器高がやや高い丸形碗で、断面逆台形の高い高台を有するものである。高台内は曲線的に深く削り出し、186・187・189・190は高台内兜巾状、185・188は高台内に乱れた渦状の鉋痕を残す。185・186・188・189は疊付の外側に面取りとナデ、187・190は疊付の両側にナデを施す。何れも高台無釉で、185~189は灰黄~黃灰色、190は灰白色の胎土をもつ。

185は鉄鋸で竹文を描く。体部外面に多段のロクロ目。灰釉は半透明で黄灰色を帯び、貫入が入る。胎土は灰黄色を呈する。186は外面に白化粧土と鉄鋸で藤文を描くもので、花弁は白化粧土その他の鉄鋸で描き分けている。体部外面に工具による粗い多段のロクロ目が残る。灰釉は半透明でオリーブ色を帯び、貫入が入る。胎土は黄灰色で、露体部分は赤褐色に発色する。内面の片側には別個体の口縁部片が溶着している。187は外面に鉄鋸で花文を描く。体部外面には粗い多段のロクロ目。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯び、貫入が入る。胎土は黄灰色を呈し、露体部分は赤褐色に発色する。188は文様の有無は不明である。体部外面に工具による粗い多段のロクロ目が残る。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯び、貫入が入る。胎土は黄灰色で、露体部分は褐色に発色する。189は鉄鋸で筆文を描く。体部外面に186と同様の工具による粗い多段のロクロ目が残る。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯び、貫入が入る。胎土は黄灰色で、露体部分は赤褐色に発色する。内面

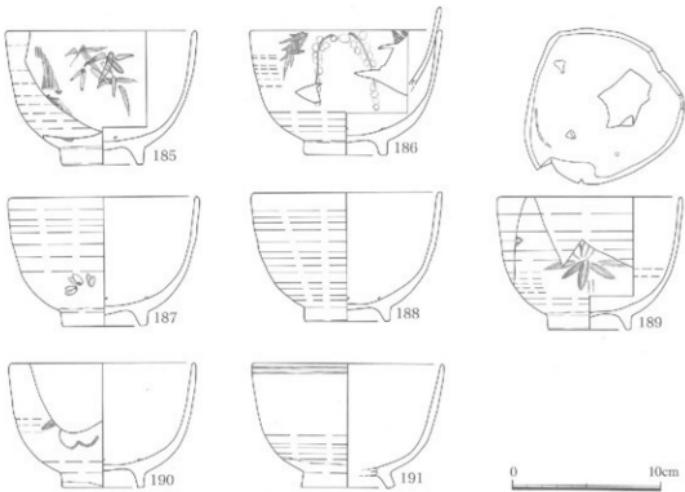


Fig.24 出土遺物実測図 碗(8)

の箇所に円錐ピンが溶着している。190は外面に鉄絵を描く。体部外面に粗いロクロ目。外面下位のナデ調整は省略し鉋痕が残る。灰釉は半透明でオリーブ黄色を帯び、貫入が入る。胎土は灰白色を呈し、黒色粒を多く含む。焼成時の失敗品で、内底の表面は気泡が吹き盛り上がる。

碗B-d (Fig.24)

191は器高がやや高い丸鉢で、外方に張り出す断面長方形の高い高台を有するものである。口縁部外面に白化粧土象嵌による2条沈線を認めるがその他の文様の有無は不明である。高台内を深く曲線的に削り出し、疊付外側にはナデを施し僅かに丸みをもたせる。灰釉は焼成不良で白濁し、胎土は灰白色を呈する。

碗C (Fig.25)

192～202は体部が半球形を呈するものである。断面逆台形の高台を有し、高台径の小さいもの(192・193・195)が含まれる。高台内は曲線的に削り出し、199が高台内兜巾状、その他外底が残存するものは高台内に渦状の鉋痕を残す。また何れも疊付の外側にナデを施している。高台無軸で、192・193・197・198・201以外の製品は灰白色的胎土をもつ。

192は外面に白化粧土と鉄絵による梅文を描き、花弁は白化粧土、枝は鉄絵で描き分ける。体部内面に緩やかなロクロ目。高台は断面逆台形で、高台脇に抉りが入る。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。胎土は灰黄色を呈し、器面に御本が入る。193は外面に文様を認めるが、焼成不良で灰釉が白濁し鉄絵、呉須絵の別は不明である。高台内に渦状の鉋痕を残すが乱れが強い。胎土は淡黄色を呈する。194は外面の片側に鉄絵による巻文を描く。体部外面にごく緩やかなロクロ目。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。器面には御本が入る。195は

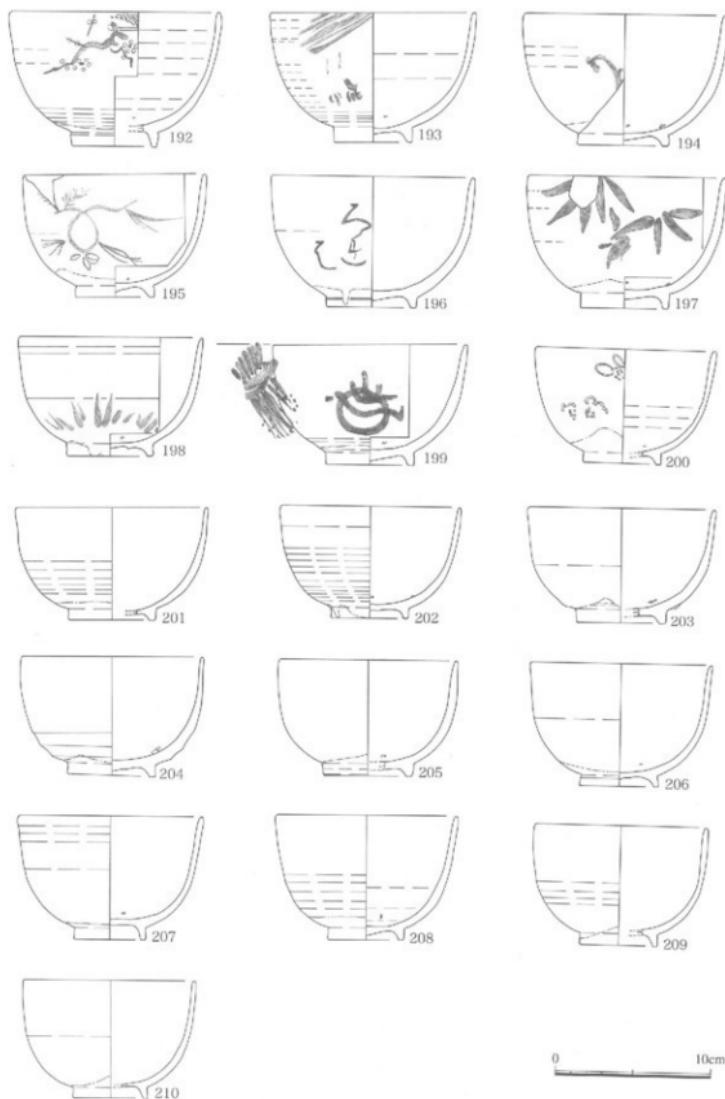


Fig.25 出土遺物実測図 碗 (9)

外面の片側面に鉄錆で注連縄文を描く。体部外面下位は鉋痕をナデ消す。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。器面には淡黄色の御本が入る。196は、外面に鉄錆による文字文を描く。高台は断面逆台形で高台脇に抉りが入る。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で貫入が入る。器面にはぶい橙色の御本が入る。内底に陶器質の碎片が多量に溶着している。197は外面の片側に鉄錆による筮文を描く。体部外面にごく緩やかなロクロ目。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。胎土は灰黄色を呈し、器面全体に御本が入る。目痕5足。198は鉄錆で草文を描く。体部外面にごく緩やかなロクロ目。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。胎土は灰色を呈する。199は外面の片側に鉄錆で稻束と宝珠を描く。高台は疊付外側にナデを施し丸みをもたせる。高台内兜巾状。体部下位のナデ調整は省略し、鉋痕が残る。灰釉は灰オリーブ色を帯び光沢が強く、貫入が入る。200はやや小振りの丸碗で薄手の作りである。外面下位の鉋痕はナデ消す。著しく焼成不良で灰釉は粉状であり、釉下に花文の一部が観察できる。胎土は灰白色を呈し、露体部は淡黄色に発色する。201は無文の丸碗である。体部外面にごく緩やかなロクロ目。灰釉はオリーブ灰色を帯びる透明の釉で貫入が入る。胎土は灰色を呈する。202も無文の丸碗である。体部外面に多段のロクロ目が残る。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。

碗D-a (Fig.26)

218は高台無釉の器高の低い丸碗である。断面逆台形の低い高台をもち、高台内は曲線的に削り出す。高台内兜巾状。疊付の外側はナデを施し丸みをもたせる。灰釉は灰オリーブ色で光沢が強く、貫入が入る。外面の上位に多段の凹線を配し、鉄錆で略化された宝文を描く。

碗D-b (Fig.26)

211～217は高台施釉の器高の低い丸碗である。断面逆台形の低い高台をもち、高台内の削り出しは浅い。外底が残存するものは、何れも高台内平坦である。

211は白化粧土と鉄錆で梅文を描き、花弁を白化粧土、枝を鉄錆で描き分ける。ナデ調整は省略され、体部下位から高台外側は鉋痕が残る。灰釉はオリーブ灰色を帯びる透明の釉で貫入が入る。疊付周辺には白色系の砂が付着する。212は鉄錆で松葉文を描く。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。213は異須で松葉文を描く。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で1～2mm前後の粗い貫入が入る。214は文様の有無は不明である。薄手の作りで鉋痕はナデ消す。高台内は平坦。灰釉は灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。215は外面全目に多条の沈線を施す。高台端部は丸みをもち、高台内は平坦である。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で貫入が入る。216-aも外面全目に多条の沈線を施すが、外面に鉄釉を施釉する。216-bは216-aと釉調、胎土とも共通し、同一個体の可能性をもつ。高台内は平坦である。217は文様の有無は不明である。鉋痕はナデ消す。灰釉は灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。胎土は灰黄色を呈する。

碗E (Fig.27)

219～221は器高に対して口径の大きい大振りの丸碗で、体部は外上方に伸びる。断面逆台形の高台をもつ。何れも高台無釉で、浅黄橙色～黄灰色の胎土をもつ。

219は外面にヘラ彫りによる陰刻文様を配する。釉は鉄釉の上に灰釉を重ね掛けしており、釉は半透明でオリーブ褐色、厚く溜まった部分は青白色に発色する。体部外面上位のロクロ目は荒く、

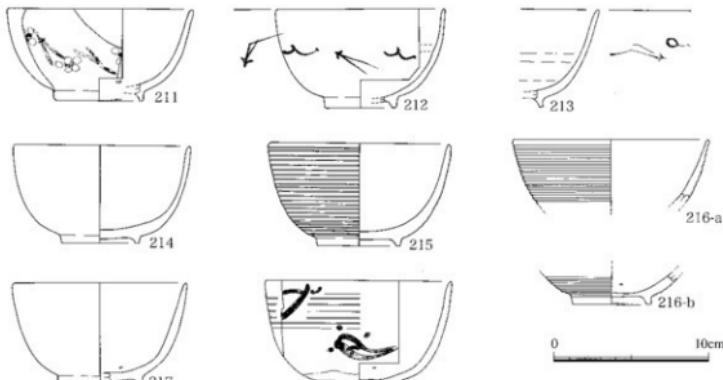


Fig.26 出土遺物実測図 碗 10

体部下位から高台外側へのナデ調整は省略され、乱れの強い鉋痕が残る。高台は断面逆台形で、豊付外側のナデも省略される。胎土は黄灰色を呈する。胎土、器面調整からみて雑器ランクの碗と思われる。220も粗製の丸碗で、体部外面に刷毛状の工具による粗いナデ痕が残る。高台は太く高く、豊付外側を面取りナデを施す。灰釉は豊付の脇まで施釉されており、半透明でオリーブ色を帯び細かい貫入が入る。胎土は灰黄色を呈する。221も粗製の丸碗である。体部外面にごく緩やかなロクロ目。外面下位のナデ調整は省略され鉋痕が残り、高台内は平坦である。灰釉は焼成不良で粉状。胎土は浅黄橙色を呈する。

碗F (Fig.28)

222～238は器高に対して口径の大きい腰張形の碗で、断面逆台形の低い高台をもつ。豊付外側にはナデを施し、223・234以外で外底が残存するものは、何れも高台内に渦状の鉋痕を残す。高台無釉で、222・225・238以外は灰白色の胎土をもつ。

222は外面に白化粧土と鉄錆で梅文を描き、花弁は白化粧土、枝は鉄錆で描き分ける。灰釉は透明で灰白色を帯び部分的に白濁する。貫入が入る。胎土は黄灰色を呈する。223は大振りで器壁が厚い。外面には白化粧土と鉄錆で梅文を描き、花弁は白化粧土、枝と花芯は鉄錆で描き分ける。高台内は平坦である。灰釉は透明で灰白色を帯び、貫入が入る。224は鉄錆で蘿文を描く。灰釉は透明で灰オリーブ色を帯び、細かい貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。高台の外側には灰白色的砂が固まって溶着している。225は外面の片側に鉄絵(宝珠と瓶束か)を描く。高台外側のナデは省略し、鉋痕が残る。灰釉は透明で灰白色を帯び、貫入が入る。酸化焼成氣味で胎土は淡黄色を呈する。内底には円錐ビンの先端が残る。226は外面の片側に鉄錆で瓶束を描く。灰釉は焼成不良で白濁する。内底には円錐ビンの先端が残り、内面の片側には別個体の口縁部片が溶着している。227は外面の片側に鉄錆による笹文を描く。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。228は外面の片側に鉄絵を描くが文様は不明である。体部下位のナデ調整は省略し鉋痕が残

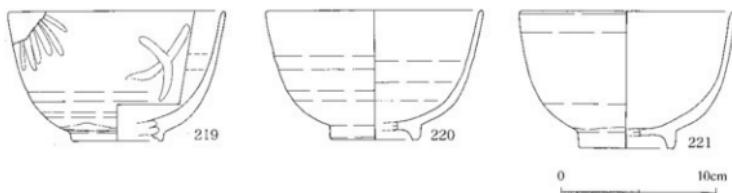


Fig.27 出土遺物実測図 碗(II)

る。灰釉は灰白色を帯び、貫入が入る。胎土は灰白色を呈し、黒色粒を多く含む。内面の片側には別個体の陶器片が溶着している。229は鉄錫で宝珠と小船を描く。外面にごく緩やかなロクロ目。灰釉は半透明で灰白色を帯び、貫入が入る。230は文様の有無は不明。体部下位のナデ調整は省略し鉋痕が残る。灰釉は透明で灰白色を帯び、1~2mm前後の粗い貫入が入る。胎土は灰白色を呈するが黒色粒を多く含む。口縁部外面には別個体の体部片が溶着している。231~233は無文の腰張形碗である。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入り、釉が厚く掛かる部分は白濁する。234は高台内兜巾状。胎土は灰白色、灰釉は半透明で灰白色を帯び細かい貫入が入る。235は外面に緩やかなロクロ目。体部下位から高台外側へのナデ調整は省略し、削り痕が残る。灰釉は透明で灰オリーブ色を帯び、1~2mm前後の粗い貫入が入る。焼成時の失敗品で体部は気泡を吹き、外面の片側には別個体の口縁部片が纏方向に溶着している。

237は口径10cm、器高7cm前後的小振りの腰張形碗である。高台形態、調整、釉調、胎土等は先の大振りタイプに共通する。238は鉄錫と呉須で花文を描くもので、大きい花を鉄錫、小振りの花を呉須で描き分けている。高台は疊付両側とも鋭角的で、高台脇には抉りが入る。高台内には渦状の鉋痕が残る。灰釉は灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で、貫入が入る。胎土は灰白色で、露体部分は赤褐色に発色する。外面には2個体の碗の口縁部片が重ね焼きの状態で溶着している。

碗G (Fig.29)

239・240は張りの弱い底部から体部が外上方に伸びるもので、外方に張り出す高い高台をもつ。いずれも高台無釉である。

239は口縁部外面に白化粧土象嵌による二重圓線を巡らせ、その下側へ印刻によるクルス文を配する。高台の疊付幅は細く、一箇所に深い三角形の切り込みをもつ高台である。高台内は曲線的に深く削り出し、小さい渦状の鉋痕が残る。疊付外側にはナデを施し僅かに丸みをもたせる。体部外面は緩やかなロクロ目、内底にも渦状のロクロ目が残る。丁寧な作りで外面下位の削り痕はナデ消している。灰釉は半透明で灰白色を帯び細かい貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。240は無文の灰釉碗で、張りの少ない底部から体部が口縁部に向かい外反気味に立ち上がる。高台は逆台形で高く、高台内を深く削り出している。体部外面にはロクロ目が残る。灰釉は焼成不良で白濁し、胎土は淡黄色を呈する。

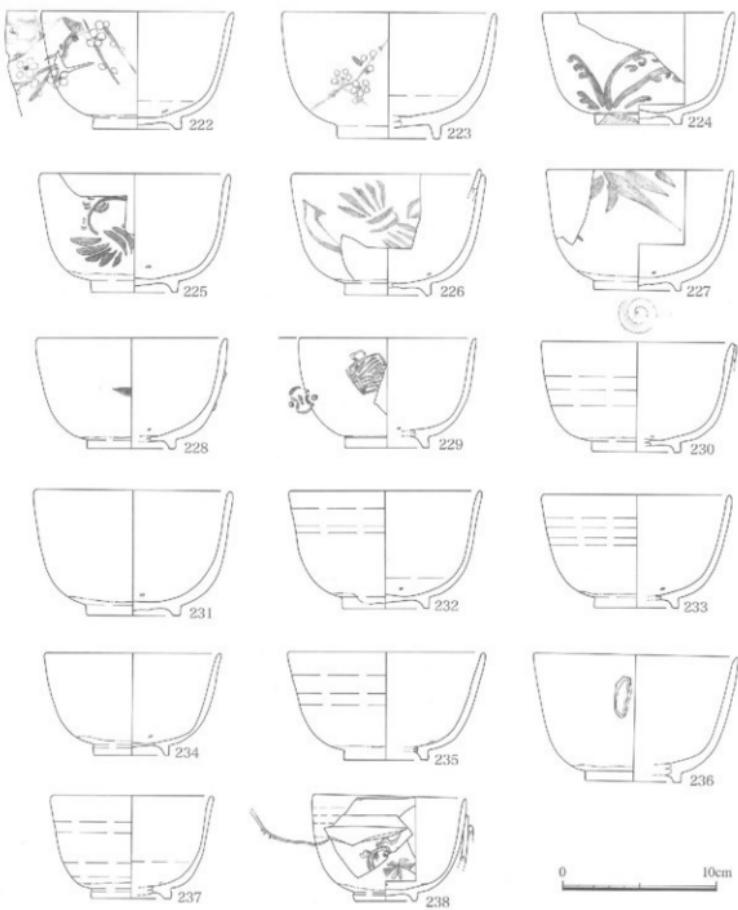


Fig.28 出土遺物実測図 碗 12

碗H (Fig.29)

241は器高の高い半筒形の碗である。高台無釉。241は外面に呉須による帶線と松、竹を描く。灰釉は半透明で灰白色を帯び、呉須は緑灰色に発色する。

碗I (Fig.29)

242～244・246は器高が低く、張りの少ない底部から体部が外上方へ直線気味に伸びる平形腕風のものである。平形腕に近いプロポーションを取るが、底部付近がやや丸みをもち違和感をもつ。243が高台無釉、242・244が高台施釉で、244以外は灰白色の胎土をもつ。

242も文様の有無は不明。外面の鉋痕はナデ消している。高台は断面長方形で細く、外方に張り出す。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。243は文様の有無は不明である。高台は断面逆台形を呈し、高台内に深い渦状の鉋痕が残る。灰釉は焼成不良気味で白濁する。244は無文の碗である。灰釉は浅黄色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。胎土は淡黄色を呈する。246は外面に白化粧土と鉄錆で梅と松葉を描き、梅花弁を白化粧土で描き分ける。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。

碗J (Fig.29)

245は器高が低く、大きい底部から体部が外上方へ直線気味に伸びる広東形腕風のものである。広東形腕に近いプロポーションを取るが、高台は断面逆台形で低く違和感をもつ。外面には鉄錆で菖蒲又は草花を描く。厚手の作りで、器面調整は荒く、体部外面から高台外側にかけて鉋痕が残る。灰釉は明オリーブ色を帯びる半透明の釉で、貫入が入る。高台無釉で、胎土は灰白色を呈する。

碗K (Fig.29)

247は器高の低い杉形碗で、口縁部外面には強いナデによる稜をもち、底部は鋭角的に屈曲させる。高台は細く、疊付の両側ともにナデを施さない。釉は焼成不良でにぶい黄色を呈する。高台施釉。

碗L (Fig.29)

248～252は端反形碗である。248・252が高台無釉、251が高台施釉で、何れも灰白色的胎土をもつ。248は外面上位にロクロ成形による凹線を3段巡らせ、鉄絵を描く。灰釉は灰オリーブ色を帯びる透明の釉で1～2mm前後の粗い貫入が入る。249は口縁部が強く外反する。体部は薄手の作りで外面にロクロ目が残る。灰釉は焼成不良で白濁する。器面にはにぶい橙色の御本が入る。250は口径10.2cmとやや小振りの端反形碗である。鉄錆で口縁部外面と体部下位に圓線、圓線間に宝文を描く。251は高台施釉の端反形小碗である。高台は細く、端部は丸くおさめる。灰釉は半透明で灰白色を帯び細かい貫入が入る。252は口径10cm、墨高7cm前後的小振りの端反形碗である。無文。薄手の作りで、外面の鉋痕はナデ消す。

碗M (Fig.29)

253は蓮形の碗である。薄手の作りで、外面上位には多条の沈線を巡らす。高台は断面逆台形で高台脇には抉りを施す。高台内は兜巾状を呈する。高台無釉で灰白色的白濁した釉を施釉する。胎土は灰白色を呈する。

形態不明 (Fig.30～32)

254～266は白化粧土象嵌による文様を施すものである。254は口縁部外面に白化粧土象嵌による2条圓線と格子状の文様、印刻による菊花文を巡らす。灰釉は半透明で灰白色を帯び、貫入が入

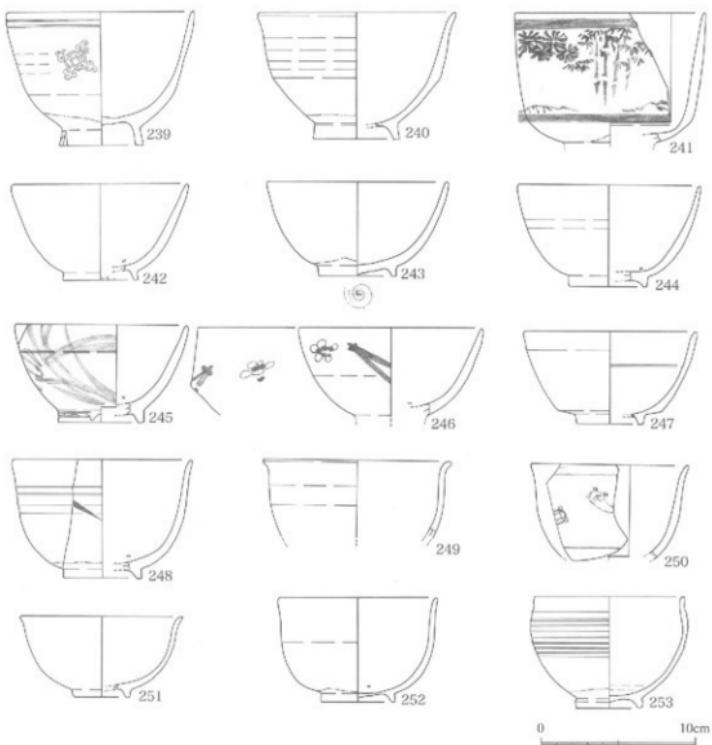


Fig.29 出土遺物実測図 碗(13)

る。胎土は灰白色で、器面にぶい橙色の御本が入る。体部外面に別個体碗の口縁部片が溶着している。255は外面上位に白化粧土象嵌で、二重圓線と印刻による菊花、×状の文様を巡らす。体部は薄手で内外面に緩やかなロクロ目が残る。灰軸は半透明で灰白色を帯び、貫入が入る。256は焼成不良で灰軸が白濁しているため文様が明らかでなく、口縁部外面の二重圓線のみ確認できる。257は外面上位に白化粧土象嵌で、圓線と印刻による如意頭文を巡らす。内面には緩やかなロクロ目。灰軸は半透明で灰白色を帯びる。262も白化粧土象嵌による如意頭文の一部が見える。258は白化粧土象嵌で圓線、唇手文を描く。灰軸は半透明で灰白色を帯び、貫入が入る。また、器面には御本が入る。261は印刻による白化粧土象嵌を施すもので、文様は丸にクルス文である。灰軸は透明で貫入が入る。焼成時の失敗品と考えられ、外面には別個体片の溶着痕が残る。259は外面に白化粧土象嵌による檜垣と唇手文を描く。灰軸は透明で灰白色を帯び、貫入が入る。胎土は灰黄色を呈する。260も外面上位に檜垣文を描くものである。焼成不良で灰軸は白濁しており、下位の文様の有無は

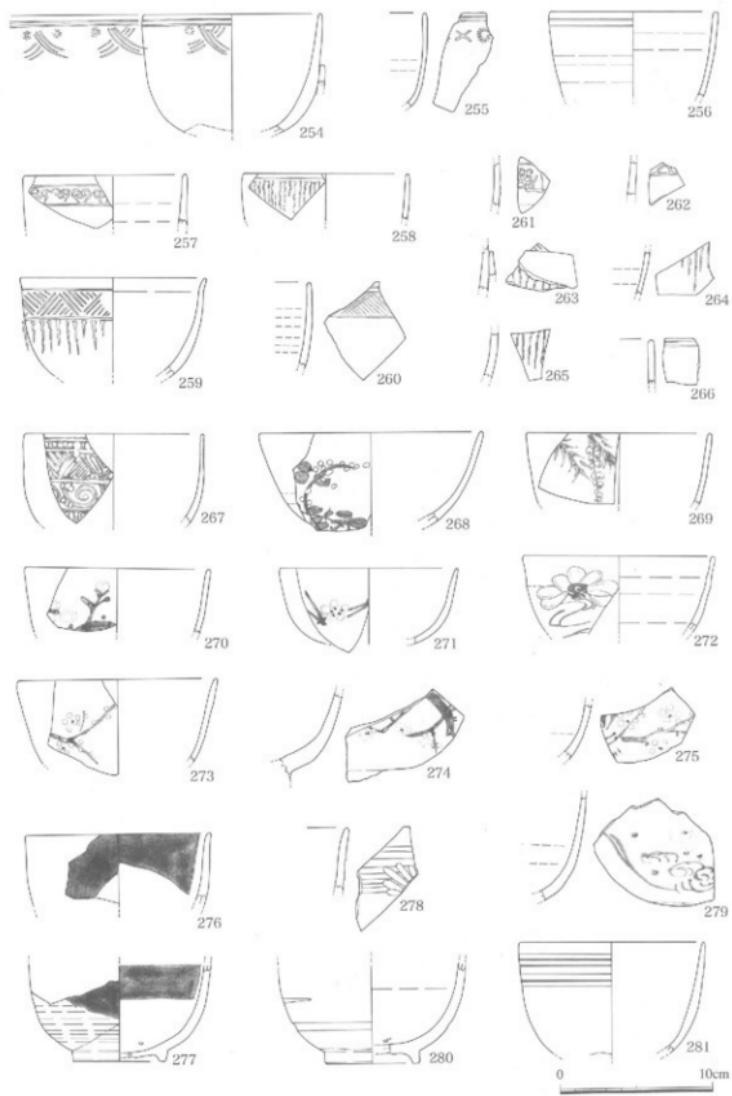


Fig.30 出土遺物実測図 碗 14

不明である。内面には多段のロクロ目が残る。263は唇手文碗の外面に別個体の灰釉口縁部が溶着している。265も白化粧土象嵌による唇手文を描くものである。264は素焼きで未施釉。外面にはヘラ彫りで唇手文を描いており、象嵌文碗の未成品と考えられる。薄手の作りである。266は白化粧土象嵌の二重周線が確認できる。

267は無釉の素地に灰釉で團線、列点、檜垣、渦を描くもの。灰釉は明オリーブ灰色に発色し、内面の釉は焼成不良で白濁している。

268～275・279は鉄絵に白化粧土を組み合わせた文様を描くものである。268は鉄錆と白化粧土で草花文を描くもので、花弁を白化粧土で描き分ける。焼成時の失敗品内面の釉は気泡を吹く。269は鉄錆と白化粧土で藤文を描くもので、花弁を白化粧土で描き分ける。外面には多段のロクロ目が残る。270は鉄錆と白化粧土で草花文を描き、花弁を白化粧土で描き分ける。271は器高の低い丸碗で、鉄錆と白化粧土で梅花と松葉文を描く。272も外面に白化粧土と鉄錆による花文を配し、花弁を白化粧土で描き分ける。内外面に綏やかなロクロ目が残る。273～275は鉄錆と白化粧土で梅文を描き、花弁を白化粧土で描き分ける。279は雲文か。鉄錆と白化粧土で描き分けをする。

276は外面上位にヘラ彫りによる陰刻文様を施すもので、褐色の鉄釉の上に暗オリーブ色の灰釉を重ね掛けしている。胎土は黄灰色を呈する。底部277は胎土、釉調とも276に共通し、外面下位にヘラ彫りによる陰刻文様を施す。体部下位のナデ調整は省略され、多段の鉢底が残る。高台は断面台形で低く、高台脇に抉りが入る。278は外面上位に多段の丸彫りを巡らせ、その上に丸彫りで陰刻文様を施す。灰釉は焼成不良で白濁している。280は外面下位に丸彫りによる凹線を施している。灰黄色を帯びる半透明の釉を施釉する。酸化焼成で胎土は浅黄色を呈する。281は外面上位にロクロ成形による数段の凹線を巡らす。酸化焼成で灰釉は浅黄色を帯び光沢が強い。

282～311は鉄絵を描くものである。282は鉄錆で若松文を描く。体部外面に刷毛状の工具によるロクロ目。灰釉は焼成不良で白濁する。283は外面に鉄錆で松文を描くが、素焼きの状態で、鉄絵は赤褐色に発色している。284は松葉文を描く。285～287は鉄錆で竹文を描くものである。288は外面に鉄錆で草花文を描く。灰釉は焼成不良気味で白濁し、器面にぶい橙色の御本が入る。289は外面に鉄絵(紅葉か)を描く。290・311は葦か。291は植物と思われるが、鉄錆は黒色に発色する。292は文様不明であるが草花文、又は宝文か。293は外面に鉄絵を描く。酸化焼成で、灰釉は淡黄色を帯び、胎土は浅黄色を呈する。294は鉄錆で網干を描く。外面ロクロ目。灰釉は焼成不良気味で灰白色に発色し、鉄絵もオリーブ黄色を呈する。体部外面には別個体の溶着痕が残る。295は山水文の一部か。296は鉄錆で丸文を描く。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉で細かい貫入が入る。胎土は灰黄色を呈する。297は文様不明であるが草花文、又は宝文か。300・301・303は宝文。301は宝珠と笠文を描く。高台内に浅い渦状の鉢底。釉は焼成不良気味で白濁し、胎土は灰白色を呈する。303は鉄錆で瘤束と宝珠を描く。298も宝文の一種か。299も同様の文様と思われるが略化されている。302は文字文を描く。304～306は鉄錆で注連縄文を描くものである。304は内面に綏やかなロクロ目が残り、高台内に渦状の鉢底が残る。305は体部下位のナデ調整は省略される。高台は細い断面四角形で高台内に渦状の鉢底が残る。307は外面に鉄絵(花文か)を描く。高台内に渦状の鉢底。釉は焼成不良気味で白濁し、胎土は酸化焼成気味で灰白色を呈する。308は外面に鉄錆で松

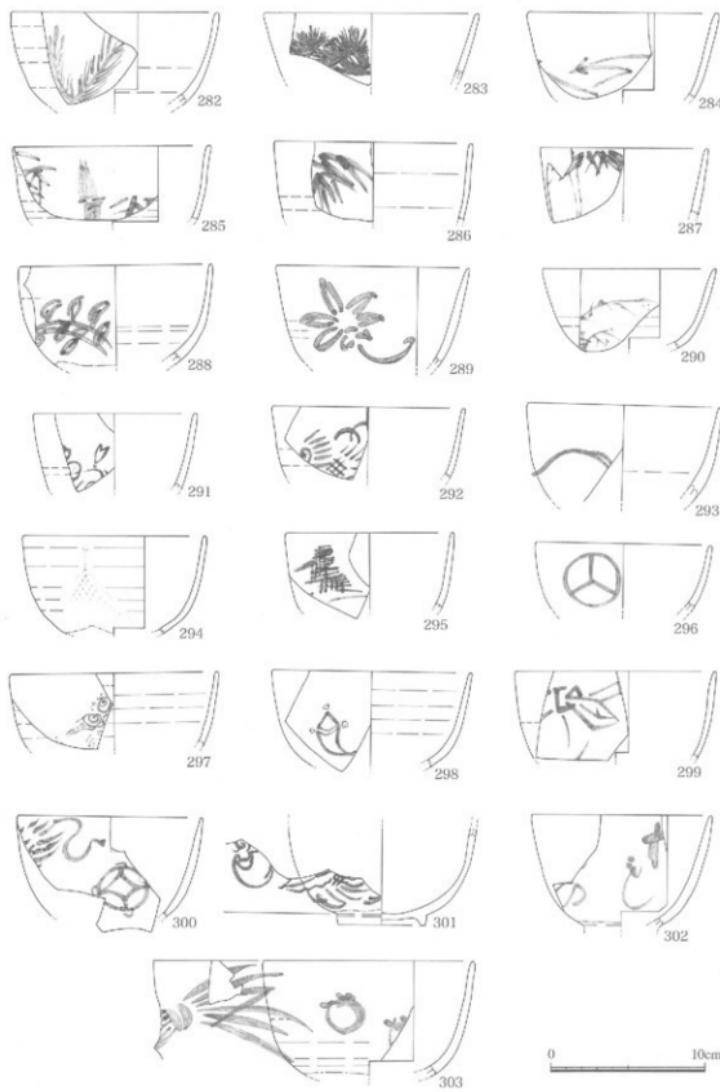


Fig.31 出土遺物実測図 碗 05



Fig.32 出土遺物実測図 碗 16

葉文を描く。灰釉は焼成不良で粉状。胎土は浅黄橙色を呈する。309は外面に圓線と文様を描くが、焼成不良のため鉄絵、呉須絵の区別がつかない。灰釉は白濁し、胎土は黄灰色を呈する。310は口径11cm台のやや小振りの丸形碗と思われる。文様の有無は不明で、濃い灰オリーブ色の半透明の釉を施釉する。体部外面に別個体鉄絵碗の口縁部片が溶着する。

312～315は呉須と鉄絵で文様を描き分けるものである。312は若松文を呉須と鉄絵の細い筆描きで描く。枝と葉は呉須で、枝先端を鉄絵で描き分けている。313は外面には呉須と鉄絵で注連縄文を描くもので、縄を鉄絵、ウラジロを呉須で描き分ける。体部外面に多段のロクロ目。灰釉は透明で貰入が入る。314・315は草花文である。ともに草を呉須、花を鉄で描き分けている。

316～320・322は呉須絵を描くものである。316は山水文か。灰釉は焼成不良気味で白濁し、呉須は青灰色に発色している。317は外面に呉須による葵文を描く。灰釉は半透明で灰白色を帯び貰入が入る。318も呉須絵であるが、文様は不明である。薄手の作りで、灰釉は焼成不良で白濁している。319は小振りの丸碗で、呉須で宝文を描いている。320は宝文で、呉須の細い筆描きで宝珠と笠を描く。灰釉は焼成不良気味で、外面に別個体の陶器片が溶着している。322は植物文か。呉須の細い筆描きで描いている。321は呉須の象嵌で桐文を描くもので、桐文は印刻による。灰釉は焼成不良気味で白濁している。

323は無文の灰釉碗である。薄手の作りで、外面に多段の強いロクロ目が残る。324は鉄釉碗の底部で、鉄釉は焼成不良で溶けていない。325は高台無釉の碗底部で、高台内の渦を装飾的に削り出している。外面の片側は焼成不良で釉が白濁する。328は小振りの丸碗底部か。薄手の作りで、灰白色的胎土に灰白色を帯びる半透明の灰釉を施釉する。高台無釉。内底に円錐ピンとハマの一部が溶着している。326は高台無釉の碗底部で太く高い断面逆台形の高台をもつ。豊付の外側には粗い面取りを施す。高台内は兜巾状であるが、鉢底は乱れが強い。灰釉は焼成不良で片面の釉は溶けていない。胎土は灰白色で非常に粗く、石英・長石の粗砂を多量に含んでいる。底部327は高台無釉の碗底部で、外側面に強いロクロ目を残す。焼成不良気味で釉は白濁しており、内底には別個体の胎土片が多量に溶着している。

②小碗 (Fig.33)

329～335は高台無釉の丸形灰釉小碗で、断面逆台形の高台をもつ。底部が残存するものは何れも高台内を曲線的に削り出し、外底に渦状の鉢痕が残る。329以外の製品は灰白色の胎土をもつ。329は素焼きで筒丸形小碗の未成品である。高台は断面逆台形で、豊付外側にナデを施し丸くおさめる。高台内渦状。胎土は淡黄色を呈する。331は丸形の小碗である。高台は断面逆台形で、豊付外側にナデを施し丸くおさめる。高台内渦状。灰釉は透明で灰白色を帯び貰入が入る。333は豊付両側とも鋭角的で豊付外側のナデを省略する。灰釉は透明で灰白色を帯び貰入が入る。胎土は灰白色を呈する。335は外面に呉須で宝文(宝珠、笠)を描き、呉須は緑灰色に発色する。高台は断面逆台形で、豊付外側にナデを施し丸くおさめる。灰釉は透明で灰白色を帯び貰入が入る。

336は高台無釉の腰型鉄釉小碗である。高台は断面逆台形で、豊付外側にナデを施す。褐色の鉄釉を施釉する。胎土は褐灰色を呈する。

337は素焼きで丸形小碗の未成品である。高台は断面逆台形で太く、豊付外側にナデを施し丸く

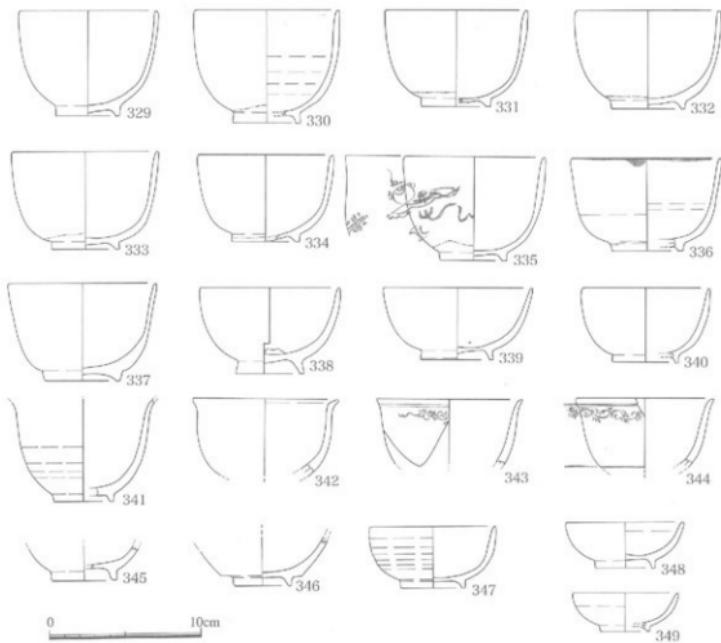


Fig.33 出土遺物実測図 小碗、小杯

おさめる。高台内渦状。胎土は灰白色を呈する。

338は高台施釉の呉器形小碗である。高台は断面逆台形で高く、疊付の両側にナデを施す。高台は深く削り出し、高台内は凸状である。灰釉は半透明で灰白色を帯び貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。内底に黒褐色の粘土塊が溶着している。

339は高台施釉の丸形小碗である。灰釉は半透明で灰白色を帯び細かい貫入が入る。胎土は灰白色を呈し、器面にぶい橙色の御本が入る。340は高台施釉の丸形小碗である。灰釉は透明で灰オーリーブ色を帯び貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。

341～344は端反形碗である。341は高台施釉で、文様の有無は不明である。灰釉は灰白色を帯び貫入が入る。342は口縁部が強く外反する。灰釉は焼成不良気味で白濁する。343は口縁部外面に呉須で二重園線、その下側に花唐草文を配する。344は口縁部外面に呉須と鉄錆で園線と花唐草文を描き、花文は鉄錆、その他を呉須で描き分ける。灰釉は半透明で灰白色を帯び細かい貫入が入る。

345は小碗の底部で、高台施釉。焼成不良で釉は溶けておらず粉状である。346は杉形小碗の底部か。高台施釉。胎土は灰白色で、褐色の鉄釉を施釉する。347は素焼きで丸形小碗の未成品である。体部外面にロクロ目、高台内に渦状の鉢痕が残る。胎土は灰白色を呈する。

③小杯 (Fig.33)

348・349は丸形小杯である。348は高台施釉で、灰釉は半透明で灰白色を帯びる。349は高台施釉で、高台端部は丸くおさめる。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯びる。

④碗蓋 (Fig.34)

350～363は碗の蓋である。

350は、摘み周囲に2条の沈線を巡らし、その周囲に印刻による如意頭文を配する。鉄錆による象嵌を意図したものとみられるが、灰釉が溜まり、文様は明瞭でない。灰釉は焼成不良で白濁する。351は外面に白化粧土と鉄錆による梅花文を描き、花弁は白化粧土、花芯は鉄錆で描き分ける。灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。352は器高が低く、口縁端部を面取る。外面に鉄錆による芭蕉葉を描く。353は口縁部が外面に稜をなして屈曲する。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。354は口縁部外面に呉須で四方櫻文を巡らす。灰釉は透明で貫入が入る。355は外面周縁に呉須による圓線を描き、四方に楕垣文を配する。356～361は碗蓋であるが文様の有無は不明である。358は灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯びる。359は灰釉は透明で黄橙色を帯び光沢が強い。362は粗製の碗とみられるもので、外面に放射状の斑痕と荒いケズリ痕、内面には渦状のロクロ目が残る。灰釉は浅黄色を帯びる。胎土は粗く、長石の角礫や石英粗砂を含む。363は外面に多条の沈線を巡らすもので、灰釉は半透明で灰白色を帯びる。

(2) 皿

364～430は皿である。皿は小皿、五寸皿、中皿を認め、形態別には丸形、端反形、輪花形、稜花

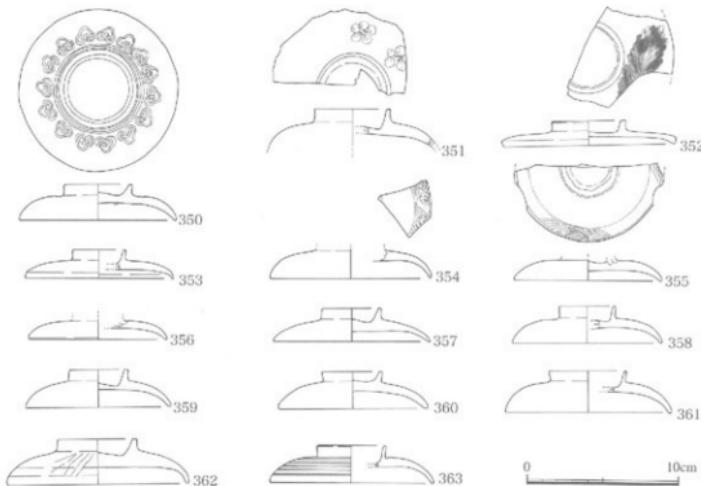


Fig.34 出土遺物実測図 碗蓋

形、方形などがある。また、高台無釉のものと高台施釉のものに分かれる。

これらのうち、364・370・372～381・383・387・389～393・404・405・407・408・410・415・420・422・429・430は焼成不良、386・387・394・395は別個体片や窯道具、窯土の溶着などの痕跡を残している。なお、砂目を伴う386は、高台形態や砂目積み痕等が特異で、他の尾戸窯製品とは異質な感を受けるが、焼成不良品の廃棄遺物であるためここに掲載した。

①小皿、五寸皿

丸形 (Fig.35)

364～382は見込み蛇の目釉剥ぎの灰釉丸形小皿で、いずれも高台無釉である。高台は逆台形で高く高台内を曲線的に深く削り出している。このうち364・366・380は疊付外側に面取りを施し、367・370・371・372・374・378は疊付外側を面取りした後ナデを施す。368・373・375・376・377・379・381・382は面取りをせず疊付外側にナデを施し丸みをもたせるもの、369は疊付全体にナデを施し丸く収めるものである。また364・365・367・371・372・374・376～378・380～382では、高台脇に抉りが入る。高台内の形態は364・370・372・373・380が兜巾状、365が平坦である。また378は高台内に荒い渦状の鉢痕が残る。体部外面下位は殆どのものが削りの後ナデ調整を施しているが、371では体部外面下半のナデが略化され、鉢痕が残る。381・382は高台の上位に焼成前穿孔を穿つものである。

386は高台無釉の丸形小皿で、見込みに灰白色の砂目が残る。内面には別個体の高台片、外面には口縁部片が溶着している。高台は幅広で断面四角形。高台は鋭角的に削り出し、高台内は兜巾状を呈する。半透明の灰オリーブ色の釉を施釉し、粗い貫入が入る。

383・384は高台施釉の丸形小皿である。383は口縁部が焼け込み、釉は部分的に焼成不良となる。384は体部外面に鉄錆による丸文、高台内に文字を描く。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。

385は高台施釉の丸形五寸皿で、高台は細く、疊付はナデにより丸くおさめる。高台は曲線的に削り出し、高台内は平坦である。

端反形 (Fig.36・37)

387～391は高台無釉の灰釉蛇の目釉剥ぎ小皿で、口縁部は外反し、高台は逆台形で高く高台内を曲線的に削り出している。388は疊付外側にナデを施し丸くおさめる。酸化焼成で、灰白色の胎土に灰白色を帯びる半透明の灰釉を施釉する。高台の上位に焼成前穿孔を穿つ。389は高台内に渦状の鉢痕が残る。疊付外側はナデにより丸くおさめる。酸化焼成で、胎土にはぶい淡黄橙色。高台無釉。灰釉は焼成不良で白濁する。高台の上位に焼成前穿孔を穿つ。390も高台の上位に焼成前穿孔を穿つ。387は疊付外側をナデにより丸くおさめる。高台内には渦状の鉢痕を残す。高台上位の1箇所に焼成前穿孔を穿つ。391は焼成不良気味で灰釉は白濁する。

392～397・399は高台無釉の灰釉端反形小皿である。高台は逆台形又は長方形で、高台内を曲線的に削り出している。392は高台が断面台形で疊付外側にナデを施す。高台内には渦状の鉢痕が残る。393は高台内が兜巾状を呈する。高台の上位に焼成前穿孔を穿つ。内底に円錐ビンと褐色の土塊が溶着している。394は高台内平坦である。内底に円錐ビンとハマの一部が溶着している。395は高台内が兜巾状を呈する。内底には円錐ビンと別個体の高台の一部が溶着している。鉢削り痕が

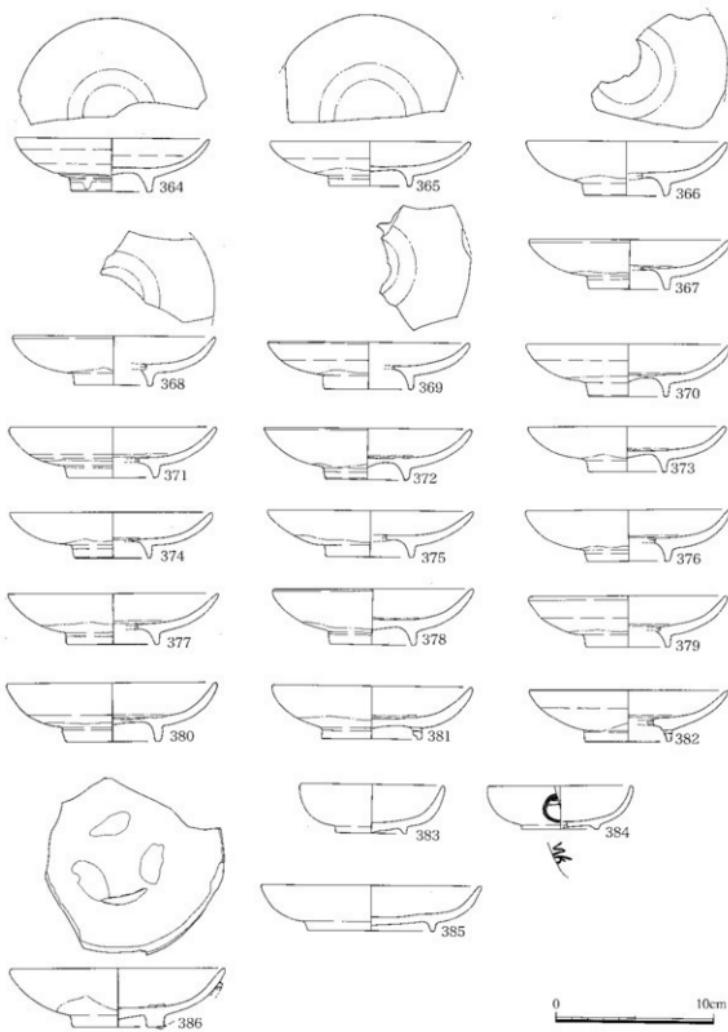


Fig.35 出土遺物実測図 皿(1)

荒く残り、雑器ランクの製品と思われる。396は高台無釉の端反形小皿で、口縁部が僅かに外反する。高台端部は内外ともナデを施し、端部を丸くおさめる。厚手の作りで、外面下半、高台内ともに荒い削り痕が残る。器面調整、胎土とも粗く、雑器ランクの製品と思われる。内底には別個体の高台痕が残る。397は高台無釉の端反形小皿である。薄手の作りで、口縁部は僅かに外反する。高台は曲線的に削り出し、高台内は平坦である。399は内面に稜をなして口縁部が外反する。内面には鉄錆で花文を描く。398は端反形の五寸皿で、内面に稜をなして口縁部が外反する。灰オリーブ色を帯びる半透明の灰釉が施釉する。

400は高台施釉の灰釉端反形小皿である。

401は口縁部を内面に稜をなして強く外反させた後、数カ所を内側に折り込み輪花形に形作る。内面には白化粧土と鉄錆による花文を描く。高台施釉。403は高台無釉の端反形五寸皿である。口縁部は内面に稜をなして外反し、数カ所を内側へ折り込む。内面には呉須で菊花を描く。割高台で、

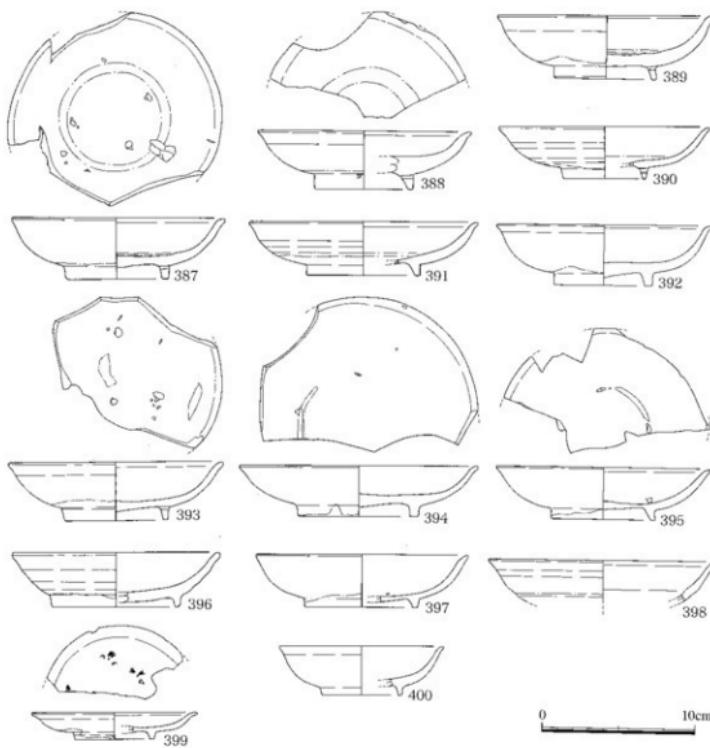


Fig.36 出土遺物実測図 皿(2)

高台は曲線的に削り出し、高台内が僅かに兜巾状を呈する。見込み蛇の目釉剥ぎ。404は口縁部輪花形で口縁は僅かに外反する。高台は断面四角形で疊付の両側にナデを施す。高台施釉。灰釉は焼成不良で白濁する。405は口縁部倭花形の小皿で口縁部が緩やかに外反する。高台は曲線的に削り出し、高台端部はナデを施して丸くおさめる。高台施釉。

変形形 (Fig.37)

402は変形形の小皿で、五弁花形になるものとみられる。口縁の数カ所を内側に折り込んでいる。高台を鋭角気味に削り出し、高台内は平坦である。高台施釉。酸化焼成氣味で灰釉は浅黄色を帶びる。

406～408は菊花形の小皿である。406は型打ち成形で、外面はヘラナデにより花弁を立体的に仕上げている。高台施釉。灰釉は半透明で灰白色を帶びる。407は外面は沈線で花弁の境界を描く。高台は細く、やや外方に張り出す。高台は曲線的に削り出し、高台端部にはナデを施し丸くおさめる。高台施釉。408は口縁部口銷。型打ち成形で、型作りの後内面にユビオサエとナデ、外面に不定方向のナデを施す。高台は接合部で剥離する。焼成不良で灰釉は粉状となる。

409～411は方形の小皿で、口縁部の四辺にアーチ状の深い抉りを施す。409は口縁部口銷。内面の片側に鉄銷と呉須による織状の文様を交互に描く。内底には輪状の段を設け、6箇所に目痕が残る。高台は鋭角気味に削り出し、高台内は僅かに兜巾状を呈する。高台施釉。灰釉は灰白色を帶び、細かな御本が入る。410は鉄銷と呉須を交互に配した織を描く。内底には輪状の段を設ける。高台は曲線的に削り出す。高台施釉。411は内面に鉄銷による格子文を描き、口縁部は口銷。内底には輪状の段を設ける。高台は断面四角形で細く、内側を曲線的に削り出す。高台施釉。

形態不明 (Fig.37)

412～418は高台施釉の皿底部である。底部412は内底に段をもつもので、内面に呉須絵を描く。灰釉は灰白色を帶びる半透明の釉で、貫入があり、呉須は淡い青色に発色する。413も内底に段をもつもので、内面に鉄絵を描く。灰釉は灰黄色を帶びる半透明の釉で、0.5～1mm大の貫入が入る。414は皿又は碗の蓋である。内面に白化粧土と鉄銷による若松と鶴を描き、鶴は白化粧土、鶴の目、嘴、羽の輪郭、若松を鉄銷で描き分ける。灰釉は透明で、灰白色を帶びる。415は内面に呉須で草花文を描く。灰釉は焼成不良氣味で白濁し、呉須は暗青灰色に発色する。416は内底に段をもつもので、内面に呉須で植物文様を描く。灰釉は灰白色を帶びる半透明の釉で、貫入があり、呉須は緑灰色に発色する。417は灰白色を帶びる半透明の灰釉を施釉する。418も内底に段をもつもので、文様の有無は不明である。灰釉は半透明で灰白色を帶び、1～2mm前後の粗い貫入が入る。

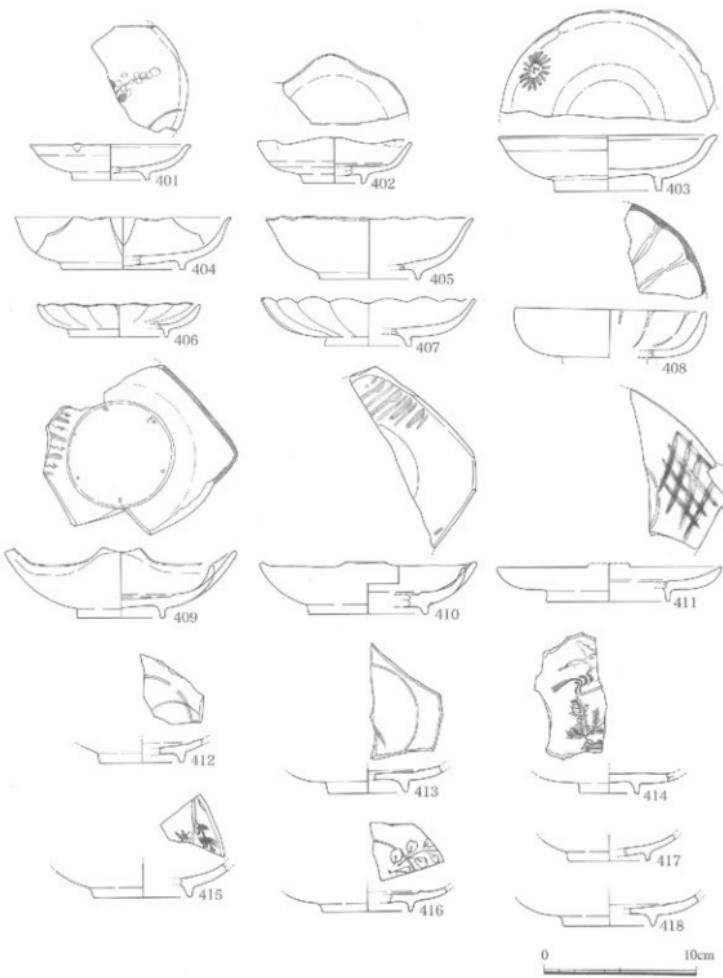


Fig.37 出土遺物実測図 皿(3)

②中皿、大皿 (Fig.38)

419は丸形中皿である。内面には線刻による花唐草文と印刻による山形文を記したとみられるが、文様ははつきりしない。高台施釉。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。420は端反形の中皿である。高台は逆台形で、高台は曲線的に削り出す。疊付外側に面取りを施す。高台無釉。鉄釉は焼成不良で、内面に砂礫が溶着する。422は端反形の中皿である。口縁部は強く外反する。高台は曲線的に削り出し、高台内は平坦である。疊付は全面をナデ、丸みをもつ。高台施釉。424は口縁部輪花形の中皿で、体部外面には緩やかなロクロ目が残る。高台はやや鋸角的に削り出し、高台内は平坦である。疊付は全面をナデ、両側が丸みをもつ。高台施釉。灰釉はオリーブ灰色を帯びる透明の釉である。

421は折縁形の大皿である。口縁端部は上方に跳ね上げ溝線状をなす。内面に緩やかなロクロ目。内底には鉄絵を描く。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で、貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。423も折縁形の大皿で、口縁端部が溝線状をなす。内底に鉄絵を描くが、文様は不明である。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で、貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。426は口縁部が外方へ僅かに屈曲する。外面に緩やかなロクロ目。文様の有無は不明である。灰釉は部分的に白濁し、1~2mm大の粗い貫入が入る。427は皿形の形態をもつが、用途は不明である。ベタ底で、外底には荒いケズリ痕が残る。全面に鉄釉施釉の後、外底の釉を拭き取る。

428は方形盤形の皿である。タラ成形で、四足は貼付する。内面に呉須で山水文を描く。呉須はオリーブ灰色に発色し、灰釉は灰白色を帯びる。

③不明 (Fig.38)

425は端反形皿の口縁部で、内面にはヘラ彫りによる植物文様を描く。高台無釉。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入り、厚く掛かる部分は白濁する。胎土は灰白色を呈する。429は脚を貼付するもので、脚は接合部で剥離している。文様の有無は不明。釉は溶けておらず、粉状である。430は口縁部輪花形の皿か。口縁部は緩やかに外反し、体部外面にはロクロ目が残る。口縁部、口銷。灰釉は焼成不良で溶けていない。

(3) 鉢 (Fig.39~40)

431~435・437は浅丸形の鉢である。431は体部外面にロクロ目。高台は断面逆台形で低い。高台施釉。灰白色を帯びる半透明の釉を施釉し、胎土は灰白色を呈する。432は鉄釉鉢である。器壁は厚く、体部上位に1条の沈線を巡らせる。高台内に渦状の鉋痕が残る。外面の釉は黒色、内面は暗赤褐色を呈する。433は外面上位に鉄錆が刷毛塗りされる。灰釉は焼成不良で灰白色を帯びる。434は灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉する。435は外面の両側に鉄錆で花文を描く。体部下位のナデ調整は省略され、鉋痕が残る。高台は曲線的に削り出し、疊付外側にナデを施す。高台脇には抉りが入る。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉を施釉し、胎土は灰白色を呈する。437は外面下半に荒い鉋痕が残る粗製品である。疊付外側には面取りを施し、高台内には削り出しによる溝が残る。高台無釉。灰釉は灰オリーブ色を帯びる光沢の強い透明の釉である。436は腰張形の鉢か。体部外面に巻線と植物文を呉須で描く。呉須は淡い青灰色に発色する。

438~444・446・447は端反形の鉢である。438は小鉢で外反気味の口縁部を内側へ折り込み輪花

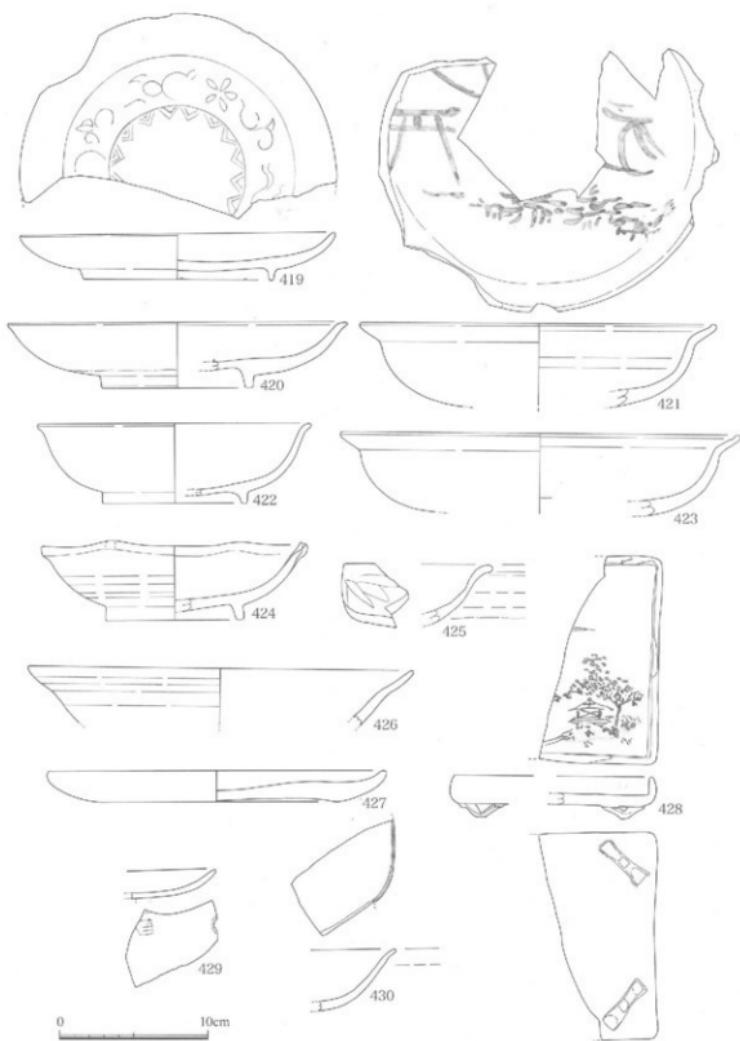


Fig.38 出土遺物実測図 皿(4)

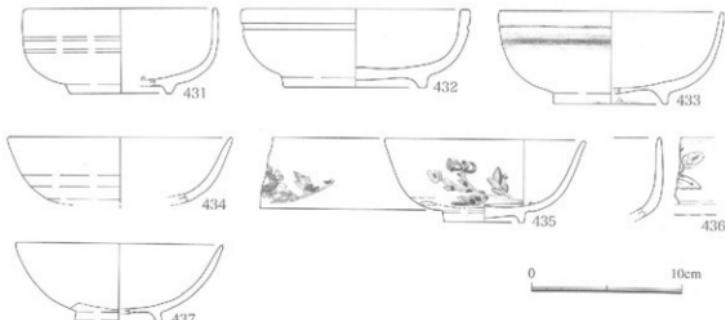


Fig.39 出土遺物実測図 鉢 (1)

形に成形する。内底には円形の段を設ける。高台施釉。灰釉は透明で明オリーブ灰色を帯びる。小鉢439は口縁部輪花形、口縁を外反させた後部分的に内側に折り曲げ五弁花形に形作る。高台施釉。灰釉は透明で灰白色を帯びる。440は口縁部輪花形小鉢の未成品である。素焼きで、胎土は灰白色を呈する。441は端反形の中鉢である。器高は低く、口縁部は外反する。高台は外方に張り出す。高台無釉。灰釉は透明で灰白色を帯び、貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。442は端反形の中鉢で、口縁部は内面に稜をなして強く外反する。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。444は内底に緩やかな渦状のロクロ目が残る。高台内は曲線的に削り出し、外底に浅い渦状の鉢痕が残る。443は口縁部が緩やかに外反し、内底には円形に段を設ける。高台無釉。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。2個体の皿が重ねた状態で溶着しており、上段鉢の見込みと下段鉢の高台に円錐ピンが溶着している。446は端反形の中鉢である。口縁部は外反させた後、内側に折り込み輪花形に形作る。器壁が厚く、外面下位に荒い鉢痕が残り、粗製品と思われる。高台無釉。灰釉は灰白色に発色する。447も粗製の端反形中鉢で無高台。外底に回転ケズリを施す。厚手の作りで、胎土はやや粗く石英粗砂を含む。灰釉は焼成不良で白濁する。

445は浅丸形の鉢で、口縁部は折湾状を呈する。高台は非常に低く、削り出しが浅い。灰白色を帯びる半透明の釉を施釉し、胎土は灰白色を呈する。

448は腰折形の中鉢で、体部は外面下位に稜をなして外方へ直線的に開く。文様の有無は不明である。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。

449は変形形の灰釉鉢で、口縁部の一部を内側に折り込み、輪花形に形作るものと思われる。外面には呉須による唐草文を描く。釉は焼成不良気味で白濁する。

(4) 猪口、高杯、捏鉢 (Fig.41)

450は猪口か。文様の有無は不明。内外面及び高台施釉で、灰釉は透明で灰白色を帯び貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。

451は高杯である。分割成形で、脚部は貼付による。脚部外面にはごく緩やかなロクロ目が残る。脚部は内外面とも施釉し、端部の釉を拭き取る。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。

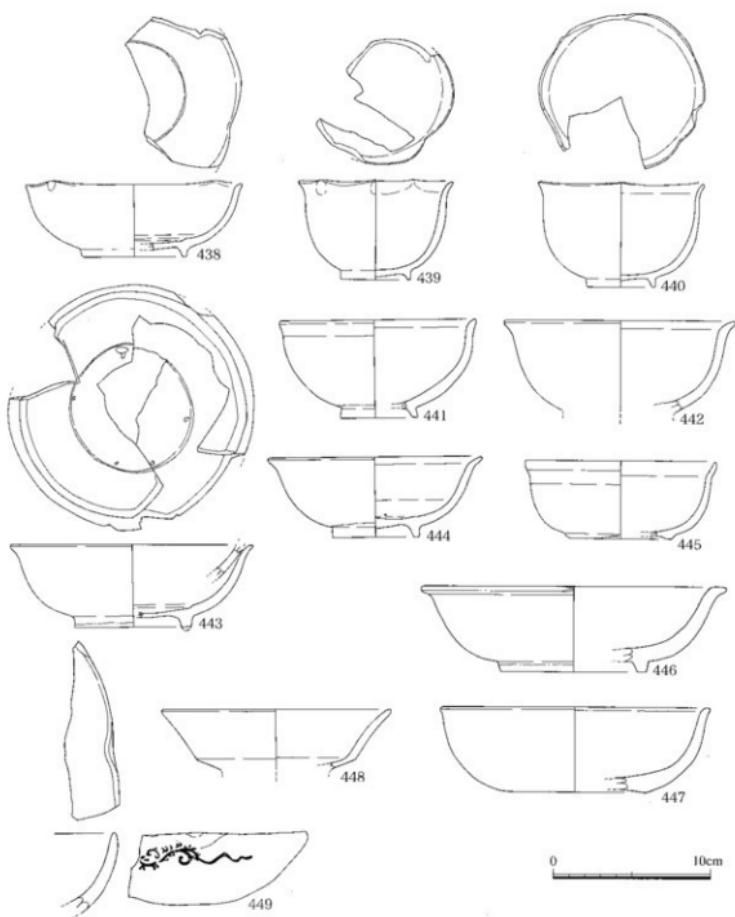


Fig.40 出土遺物実測図 鉢(2)

452は鉢か。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。体部外面ロクロ目顯著。内外面にぶい赤褐色の鉄軸を施釉し、口縁部内外面にはオリーブ褐色の軸を重ね掛けする。胎土は灰白色を呈する。

453は捏鉢か。器壁は厚く、外面はロクロ目顯著。無高台で、外底はナデを施す。内面無釉で、口縁部から体部外面にかけてオリーブ褐色の褐釉を施釉する。

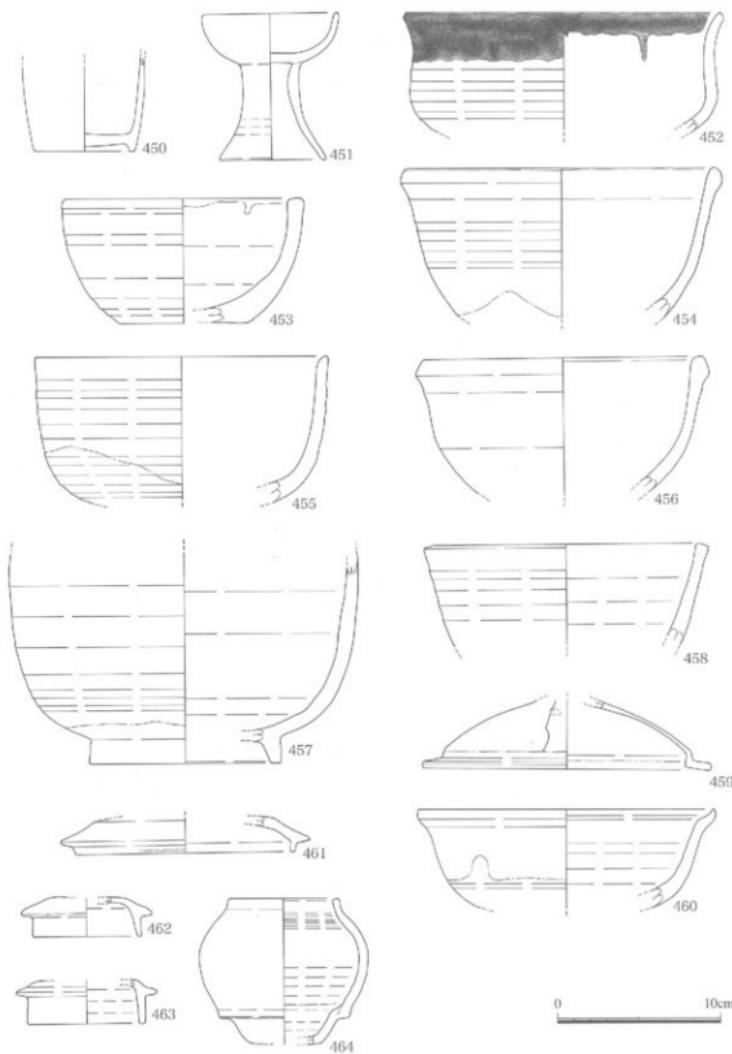


Fig.41 出土遺物実測図 猪口、高杯、鉢、捏鉢、土鍋、土瓶、釜類

454～457は捏鉢である。454は口縁部を肥厚させ端部を丸くおさめる。外面ロクロ目顯著、外面下半は荒いケズリ痕が残る。外面下位無釉。口縁端部の釉は拭き取る。灰釉は焼成不良で白濁し、胎土はにぶい黄橙色を呈する。455は器壁が厚く、体部外面上位に強い多段のロクロ目、下位に削り痕が残る。外面下位無釉。鉄釉は灰赤色に発色する。456は口縁部を肥厚させ端部を丸くおさめる。灰釉は焼成不良で白濁し、胎土は浅黄橙色を呈する。457は体部の器壁が厚く、高台内は曲線的に削り出している。外面ロクロ目。外面下位から高台外側面にかけて、乱れた荒いケズリ痕が残る。疊付の内側に面取りあり。灰釉は焼成不良で白濁する。胎土は淡黄色を呈する。

458は鉢か。器壁は厚く、口縁部は面取る。外面に緩やかなロクロ目が残る。無釉で、未成品かと思われる。

(5) 鍋、土瓶、釜類 (Fig.41)

460は鍋。口縁部は外反させた後上方に跳ね上げる。把手の形状は不明である。内面ロクロ目顯著。外面下位に鉢痕が残る。外面下半無釉。鉄釉は暗褐色に発色し、胎土は灰白色を呈する。459は鍋の蓋である。上面に白化粧土による文様を配する。内外面施釉で、鋤部無釉。灰釉は透明。胎土はにぶい黄橙色を呈し、粗砂を多く含む。

461～463は土瓶の蓋である。461は天井部を欠損し、文様の有無は不明である。かえりと内面無釉。灰釉は灰白色を帯び、粗い貫入が入る。462は天井部を欠損し、文様の有無は不明である。かえりは高い。内面とかえりは無釉。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。胎土は灰白色を呈する。463も天井部を欠損し、文様の有無は不明である。かえりは高く、内面に緩やかなロクロ目が残る。外面、かえりとも施釉で、かえり端部のみ釉を拭き取る。灰釉は灰白色を帯び、焼成不良気味で白濁する。酸化焼成で胎土は灰白色を呈する。

464は小型の釜類か。内面はロクロ目顯著。内面、底部と体部の境に接合痕が明瞭に残る。底部外面はケズリ後ナデである。内外面施釉。底部外面無釉。灰釉は半透明で灰白色を帯び、部分的に御本が入る。胎土は灰黄色を呈する。

(6) 蓋、蓋物、段重 (Fig.42)

465～467は蓋物の蓋でドーム状の天井部を有し、かえりをもたない。465は上面に型作りによる陽刻の花文を配する。摘みは欠損している。内外面施釉で、鉄釉は暗赤褐色に発色する。466梅形の摘みを貼付するもので、梅花はヘラで細部を描く。内外面施釉。灰釉は透明で灰白色を帯びる。467は摘みを欠損する。内外面施釉で、口縁端部の釉を拭き取る。灰釉は透明で灰白色を帯びる。

468・469は蓋物の蓋で、ドーム状の天井部を有しかえりをもつもの。468は上面に鉄錆で宝文を描く。内面とかえり無釉。釉は光沢の強い透明の釉で、粗い貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。469は外面に多条の沈線を巡らす。内面とかえりは無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉し、釉は粗い貫入が入る。

470～476は蓋で、天井部は平坦である。470は上面に摘みを貼付し、摘み上面と天井部外周にヘラ彫りによる沈線を巡らす。下面是ケズリ後回転ナデ。下面無釉、上面に灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施釉する。胎土は灰白色を呈する。471は下面是回転ナデ。摘みは四方を折込んで成形し、上面にヘラ彫りによる渦状の文様を描く。下面無釉。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。472は上面

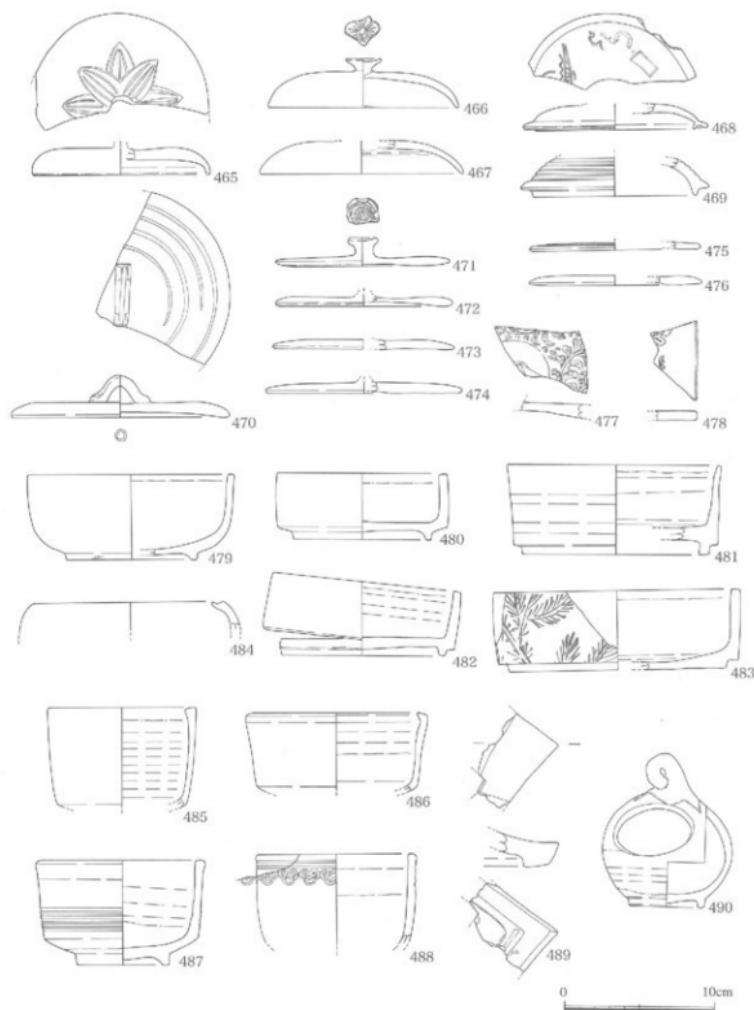


Fig.42 出土遺物実測図 蓋、蓋物、段重、水指、香炉、火入れ、器種不明

ナデ、下面は回転ケズリ。下面無釉、上面に灰黄色を帯びる半透明の釉を施釉する。胎土は灰白色を呈する。473は文様の有無は不明である。下面無釉。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。474は下面の中央に直線方向のナデ、周縁に回転方向のナデを施す。下面無釉。灰釉は焼成不良で白濁する。475は上面の周縁に凹線を多条巡らす。下面無釉。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯びる。476は下面無釉。灰釉は白濁気味で灰白色を呈する。胎土は灰黄色であるが、諏訪部分はにぶい黄橙色に発色する。

477は蓋物の蓋か。外面には呉須による唐草文を配する。呉須は青灰色に発色し、灰釉は細かい貫入が入る。478は箱形の蓋物蓋か。上面に呉須で植物文様を描く。呉須は淡い青色に発色する。灰釉は透明で粗い貫入が入る。

479は蓋物の身である。内外面と高台施釉。口縁部内面と口縁端部、疊付の釉は拭き取る。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。

480～483は段重。481は内外面施釉で、口縁部の内側と端部、高台無釉である。灰釉は透明で明オリーブ灰色を帯びる。482は内外面及び高台施釉で、口縁端部と高台外側のみ釉を拭き取る。灰釉は光沢の強い透明の釉で明オリーブ灰色を帯びる。焼け済み、体部と底部が離れる。内底周縁と高台縁に灰白色の砂が付着する。483は外面に呉須で若松文を描く。内外面と高台施釉で、口縁部内面と口縁端部、疊付の釉を拭き取る。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯びる。

(7) 水指、香炉、火入れ (Fig.42)

484は水指か。内外面施釉で、受け部分にも施釉される。灰釉は淡いオリーブ灰色を帯びる半透明の釉で1～2mm前後の粗い貫入が入る。胎土は灰白色を帯びる。

486は香炉。外面ケズリ、内面はロクロ目顯著。内面下半無釉。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯びる。

485・487・488は火入れ又は香炉。485は内面ロクロ目顯著。内面無釉。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯びる。胎土は灰白色を呈する。487は外面下位に5条の沈線を巡らす。高台内は曲線的に削り出し、高台内兜巾状。疊付外側は面取りしナデを施す。鉄釉施釉で、高台と内面下半無釉である。鉄釉はにぶい赤褐色、胎土は灰黄色を呈する。488は口縁部外面に2条の沈線、その下側に印刻による雲文を巡らせる。暗赤褐色の鉄釉を施釉し、内面下半は無釉である。胎土は灰黄色を呈する。

489は香炉の蓋か。建物の屋根を形作ったものとみられ、上面の一角に窓をもつ。内外面施釉で、かえり内側のみ無釉である。灰釉は灰白色を帯びる半透明の釉である。胎土は灰黄色を呈する。

490は用途不明。茄子形で上位に梢円形の窓を設け、上面に茄子のヘタを形取った把手を貼付する。外面下半には荒い鉋痕が残る。高台内兜巾状。疊付外側にはナデを施す。内面施釉、高台無釉。鉄釉は体部が暗赤褐色、ヘタ部分が黒色に発色する。胎土は灰黄色を呈する。

(8) 鳥の水入れ、餌猪口 (Fig.43)

491～497は鳥の水入れである。何れも小判形で、底部形態や法量ともに共通しており、同一規格の製品と考えられる。491は環摘みを欠損する。タタラ作りで、内底に直線方向の粗いハケ目が残る。外底は未調整で凹凸が残る。内外面施釉で、外底無釉。灰釉は焼成不良で部分的に白濁する。胎土は灰白色を呈する。492は環摘みを欠損する。タタラ作りで、内底に直線方向の粗いハケ目が

残る。外底は周縁部にナデを施しその他は未調整で凹凸が残る。外底無釉。灰釉は半透明で灰白色を帯び、貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。493は環摘みを欠損する。タタラ作りで、底部と体部の接合部付近にユビオサエ痕が残る。内外面施釉で、外底の釉は拭き取る。灰釉は半透明で明オリーブ灰色を帯び、貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。494は環摘みは1箇所が残存する。内外面施釉。灰釉は透明で浅黄色を帯びる。495は環摘みを欠損する。タタラ作りで、内底に直線方向の粗いハケ目が残る。外底はナデ。外底無釉。灰釉は透明で1~2mm前後の粗い貫入が入る。胎土は灰白色を呈する。496・497も鳥鉢で、同様の規格になるものか。外底周縁に粗いナデを施す。497は環状の摘みが残存する。

498~503は餌猪口である。498は環摘みを貼付する。外底は回転ケズリ。未成品で素焼きの状態である。胎土は灰白色を呈する。499は摘み部分を欠損する。外底は回転ケズリ。内外面施釉。底部無釉。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。胎土は淡黄色を呈する。500は環状の摘みを貼付する。内外面施釉。底部無釉。灰釉は透明で明オリーブ灰色を帯びる。胎土は灰白色を呈する。501は環摘みを貼付する。外底回転糸切り。内外面施釉。底部無釉。灰釉は半透明で灰オリーブ色を帯びる。胎土は灰白色を呈する。502は摘み部分を欠損する。全面施釉で、外底にも釉が掛かる。胎土は灰白色を呈する。503も餌猪口であるが、摘み部分を欠損する。外底は回転ケズリ。内外面施釉。底部無釉。灰釉は半透明で灰白色を帯びる。胎土は灰黄色を呈する。

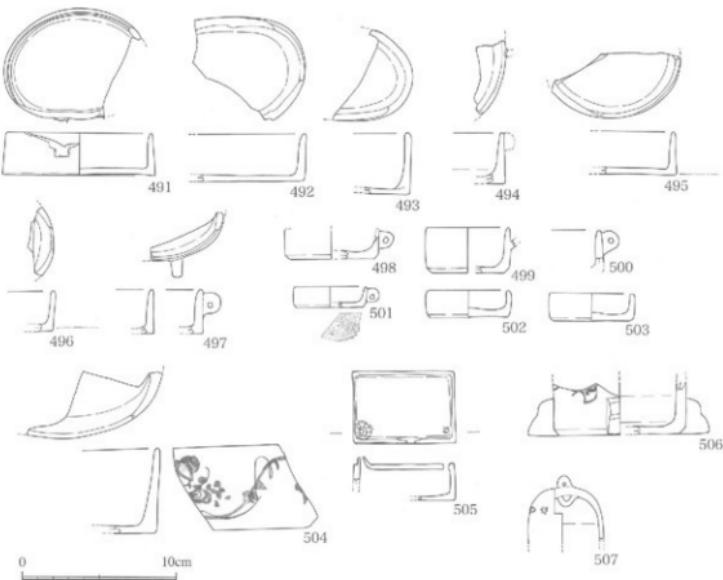


Fig.43 出土遺物実測図 鳥の水入れ、餌猪口、養水入れ、水滴、筆筒、風鈴

(9) 髪水入れ、水滴、筆筒、風鉢 (Fig.43)

504は髪水入れか。長楕円形の形態をもち、タタラ成形。外面に植物文を呉須で描く。外底は直線方向のナデ。外底無釉。灰釉は半透明で灰黄色を帯びる。呉須は緑灰色に発色する。

506は筆筒。外面に鉄錆で宝文を描く。外面下位に脚を貼付する。底部脇に面取りを施し、外底は回転ケズリ。内面と外底無釉。灰釉は焼成不良で粉状である。

505は水滴である。タタラ成形。上面の二箇所に穿孔を穿つ。上面は、縁に段を残してケズリを施す。外面に淡い灰オーリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉する。内面と外底無釉。

507は風鉢又は釣り鐘。外面上位に印刻による菊花を巡らせる。ロクロ成形で、把手と釣り部分は貼付による。明オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施釉する。胎土は灰白色を呈する。

(10) 瓶類 (Fig.44)

508は花生けか。内面にロクロ目。内外面に褐色の釉を施釉する。胎土は灰白色を呈する。509は瓶。体部外面上位に巻線、その下に雲、菊花、山形文、雷文、丸にクルス文を印刻し、鉄絵象嵌とする。内面無釉。灰釉は透明で光沢が強い。胎土は灰白色を呈する。510は瓶類の底部か。平底で、底部外側に面取りを施す。内面ロクロ目顕著。外面に暗赤灰色の鉄釉を施釉する。内面と外底無釉。胎土は黄灰色を呈する。511は瓶類又は花生けか。内外面ロクロ目顕著。底部は平底で、底部脇に面取りを施す。外底に回転糸切り痕が残る。内外面施釉。灰釉は半透明で灰白色を帯び、部分的に白濁する。512はクリ底の瓶底部である。外面に丸彫りによる陰刻文様を施す。高台施釉で、暗赤褐色の鉄釉を施釉する。513は体部の数カ所に継方向の筋目を入れる。底部クリ底。体部外面に白化粧土施釉の後、灰釉を重ね掛けする。灰釉は半透明で淡黄色を帯びる。内面と底部無釉。胎土はにぶい黄橙色で粗く粗砂を多く含む。514は瓶類の底部で、クリ底。高台施釉で、内外面及び高台に黒色の鉄釉を施釉する。胎土は褐色を呈する。515もクリ底の瓶底部である。鉄釉は焼成不良気味で白濁し、内底には橙色の土塊が溶着している。516は小型の瓶底部で、外底回転糸切り。内

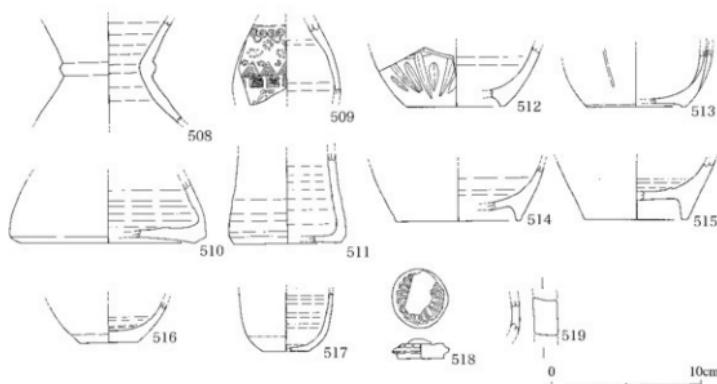


Fig.44 出土遺物実測図 瓶類、花生、茶入、瓶蓋

外面施釉。鉄釉は焼成不良で白濁する。

517は茶入れか。内面に多段のロクロ目が残る。内面と底部無釉。外面に鉄釉を施釉するが、釉は灰褐色で気泡を吹く。胎土は明褐色を呈する。518は小瓶の蓋である。上面は型作りで、陽刻の菊花文を施す。摘みは欠損しており、上面に別個体の陶器片が溶着している。下面無釉。上面に灰白色を帯びる透明の釉を施釉する。519は器種不明で、把手の一部とみられる。胎土は灰白色で、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。

(II) 壺、甕 (Fig.45)

520は小壺である。底部は平底で回転糸切り痕が残る。内面ロクロ目顯著。外面に黒褐色の鉄釉を施釉する。内面下半と外底無釉。胎土は灰白色を呈する。521は壺の体部か。外面に鉄鋸による文字を描く。内面ロクロ目顯著。内面下半無釉。灰釉は透明で灰白色を帯びる。524は壺の口縁部

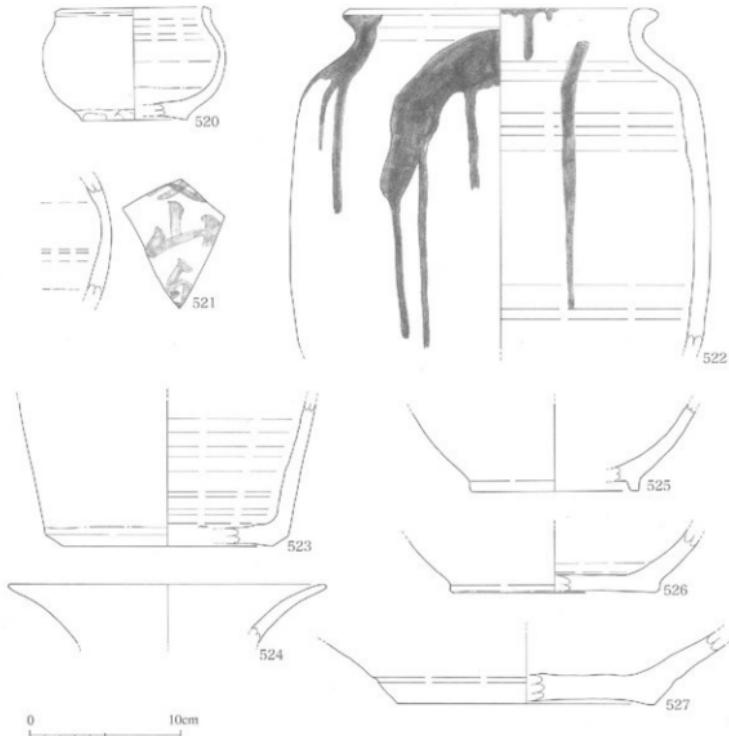


Fig.45 出土遺物実測図 壺、甕

片で、口縁部が外方に強く開く。にぶい赤褐色の鉄軸を施釉する。胎土は明褐灰色を呈する。525は壺の底部か。高台施釉、内面無釉で外面に灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉する。胎土は灰黄色を呈する。

522は壺である。口縁部は外方に拡張させ、口縁端部を丸くおさめる。内外面に暗赤褐色の鉄軸を施釉し、さらに外面肩部から灰軸を流し掛けする。胎土は灰白色を呈し、胎土中に粗砂を多量に含む。526は壺の底部で、522と同一個体の可能性をもつ。平底で、外底はユビオサエとナデ。内外面に暗赤褐色の鉄軸を施釉する。

523は壺又は甕の底部。平底で、底部外側を大きく面取る。体部内面ロクロ目顯著。内面に灰軸、外面には白化粧土施釉の後透明の釉を重ね掛けする。底部無釉。胎土は灰黄色を呈する。527は壺の底部か。内外面に暗赤褐色の鉄軸を施釉し、外底にも釉が掛かる。内底に輪状の砂目、外底の四方に円形の砂目を認める。

(12) 灯明受皿、燭台、火鉢、焜炉 (Fig.46)

528～532は灯明受皿である。528は外底回転ケズリ。口縁部から内面に黒褐色の鉄軸を施釉し、外面無釉。内面の一箇所に扁平な円盤状の粘土と砂礫が、外底に円錐ピンが溶着する。529は体部外面に強いロクロ目が残る。外底無釉。灰軸は透明で細かい貫入が入るが、外面の片側は焼成不良で釉は白濁する。530は受け部に浅いU字状のスリットがあり、三方にスリットを設けるタイプと思われる。内外面に鉄軸を施釉し、外底にも釉が薄く掛かる。受け部先端は無釉である。胎土は灰白色を呈する。531も受け部の三方にV字状のスリットを設けるタイプである。内外面に鉄軸を施釉し、外底にも釉が薄く掛かる。胎土は灰白色を呈する。532も同様のタイプである。内外面に暗黒褐色の鉄軸を施釉し、外底と受け部先端の釉は拭き取る。胎土は灰黄色を呈する。

535は台皿付きの灯明受皿、又は燭台である。分割成形で皿と脚部は貼付による。脚部は中空で、上位に円孔3穴が確認できる。にぶい赤褐色の鉄軸を施釉し、高台内施釉。536は燭台。柱状の脚部をもつもので、外面ロクロ目顯著。上面の中央に貫通しない穿孔を穿つ。胎土はにぶい黄褐色を呈する。

533は火鉢。体部内外面ヨコナデ、タテハケ。口縁端部ハケ。内底にはユビオサエ痕と不定方向のナデが残る。3足は貼付する。外面に灰軸を施釉し、体部内面と脚端部無釉。釉は半透明で淡黄色を帶び貫入が入る。胎土は淡黄色で石英、長石の粗砂を含む。

534は焜炉。前面に口縁部から切り込む窓をもつ。外面上位には半月形の双耳を貼付する。体部外面ナデ、内面ロクロ目。内面に鉄軸を施釉し、外面無釉。胎土はにぶい黄褐色を呈し、胎土中には長石の角礫と石英の粗砂を多量に含む。体部外側の片側には窓土が溶着している。

(13) 器種不明 (Fig.47)

537は器種不明。筒状の形態をもち底部を持たない。体部は内外面ロクロ目顯著で、外面の一部に縦方向のイタナデが施される。口縁端部と底部は面取る。内面施釉。口縁端部と底部の釉は拭き取る。黒褐色の鉄軸を施釉する。538は口縁部が強く外反する。体部外側には回転方向の粗いハケ目が残る。外面に黒褐色の鉄軸、内面ににぶい黄褐色の釉を施釉する。胎土は黒褐色を呈する。539は脚部とみられるが器種不明である。内外面施釉で、脚端部の釉を拭き取る。鉄軸施釉で、釉

は暗赤褐色を呈する。焼成不良気味で釉は部分的に白濁する。胎土は淡黄色を呈する。541は皿又は蓋。口縁部は溝線状で体部外面にロクロ目が顕著に残る。ベタ底。外底無釉で、灰白色を帯びる半透明の釉を施釉する。

540・542・543は捏鉢の底部か。540は体部外面に緩やかなロクロ目が残り、高台は厚みをもつ。灰釉は半透明で灰白色を帯び貫入が入る。内底に4足の日痕が残り、ピンの先端が溶着している。542は高台内に鋭角的に削り出し、疊付外側を大きく面取る。外面下半無釉。内面には橙色を帯びる透明の釉を施釉する。胎土は浅黄橙色を呈する。543も高台内は鋭角的に削り出し、疊付外側を大きく面取る。外面下半無釉。内外面に鉄釉を施釉し、内面の釉は刷毛塗りする。胎土はにぶい橙色を呈する。

544は鉢の底部か。高台施釉でクリ底。灰釉は透明で灰白色を帯び貫入が入る。胎土は灰黄色を呈する。545は器種不明の底部片で、内外面と高台施釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉を施釉する。546は鉢又は皿の底部で、高台施釉。灰釉は焼成不良で白濁する。

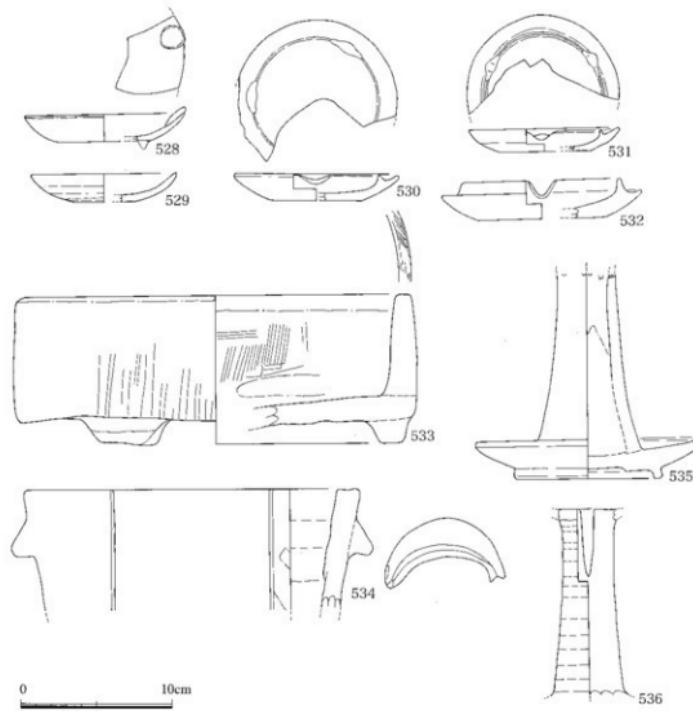


Fig.46 出土遺物実測図 灯明受皿、燭台、火鉢、焜爐

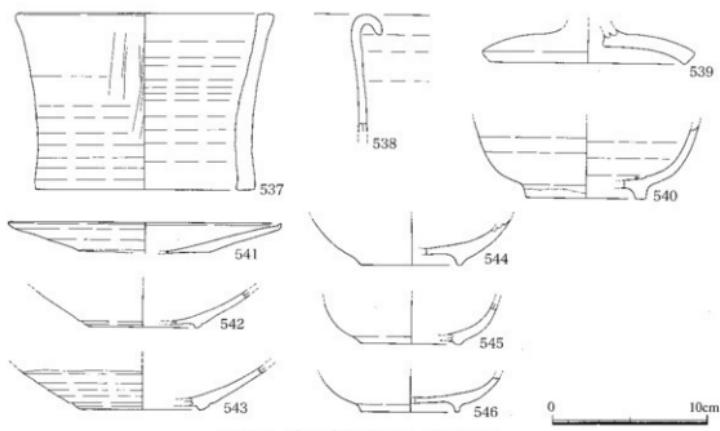


Fig.47 出土遺物実測図 器種不明

2. 土師質土器

土師質土器では、杯、小皿が出土している。これらは色調により白色～灰白色のものと、淡黄色～橙色のものがある。

(1) 小皿

①白色系陽刻文小皿 (Fig.48)

547～578は陽刻文小皿である。色調は何れも灰白色で、良好に水簸された緻密な胎土をもつ。内面の陽刻文様には寿字文、高砂文、鶴亀文があり、少数的なものとして菊水文をもつものも1点出土している。文様には同沢のものも多くみられるが、文様の殆どが一致しながら細部に違いがあるものもあり、原図を元に型を製作する過程で違いが表ってきたものと考えられる。形態は何れも、平坦で大きい底部から、体部が口縁部に向かい内湾気味に立ち上がるるものである。

ただし、製作技法に関しては2つのタイプがあり、技法A:体部内外面に回転方向の静止ナデ、外底に直線方向や不定方向の静止ナデを施すもの547～562・564～578、技法B:体部内面に回転ナデ、体部外面と外底に回転ケズリを施すもの563に分かれる。このうち技法Aの内外面と外底への静止ナデでは、半乾きの状態で、繊維状の原体によって撫でたとみられる細かい擦痕が認められる。このナデ痕については、ロクロ成形後、半乾きの状態で内底への印刻を行い、その後器面全体への仕上げのナデ調整が施された際のものと考えられる。

寿字文

547～558は陽刻の寿字を印刻するものである。寿字には字体の一部に違いがあるものがあり、違いにより、a-1、a-2に区分できる。

547～555は寿字文a-1を印刻するものである。547・548・549・551は口縁部内面から陽刻文様周囲にかけて回転方向の静止ナデ、体部外面にヨコナデ、外底に直線方向のナデを施す。554は内外

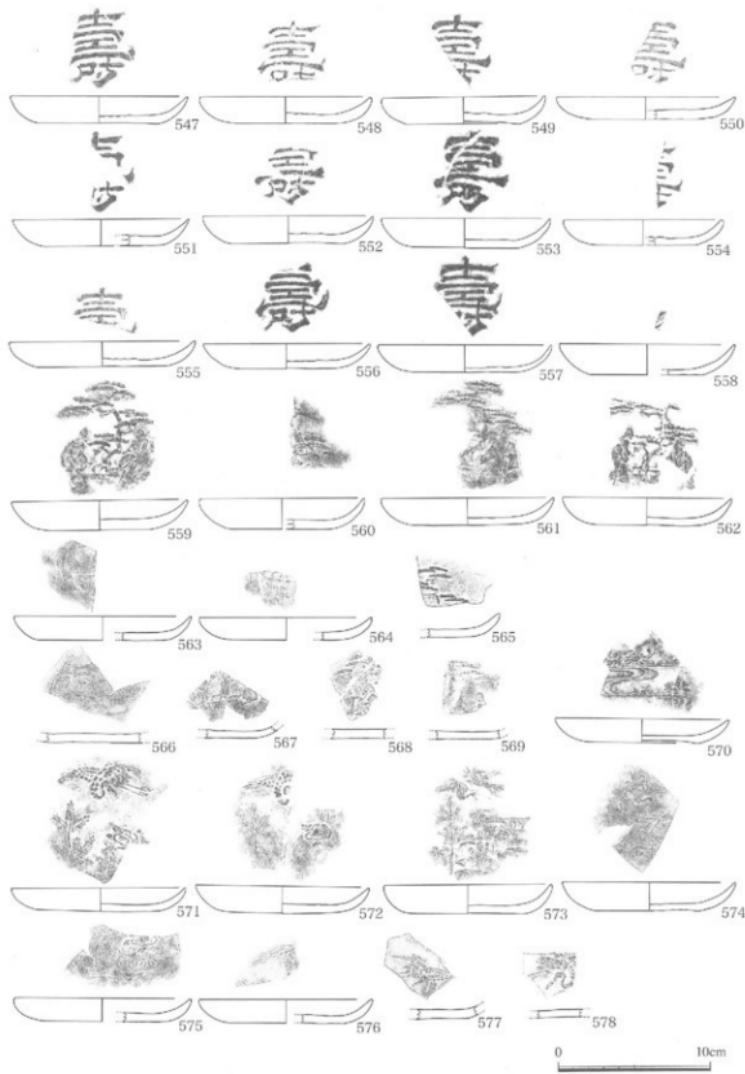


Fig.48 出土遺物実測図 土師質土器小皿

面に同様のナデを施し、外底は中央に一定方向のナデを施した後、周縁に沿って直線方向のナデを巡らす。553は器面が摩耗し調整は不明である。556・557は寿字文a-2を印刻するものである。文字の大部分は寿字文a-1に一致しているが、下部右側の一部に違いが認められる。557は口縁部内面に回転方向の静止ナデ、体部外面にヨコナデ、外底に一定方向のナデを施す。556は器面が摩耗し調整は不明である。558も寿字文であるが、小破片のため字体の細部は不明である。

高砂文

559～569は高砂文を印刻するものである。これについても、a-1・a-2・bの各タイプに細区分でき、a-1・a-2は文様がほぼ一致するが細部に僅かな違いがある。

559・560・566は高砂文a-1である。559は口縁部～体部内面に回転方向のナデ、外面にヨコナデ、外底に直線方向のナデを施す。560は口縁部内面に回転方向のナデ、体部外面にヨコナデ、外底に一定方向のナデを施す。562は内面に回転方向のナデ、体部外面にヨコナデ、外底に不定方向のナデを施す。561・565・569は高砂文a-2。561は口縁部内面に回転方向のナデ、体部外面にヨコナデ、外底に不定方向のナデを施す。568は高砂文bで、翁の体の向きが異なっている。563・564・567は高砂文を印刻するが、小破片のため細部は不明である。564・567は口縁部内面に回転方向のナデ、体部外面にヨコナデ、外底に不定方向のナデを施す。563は口縁部～体部内面回転ナデ、口縁部～体部外面回転ケズリ、外底には回転ナデを施す。

鶴亀文

571～578は鶴亀文を印刻するものである。鶴亀文もa-1・a-2・a-3・b・cの各タイプに細区分できる。a-1・a-2・a-3はほぼ共通する絵柄であるが細部に僅かな違いが現れている。また、aとbでは、鶴亀の絵柄が裏返しの状態であり、同一の絵型を反転させて使用した結果とみられる。またa・bとcでは絵型が全く異なっている。

571は鶴亀文a-1を印刻する。571は口縁部～体部内面に回転方向のナデ、外面にヨコナデ、外底に直線方向のナデを施す。572は鶴亀文a-2を印刻する。鶴は571にほぼ一致するが、松と亀に僅かな違いがある。575は鶴亀文a-3を印刻する。鶴は571にほぼ一致するが、若松に僅かな違いがある。572は内外面に同様のナデ、外底に不定方向のナデを施す。576は小片であるが鶴亀文aか。577・578は鶴亀文bを印刻する。鶴の向きが左右逆転するが、反転させると大きさ、細部の文様等が571に一致する。573・574は鶴亀文cを印刻する。573は口縁部～体部内面に回転方向のナデ、外面にヨコナデ、外底には弧状のナデを施す。574は口縁部内面に回転方向のナデ、体部外面にヨコナデ、外底には一定に直線方向のナデを施す。

その他

570は水面に菊花の陽刻文様を施すもの。内外面にナデを施すが、他にみる纖維状の原体による擦痕はみられない。

②白色系無文小皿 (Fig.49)

579～582・587・588は白色系の胎土をもつ無文の土師質土器小皿である。これには、A: 内面回転ナデ、外面と外底が静止ナデのもの579、B: 内面が静止ナデ又は回転ナデで、体部外面と外底が回転ケズリのもの580～582、C: 内外面回転ナデで外底が回転糸切りのもの587・588があり、製作技

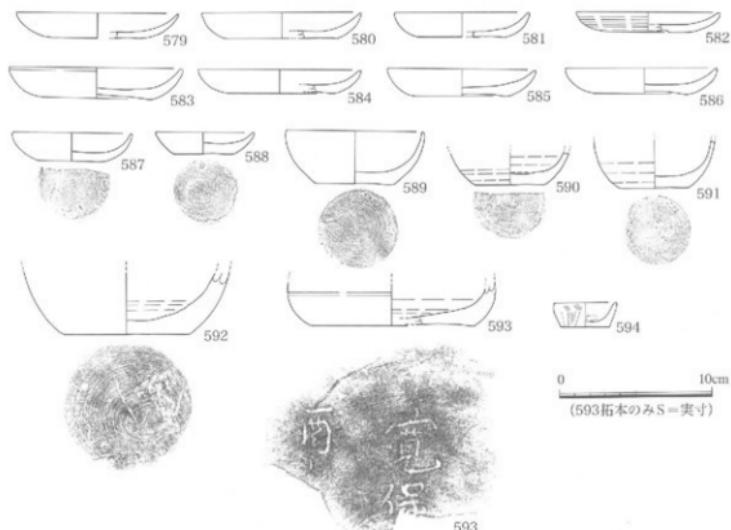


Fig.49 出土遺物実測図 土師質土器小皿、杯、器種不明

法、法量ともバリエーションがある。このうち579・580は、形態、法量が先の陽刻文小皿に共通する。

579は口径10.6cm、器高1.7cm。口縁部内面に回転ナデ、体部外面ヨコナデ、外底は直線方向のナデである。580は口径10.4cm、器高1.7cm。内面は摩耗し調整不明、体部外面と外底は回転ケズリの後回転ナデを施す。口縁部に強い灯芯油痕が残る。581は口径8.8cm、器高1.6cm。内面はナデ、外面は口縁部回転ナデ体部回転ケズリ、外底は回転ケズリを施す。口縁部に灯芯油痕が残る。582は外底中央を削り出し、クリ底とする。口径9.2cm、器高1.3cm。内面回転ナデ、口縁部から外底にかけて回転ケズリを施す。587は口径7.8cm、器高1.8cmとやや器高が高い。底部は厚く、内底中央が緩やかに盛り上がる。内外面回転ナデ、外底には回転系切り痕が残る。588は口径6.5cm、器高1.4cm。底部は厚く、内底中央が緩やかに盛り上がる。内外面回転ナデ、外底には回転系切り痕が残る。

③褐色系小皿 (Fig.49)

583～586はにぶい黄橙～にぶい橙色の胎土をもつ無文の土師質土器小皿である。583は口径11.1cm、器高2.2cm。口縁部内面は回転方向のナデ、外面ヨコナデ、内底と外底には直線方向のナデを施す。584は口径10.6cm、器高1.5cm。口縁部内面は回転方向のナデ、外面ヨコナデ、内底と外底には不定方向のナデを施す。585・586は口径9.6～9.8cm、器高1.8cm。外面ヨコナデ、内面と外底に不定方向のナデ。585には白色系陽刻文小皿と同様の纖維状原体による擦痕を認める。

(2) 杯 (Fig.49)

589～591は灰白色の胎土をもつ土師質土器杯で、体部が口縁部に向かって内湾気味に立ち上がる。内外面回転ナデ、外底に回転糸切り痕を残す。589は口径8.8cm、器高3.5cmを測る。

(3) 手捏土器、器種不明 (Fig.49)

594は灰白色の胎土をもつ小型の手捏土器で、口径3.8cm、器高1.7cmを測る。内面ナデ、内底はユビオサエ、外面には縦方向の粗いナデ、外底は不定方向のナデである。

593は灰白色の胎土をもつ底部片で器種不明。内底には強いロクロ目、体部外面下位にはケズリ痕が残る。外底に「寛保□□酉□」の墨書きを伴う。寛保年間は1741～1744年であり、当資料は寛保1辛酉年（1741年）のものと考えられる。

底部片592は胎土がぶい橙色を呈する。内面ロクロ目、外面ヨコナデ、外底回転糸切りで、体部外面には後述する白色系小皿と同様の繊維状原体による細かな擦痕が認められる。

3. 窯道具、その他

窯道具では、窯詰め道具（匣鉢）、製品の重ね焼き用の道具（ハマ、円錐ピン）、焼成台（トチン、チャツ、その他の焼き台）が出土している。出土点数は破片数にして匣鉢796点、ハマ127点、トチン228点、チャツ1点、焼台8点、であり、この他にも、窯体の部材、土型などが少量出土している。

(1) 匣鉢

匣鉢は形態別に見て大きく、A類：円筒形（595～657）、B類：小判形又は不整形（659～663）、C類：箱形（664・665）の3タイプのものに分かれる。出土点数は破片数にして、A類776点、B類18点、C類2点である。製作技法では、円筒形タイプのA類がロクロ成形、箱形のC類がタララ成形によっている。一方、小判形・不整形タイプのB類には、体部をロクロ成形した後に変形させ、楕円形もしくは変形の底部に貼り合わせて製作するものと、タララ成形のものがある。

① 匣鉢A類 (Fig.50～55)

匣鉢A類は、さらにA-a類：器高が高いもの（595～613）、A-b類：器高がやや低いもの（614～648）、A-c類：器高が低いもの（649～652）の2タイプに細区分でき、各々に大・小の法量分化が認められる。595～597はA-a類の小型品で、口径11～13cm器高7～9cm台のものである。598～613は、A-a類の大型品で、口径14～18cm器高9～12cm台を測る。614～636はA-b類の小型品で、口径12～17cm器高4～6cm台。637～648はA-b類の大型品で、口径18～24cm器高6～8cm台を測る。649・651はA-c類の小型品で、口径16～18cm器高4cm台、650・652はA-c類の大型品で、口径22～28cm器高4～5cm台を測る。また、653～658はA類の口縁・底部・体部片である。

また匣鉢A類には、口縁部から切り込むアーチ状又は三角形の抉りをもつものと、体部下位に円孔を穿つものの2タイプが見られる。抉り、穿孔数が確認できる個体では、606・618・619が対面する2方向に抉り、604・612・623が3方に抉り、608・635が対面する2方向に円孔、・610・611・626・632・638・639・643・645～648が3方に円孔をもつ。

体部内外面は回転ナデ。外底は、静止糸切りのもの（596～602・604～613・615～624・626～636・638・640～644・646～648・651～653）と回転糸切りのもの（603・645）、凹凸面をなすもの

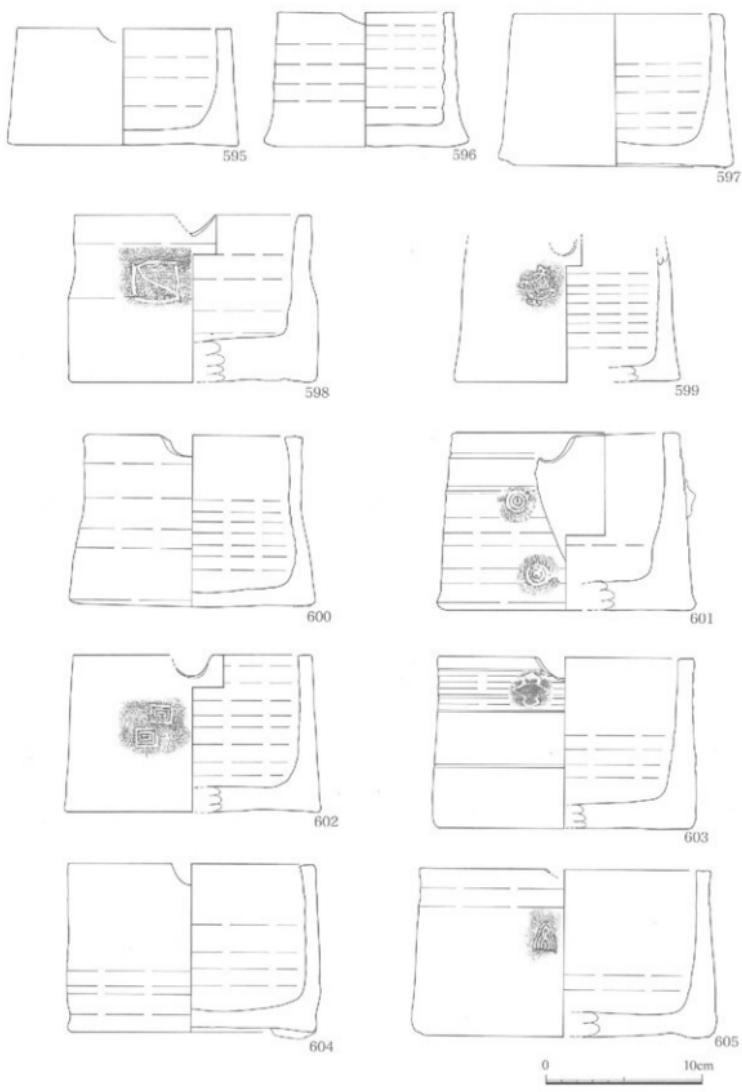


Fig.50 出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(1)

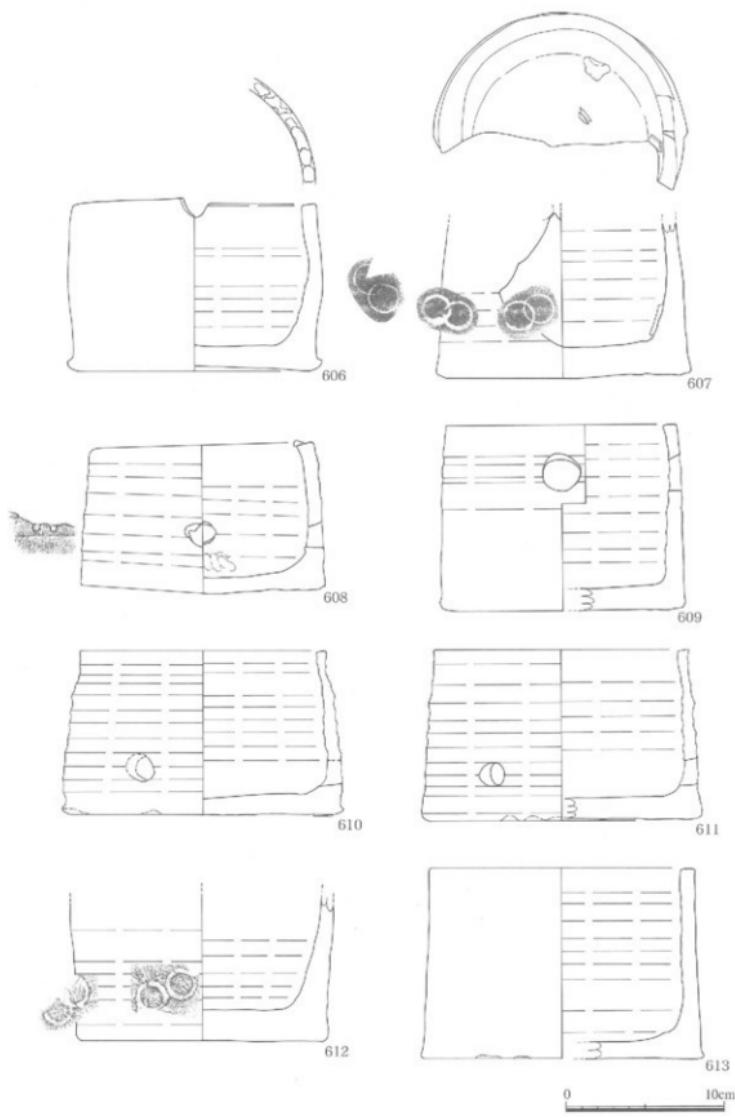


Fig.51 出土遺物実測図 窯道具一匣鉢 (2)

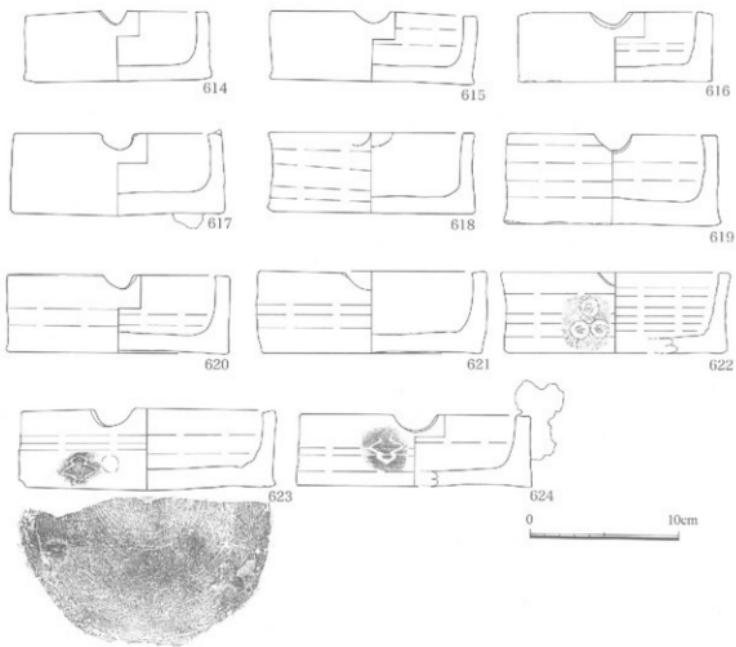


Fig.52 出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(3)

(614・639・649・650)、ナデを施すもの(637)がある。胎土は灰白色、灰黄褐色、にぶい黄橙色等で、胎土中には長石の角砾と石英粗砂、黒色粒を多く含む。

また、多くには使用痕跡が認められ、内底への灰白色砂の付着、体部外面への自然釉が観察される。また、口縁端部と外底周縁に灰白色的粘土帯の一部が付着、あるいは粘土帯剥離痕を残すもの(595～600・602・605～613・615～620・622～623・625～628・634・635・637・638・643・648・649・655)、灰白色の閉子状の粘土塊が付着、あるいはその剥離痕を残すもの(604・630・635・636)があり、多くが口縁端部と外底周縁に粘土帯取り外しに伴うとみられる敲打痕を残す。この他の使用痕跡としては、639が外底の2箇所に円形の窯道具又は製品の剥離痕を残しており、匣裏面を焼き台に転用したと考えられる。633は匣鉢、焼台、土塊が溶着したものであるが、匣、焼台が共に片側が欠損し、下側に砂礫を多く含む土塊が溶着している。焼き台下側の土塊は直角に抉れており、段状の床面又は窯道具の上面に落ちた土塊と思われる。焼台の下面は周縁に粘土帯が溶着している。634は焼成時の破損品で、匣鉢2個が片側欠損した状態で溶着している。下側の匣内には蹠を含む褐色土が多量に入り溶着しているが、遺物の有無は確認できない。上下匣の底部と口縁部の間には灰白色の粘土帯が挟まれている。627は内面中位に灰釉陶器の口縁部が溶着している。

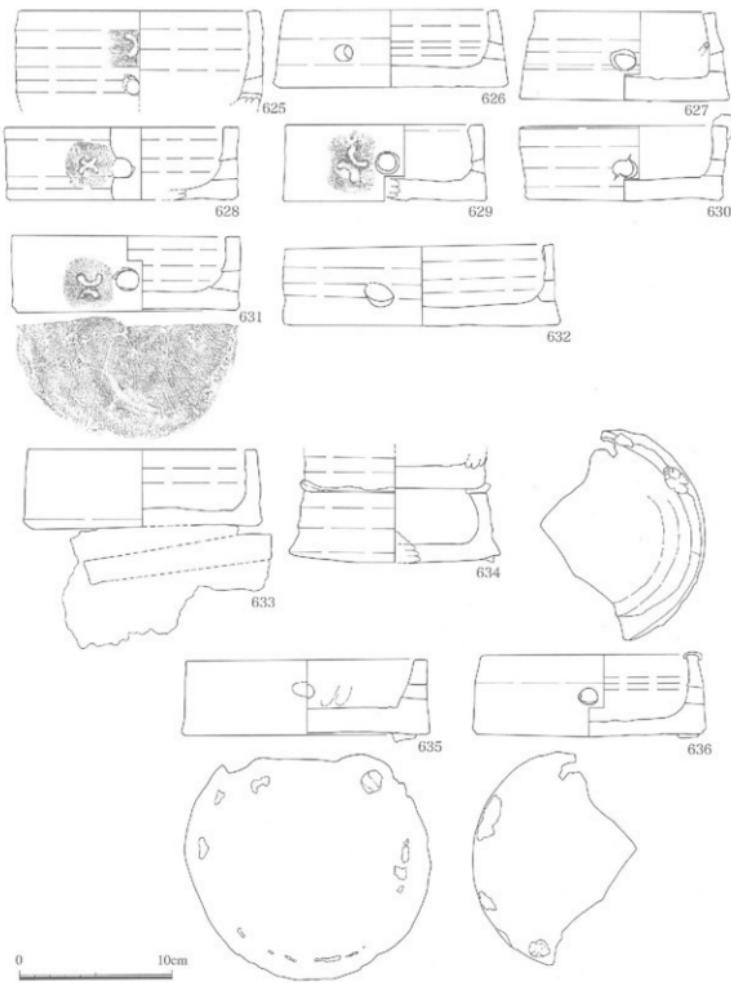


Fig.53 出土遺物実測図 窯道具一匣鉢 (4)

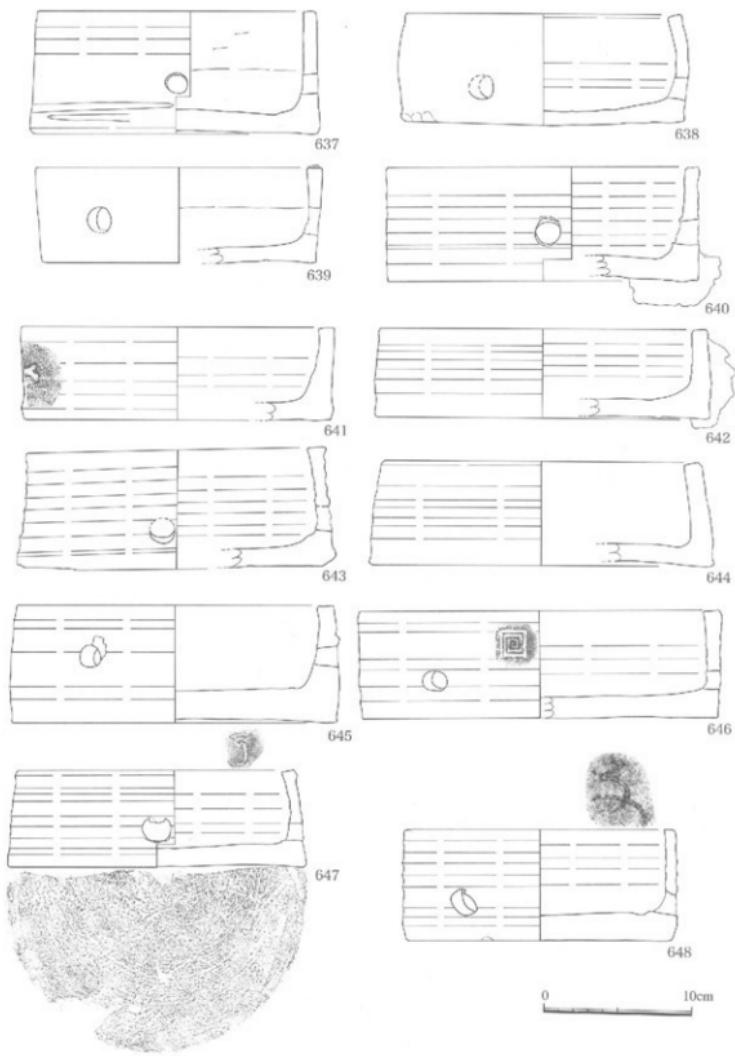


Fig.54 出土遺物実測図 窯道具一匣鉢 (5)

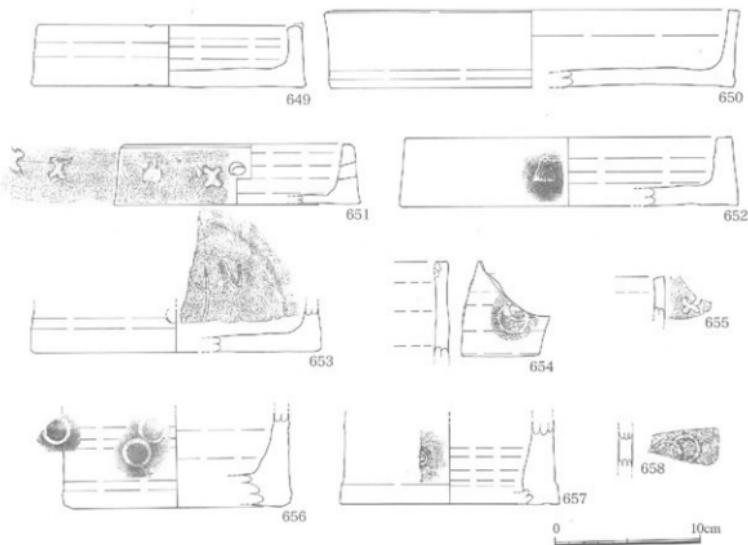


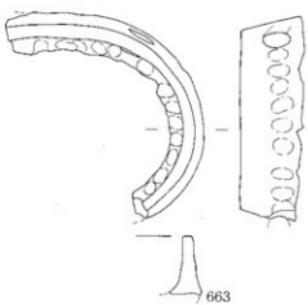
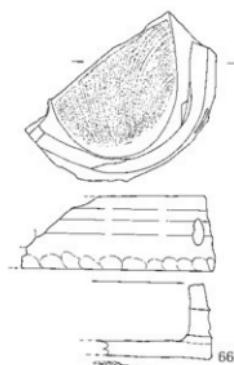
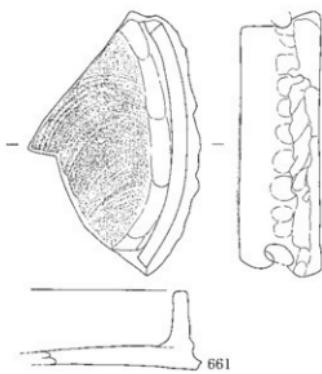
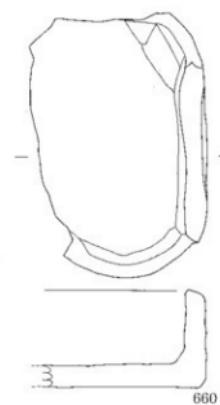
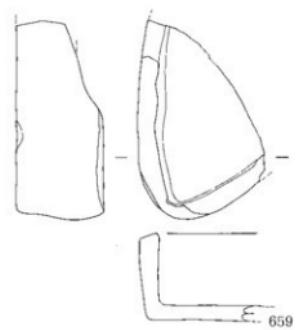
Fig.55 出土遺物実測図 窯道具一匣鉢 (6)

②匣鉢B類 (Fig.56)

659～663は匣鉢B類で、タタラ成形のもの659・660と、底部貼り合わせのもの661・662・663の2者がある。

660は小判形の形態をもつもので、体部の穿孔、抉りの有無は確認できていない。タタラ成形で、体部外面ユビオサエとナデ、外底ナデ、内面には布目痕を認める。659は舟形状に先端が尖る形態をもつもので、体部の穿孔、抉りの有無は確認できない。タタラ成形で、体部外面にヨコハケ、外底にハケ、内面に布目痕を認める。

662は小判形で、四方に穿孔を穿つタイプと思われる。ロクロ成形による筒状の体部を小判形に変形させ、タタラ作りの底部に貼り合わせて成形している。体部内外面は回転ナデ、外面はロクロ目顯著。底部は内外面とも静止糸切り痕が残る。体部と底部の境に接合痕が明瞭に残り、接合部附近にあたる底部脇と内底周縁に連続したユビオサエを施す。661も662と同様の規格、成形法をもつもので、小判形の体部の長軸部分が残存している。穿孔は2穴を確認しており、同じく四方に穿孔を穿つものとみられる。体部内外面回転ナデで、外面はロクロ目顯著。底部は内外面とも静止糸切り。体部と底部の境に接合痕が明瞭に残り、底部脇に連続したユビオサエ、内底周縁に強いヨコ



0 10cm

Fig.56 出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(7)

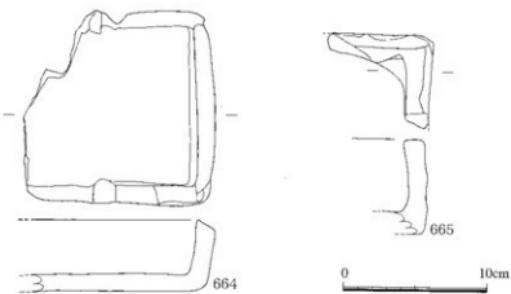


Fig.57 出土遺物実測図 窯道具一匣鉢(8)

ナデを施す。663もほぼ同様の規格とみられるもので、底部が接合部で剥離している。体部内外面回転ナデ。口縁端部と底部との接合面に糸切り痕が残る。接合部付近にあたる体部外面下位と内面下位に連続したユビオサエ痕が残る。

③匣鉢C類 (Fig.57)

664・665は匣鉢C類である。664は長辺の双方に2穴の穿孔を確認しており、2穴または4穴の穿孔をもつものと考えられる。体部外面はユビオサエとユビナデ、外底は直線方向のナデ、口縁端部はヘラナデ。体部内面と内底には布目が残る。665も箱形であるが、体部外面とともにユビオサエとナデを施している。

なお今回出土した匣鉢には、A類に刻印あるいはヘラ記号を認めている。匣鉢の総破片数796点のうち刻印は24点、ヘラ記号は6点を認め、全体の約4%である。608・628・629・631・641・655は半歳竹管を上下に625・651は左右に組み合わせた刺突文。605・652は迷路状の文様、599は丸にクルス文、612・656は丸文2個を組み合わせた印刻を施す。607・654・658も丸文2個の組み合わせによる輪違い文。622は丸文3個の組み合わせ。601・657は三重丸。602・646は雷文、603・623・624は三重の菱文を印刻する。598は体部外面上位に方形角内に斜線、644は内底に3本の並行線、648・653は内底に「子」字状のヘラ記号、647も内底に「了」字状のヘラ記号をもつ。

(2) トチン

トチンは形態別にA類:器高が高いもの(666~690)、B類:器高がやや低いもの(691~709)がある。いずれも手捏ね成形で、外面にはユビオサエ、ユビナデ痕が多く残る。出上点数は破片数にして、A類154点、B類74点である。

①トチンA類 (Fig.58-59)

A類には、法量別に、上下面径5~7cm器高7~9cm台の小型品(666~668)、上下面径7~8cm器高10~13cm台の中型品(669~688)、上下面径9~10cm器高13cm台の大型品(680・690)等がある。いずれも上下面に凸凹を認め、側面にユビオサエ、ナデを施す。また672・678・682では側面にシボリ目、671・675・678・683では掌で握り締めることによる強いユビ痕が残っている。

使用痕跡としては、多くの側体に上下面の周縁に敲打痕を認める。また、殆どの個体で側面に自

然釉の付着を認める。一方、上下面では679で径5.2cmの円形の高台痕を残して周囲に自然釉が掛かり、682でも上面に同様の高台痕を認める。671は上面に径5.5cmの円形の高台痕を残して周囲に自然釉が掛かり、周縁に灰白色の扁平な粘土塊が付着する。686は上面に径6.5cmの円形の高台痕を残して周囲に自然釉が掛かり、周縁に黄橙色の扁平な粘土塊が付着する。685は上面に径7.0cmの円形の高台痕を残して周囲に自然釉が掛かり、周縁の三方に灰白色の扁平な粘土塊が付着する。また、上下面の側面に砂が付着する。672・673は上下面の周縁に灰白色の扁平な粘土塊が付着する。710も上面に黄橙色の扁平な粘土塊が付着する。668も上面の周縁に灰白色の粘土塊が溶着している。

②トチンB類 (Fig.60)

B類には、法量別に、上下面径4~6cm器高3~6cm台の小型品(691~704)、上下面径7~8cm器高7~9cm台の中型品(705~707)、上下面径9~12cm器高11~13cm台の大型品(708・709)等がある。

使用痕跡としては、殆どの個体に上下面周縁への敲打痕を認める。709は上面には円形の製品痕を残して周縁に自然釉が掛かり、周縁に灰白色の扁平な粘土塊とその一部が溶着している。706は径7.0cmの円形の製品痕を残して周縁に自然釉が掛かり、周縁に灰白色の扁平な粘土塊とその一部が溶着している。705は側面に自然釉が強く流れ、上面に製品の高台痕が残る。695は側面に自然釉が掛かり、下面に粗い黒土が溶着する。702・704は上面に灰白色的粘土が付着する。703は上面に浅黄橙色の扁平な粘土塊が付着する。700は上面には灰白色的粘土片が付着する。

なお今回出土したトチンは、総破片数228点のうち、34点に体部側面又は上下面への刻印、24点にヘラ記号を認めている。669・674・676~679・711~715・718~719は半截竹管の刺突を上下に、716・717は半截竹管の刺突を左右に組み合わせたもの。710は半截竹管に棒状の刺突を組み合わせた「山」字状の刺突文。670・682・728~731は円形の刺突2個を組み合わせたもの。727も円形の刺突3個の組み合わせ、681・687・688・721~725は円形刺突4個の組み合わせである。680・683・691・696・705・732~746は「×」字状のヘラ記号。694・695も「十」字状のヘラ記号をもつ。684は「×」字状のヘラ記号とヘラ描きによる文字「たつ四月十九日□□右エ門」(高六右エ門か)を記す。748は「×」字状のヘラ記号とヘラ描きによる文字「七ノ」を記している。

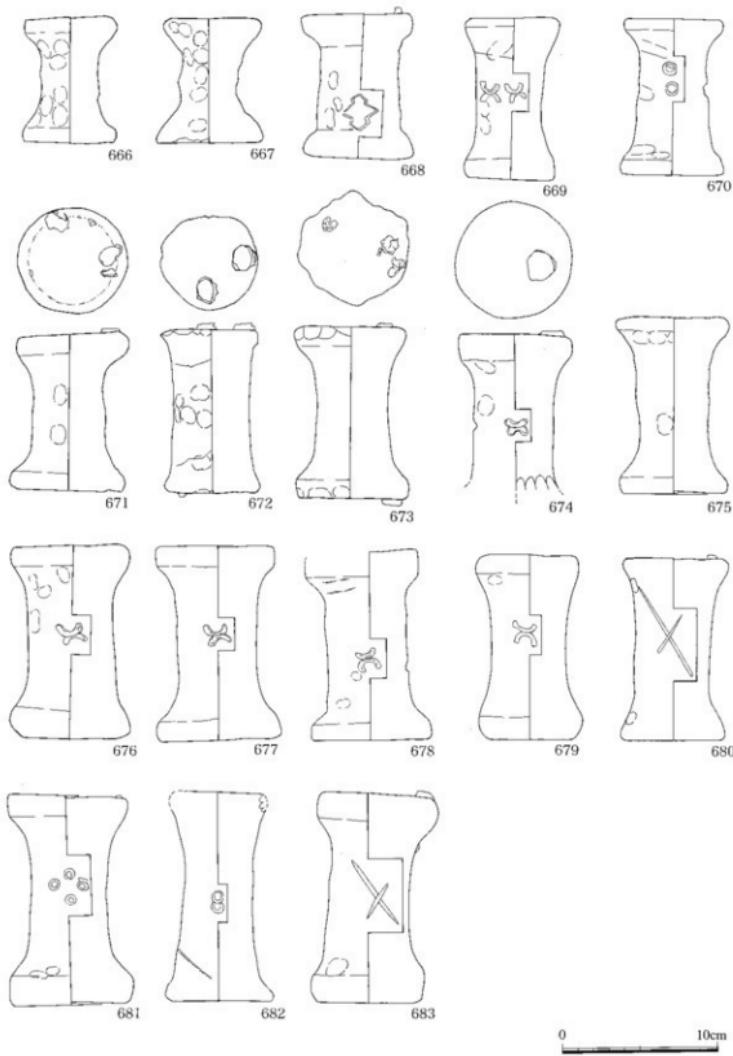


Fig.58 出土遺物実測図 窯道具—トチン(1)

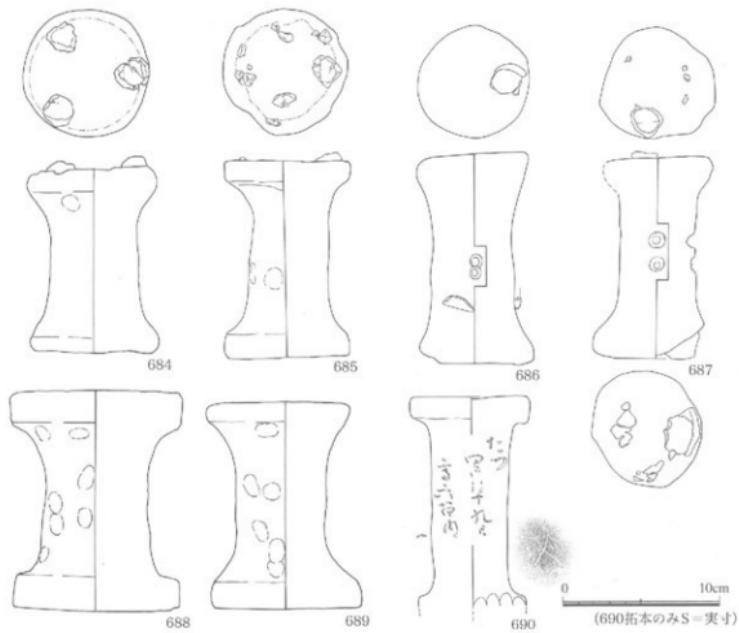


Fig.59 出土遺物実測図 窯道具一トチン (2)